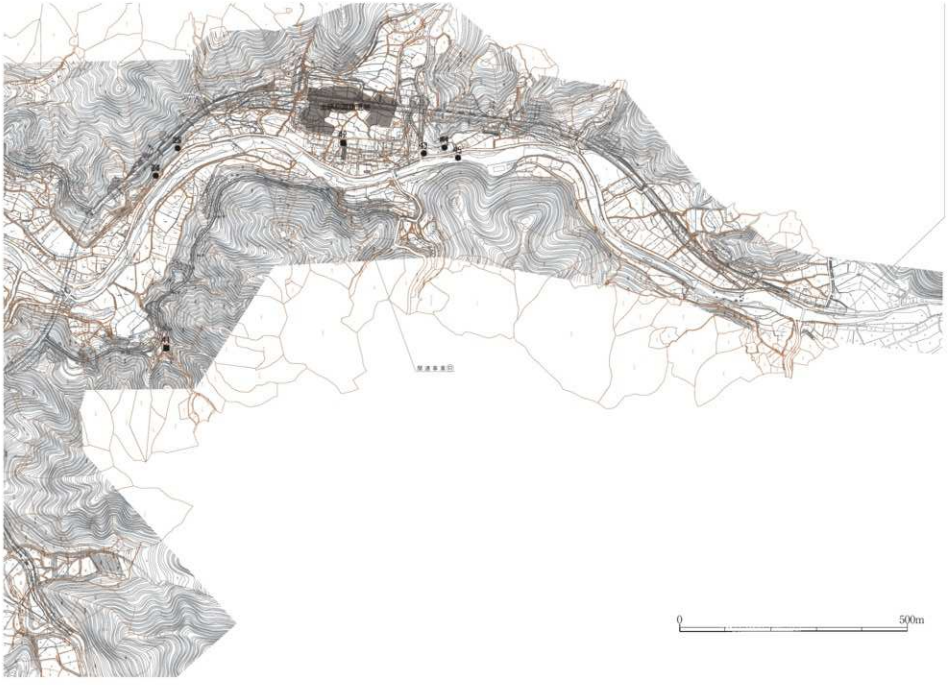


第５図　石造物等調査地点位置図３（上伊良原地区）

Ⅱ　位置と環境

地理的、歴史的環境についてもほかの報告書で繰り返し記されている。ここでは、周辺で行われた既往の石造物の調査、そしてダム建設予定地内の発掘調査で既に報告された石造物を紹介する。

伊良原での民俗調査に関して、是非紹介しておかなければならないＡ５版39頁の小冊子がある。昭和52年（1977）３月に刊行された『伊良原の民俗　Ⅰ（石造遺物編）』で、発行は「美夜古郷土史学校　民俗調査班」。「美夜古」は『和名抄』で「豊前国京都郡」に付された訓である。この郷土史学校は昭和51年に発足し、現在も活動している。

本書の序文に次のようにある。

> ダム建設の是非はともかく、下伊良原地区は従来文化財調査も不十分であった。このため、急激に進みつつある過疎化の波の中で、伊良原地区の、特に民俗文化財の保持は年々困難になってきている。このため、わたくし達は民俗文化財の実態を調査し、記録するため伊良原谷にはいり、祭と石造遺物の調査を最初におこなった。四季おりおりの変化の中で、８ミリをまわし、カメラのシャッターを切ってきた。

そして40点の石造物・小堂を写真と文を付して紹介している。今日、文化財保護にかかる行政の体制は当時に比べれば遙かに充実したといえるが、それはかえって何事も行政任せとする傾向をもたらし、このような自主的な、地道な調査を行う団体や機会は減少しているのではなかろうか。そういう意味で現状は、「指定文化財」・「埋蔵文化財」と認定されていない諸々の文化財にとっては当時以上に危機的な状況にあると言っても過言ではなかろう。

上記に次いで、先述したダム建設に伴う福岡県教育委員会による民俗文化財の調査がなされ、成果は「伊良原ー民俗文化財の調査ー」（『福岡県文化財調査報告書』第143集、1999）として刊行された。その中では、「第６章　伊良原の信仰」と題して、上伊良原・下伊良原両高木神社の歴史と祭礼・奉納される芸能、「クミ」・「イエ」で祀る神仏などを紹介し、「上（下）伊良原地区の信仰対象（祠・堂・聖地・聖物等）およびその行事」の100件ほどが付表として掲載された（本書、表２へ一部改変転載）。そのときの成果が今次の調査の基礎的なデータとなっていることは先述した。

次に、ダム建設に伴う発掘調査で検出・出土した石造物および関連する遺跡を紹介する。

上伊良原榎遺跡（第６図　「伊良原Ⅱ」『福岡県文化財調査報告書』第229集、2011）

この遺跡は上伊良原高木神社の直ぐ北東に位置し、上伊良原地区の集団移転地造成および関連する工事に先立って調査を行ったものである。南北長200ｍ、東西長55ｍほどの調査区はⅠ～Ⅲ区に分けられて、そのうちの標高が低い北西部のⅢ区の３号集石と称したところから五輪塔などが検出された。調査前から石塔が露出しており、「もともと岩塊が集中して」いて、「近世以降の耕地造成の際にはその岩塊を取り込むように石垣を築」き、その「上面には五輪塔や宝篋印塔、石臼や陶磁器片が散乱」、これらは「耕作の際に邪魔になるためにこの場所に集めたのではないか」と想定されている。石塔はいずれも凝灰岩製である。

五輪塔　１は頂部の一部を欠損する空風輪。高さ23cm、最大径は風輪部で17cmとなる。２は最大幅28cm、高さ17cmの火輪で、頂部の枘穴は平面円形となる。３も最大幅28cm、高さ15cmの火輪で、これも枘穴は円形である。４は平面円形の水輪で、最大径26cm、高さ19cmである。上下両面がわずかに凹み、特に頂部中央付近に径6cm弱、深さ1cmほどの明らかな凹みがあって舎利孔の可

能性が指摘されている。

宝篋印塔　5は欠損が著しいが、九輪を表現したと思われる沈線が残ることから宝篋印塔の相輪であろう。残存高52cm。下端に枘が残る。

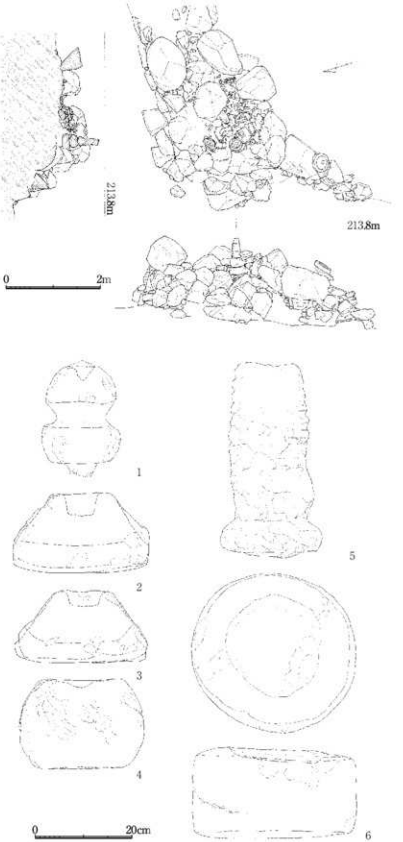
宝塔　6は宝塔の台座とされる。最大径35cm、高さ19cmの円柱状を呈し、上面に径20cm、深さ2cmほどの凹みがある。上部を安定させるためのものであろうか。

下伊良原塚本遺跡（第7図「伊良原Ⅲ」『福岡県文化財調査報告書』第232集、2012）

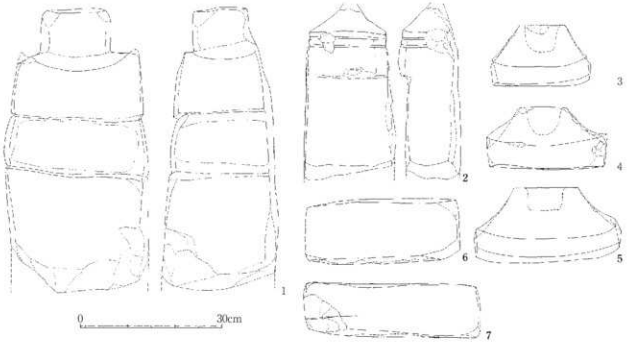
祓川左岸の水田から7mほど高い位置にもやはり水田が営まれているが、そこに地名の起源となったと思われる直径20～22m、高さ3.2～5.7mほどの塚状の高まりがある。昭和27年（1952）に編集された『伊良原村史』には、「塚本にも石のとびらのついた古墳」があると記述されるが、調査の結果、これは地山中の巨石を誤認したものであろうと推測している。

石塔群はこの塚状の高まりの頂部平坦面の南西隅付近に露出する自然石巨岩の周辺にあり、「水田造成等で本来の位置から動かされた石塔が寄せられたものであろうと判断」されている。また、昭和52年に刊行された『石造遺物編』に板碑の記述だけがないことから、この板碑はそれ以降に持ち込まれたものと推測されている。

検出状況は次のようである。巨岩の上に五輪塔地輪を置いて、その上に同火輪3個が大きいものから順に重ねられていた。巨岩の北東に一石五輪塔が、南東に板碑が、それぞれ巨岩に建てかけられてい



第6図　上伊良原榎遺跡石造物検出状態・石塔実測図（1/80, 1/8）



第７図　下伊良原塚本遺跡石塔実測図（1/8）

た。いずれも凝灰岩製である。

一石五輪塔　1は基部を欠くが、残存高59cm、最大幅（水輪）30cm、同厚（地輪）23cmを測る。空風輪は方柱状に表現されて空輪・風輪の区別はない。それ以下も全体に方柱状に成形されている。火輪は隅棟が大きく反り上がる様子を表現するようであるが、端部を欠損。地輪・水輪・火輪の各部は段で区別されるが、正面・両側面のみで背面には段がない。

板碑　2も基部・頂部を欠失し、残存高は36cm。頂部は尖るようで、その先端は背面の真上に来るようである。頸部上位の二条線、その下位の段など板碑の形式を踏襲している。梵字等は見えない。

五輪塔　地輪の一つ（6）は水田石垣に組み込まれていたものである。火輪の最大のものは軒の一辺長が30cm、高さ16cmである。

以上のほかに、縄文早期押型文土器や後期磨消縄文土器、13世紀を中心とする中世遺物包含層が高まりの周辺に堆積し、若干の柱穴も検出されたが、高まり上の平坦部に遺構はなく、近世遺物が散見されるだけであった。

下伊良原下地ヶ原遺跡（第8・73～81図「伊良原Ⅳ」『福岡県文化財調査報告書』第257集、2017）

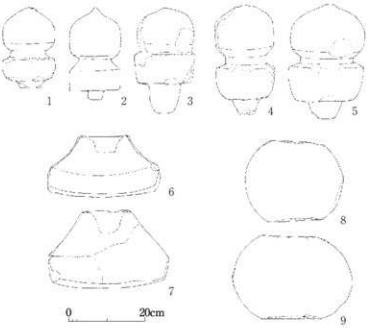
本書でも下地ヶ原石塔群として取り上げた地区は、下伊良原下地ヶ原遺跡Ⅴ区として平成26年度（2014）に発掘調査を行っている。石塔群の所在したところはダム建設に伴う墓地改葬で墓石等を壊して埋めた廃棄坑が随所にあるが、なお数基の墓壙を検出している。石塔群と墓壙の配置図を重ねているので参照されたい。

なお、この調査の報告では水輪2点、火輪2点、空風輪1点が紹介されている。このうち、Ⅴ区出土の火輪2点は倒置して石階段として利用されたらしい。いずれも凝灰岩製。他の3点は地形的に下位の所から出土したものであるが、Ⅴ区から転落した可能性は否定できない。

下伊良原寺ノ谷遺跡（第92図「伊良原Ⅰ」『福岡県文化財調査報告書』第222集、2009）

瑞応寺石塔群の西側、眼下の水田下で調査された遺跡である（第92図参照）。後述するように、瑞応寺石塔群は他の石造物群の在り方と明らかに様相が異なり、この近接して調査された下伊良原寺ノ谷遺跡（瑞応寺跡を想定）との関連が想起される。

調査では8棟の掘立柱建物跡と1棟の礎石建物跡を検出、それらの配置が概ね3群に分かれ、それぞれで2～3度の建て替えが想定されている。建物跡は通常の側柱あるいは総柱のものだけではなく、縁（あるいは庇）が付されたり、柱筋の交点に柱が無い部分があるなど複雑な様相をもつものも存する。出土遺物から15～17世紀に比定される。報告では、貞享年中（1684～87）に小倉安国寺（北九州市）の久山和尚によって中興された瑞応寺に比定されている。同報告に引用された「祥雲山瑞応寺開闢記」によれば、



第8図　下伊良原下地ヶ原遺跡出土石塔実測図（1/8）

> 開闢不詳、伝々、当時往古者大伽藍、而宝幢（？）亦頗繁栄也、雖然侵為洪水、殿堂門廡尽為烏有矣唯存者、本尊釈迦如来像（安阿弥之作也）内佛薬師如来像、並今上皇帝尊牌三座而已、其境至今在祥山処（後山則寺境内也至今俗号寺山）南限紬河之堺、北窮道路、前面逼巨川、而称寺田今成穂秡、里民為田畠也焉（又元和八年之頃所記之由書略存于今也）曽忠真公及自播陽移焉於当国、長宣公被領此地、依於大河之辺、建立釈迦堂一宇、喜捨玄米三石、而被充香花之供、于時白川愚睡者、白官移寺於い天神林処、則今之寺地是也、又云、当寺有旧末四十九院焉、然今及敗壊、難委悉、略以伝聞之処記左者也、貞享元年安国寺久山和尚弟子梵州僧住職、于時請安国二世久山和尚、為中興開山、自爾安国寺為末寺也

「忠真公」は小倉小笠原藩初代藩主で、寛永9年（1632）に播州明石藩から移封、15万石を領した。「長宣公」は忠真の次男であるが、正保3年（1646）に長子永安が廃嫡されたために嫡子となったが、寛文3年（1663）に33歳で没した（家督は異母弟忠雄が継いだ）。ちなみに、「安阿弥」は通常鎌倉時代の仏師快慶を指す。

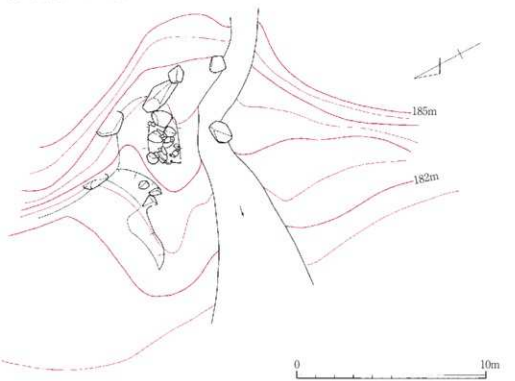
Ⅲ　調査の内容

先述したように、対象地での石造物等の調査は過去に２度実施されている。昭和51年度に美夜古郷土史学校民俗調査班によって実施・報告された『伊良原の民俗Ⅰ（石造遺物編）』を以下では『石造遺物編』、平成10年度（1998）に福岡県教育委員会によってダム建設予定地内を対象に報告がなされた「伊良原ー民俗文化財の調査ー」（『福岡県文化財調査報告書』第143集、以下では『県報』143と略する。）の中で、「伊良原の信仰」（木村達美）に「表４　上伊良原地区の信仰対象（祠・堂・聖地・聖物等）およびその行事」・「表５　下伊良原地区の信仰対象（祠・堂・聖地・聖物等）およびその行事」として一覧表が掲載されているが、その元データとして「石造物等調査カード」が作成されている。これを以下では「調査カード」と表記する。今回の報告にあたっては、上記資料に加えて、21年度の調査担当が入手した出所が記載されていない資料も使用している。これを、「21年資料」とする。

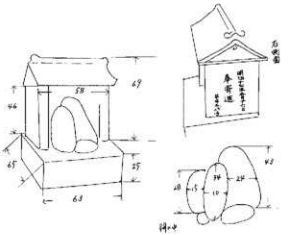
１　榎谷厄神社（図版１、第９・10図）

高座集落は祓川左岸に位置するが、この神社は右岸の、山裾の水田から30ｍ以上高い位置に存したようである。地図には濃淡のドットを落としているが、所在地とされる地番から見ると淡いドットの位置から低い部分となり、地形測量図に見える標高180ｍ余りの地点は濃いドットの付近となる。詳細な位置を特定できないでいる。

地形測量図から読むと、急傾斜地の中に小さな平坦地があって、そこに大小の礫が集中していたようである。平坦地は人為的に造成された可能性も考えられよう。この平坦地の南端に幅１ｍ余りの沢あるいは谷川が流れていた。



第９図　榎谷厄神社周辺地形測量図（1/200）



第 10 図　榎谷厄神社（「調査カード」）

調査時には石祠は既に持ち去られていたが、現在は下伊良原高木神社境内に移設されている。石祠は花崗岩の台石の上に、奥壁を左右の側壁が挟み込むように３枚の板状の石材を立てた上に一石から彫り出した屋根を載せている。屋根の妻には懸魚と梁（？）、そして棟の両端には鬼瓦を表現する。全体に表面加工は丁寧であるが、奥壁背面には工具痕がよく残る。凝灰岩製。なお、図版１－１に「旧社地」を示したが、第 10 図と背後の巨石の形状が異なっていて、厳密な意味で石祠が置かれた場所ではなく、その一帯の景観というものである。

平成９年に作成された「調査カード」には、大きな岩を背にして「凝灰岩で造られた石室の中にご神体が５つ？（現在は３つ）安置されている。」として、スケッチ図と写真が付されている。向かって右側面に、「明治十七年（1884）五月十六日　奉寄進　平井千代子」と刻まれる。

『石造遺物編』には「高座･山ノ神」と項目を立てて、「須佐神社分祠とも呼ばれる」として紹介され、「御神体は高さ 40 センチと 30 センチの２個の川原石」、「明治十七年五月十七日　奉寄進界十公子」と明瞭に刻まれている」とあるが、「調査カード」の記載が正しい。

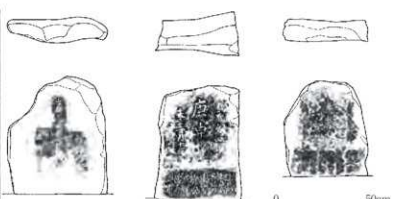
年に一度清掃、幣を替え、田植後と秋に集落内の水神様などとともに座元の家に祭壇を設けて祀り、食事を行っていたという。

2　高座庚申塔（図版１、第 11・12 図）

高座集落の北端近く、尾根筋先端の急斜面の山林にあり、２m四方ほどの小さな平坦地が造成されていた。調査時には既に下伊良原高木神社境内へ仮移設されていて、現地調査はできなかった。

『石造遺物編』によると、高さ 65cm、幅 50cmの川原石（安山岩）で、南側、高座集落に向かう面に右から「享保十年（1725）　奉修念庚申塔　巳　五月吉日」とあり、「奉修念庚申塔」の真上に種

第 11 図　高座庚申塔
（「調査カード」）



第 12 図　高座・城山・岩屋河内庚申塔実測図（1/20）

子 𠀋（ウン：馬頭観音菩薩）が刻まれていた。ちなみに享保10年の干支は乙巳である。文字が刻まれた面はかなり滑らかとなっていてあるいは研磨されているかも知れないが、外縁に加工痕はない。

古くは独自の祀りがあったというが、「調査カード」作成の頃には榎谷厄神社などと一緒に祭礼が行われたという。

3　高座観音堂（図版1・2、第13・14図）

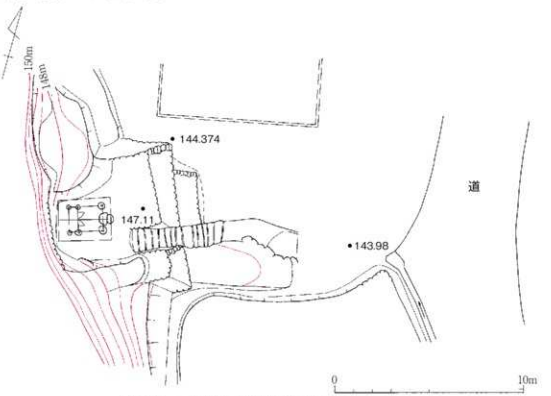
高座集落中程の西側山裾、前面の宅地より3mほど高いところに位置する。地形測量図を見ると明らかに山裾を掘削し、3m近い高さの石垣を積み上げて南北長7m弱、東西長5m強の平坦地を造成している。観音堂は平坦地の西端に置かれていた。

観音堂　1×1間、柱間1.27mの建物の奥に、仏像を安置するための内陣1間（奥行0.46m）を付した形状となり、棟を略東西にとった切妻造妻入となる。

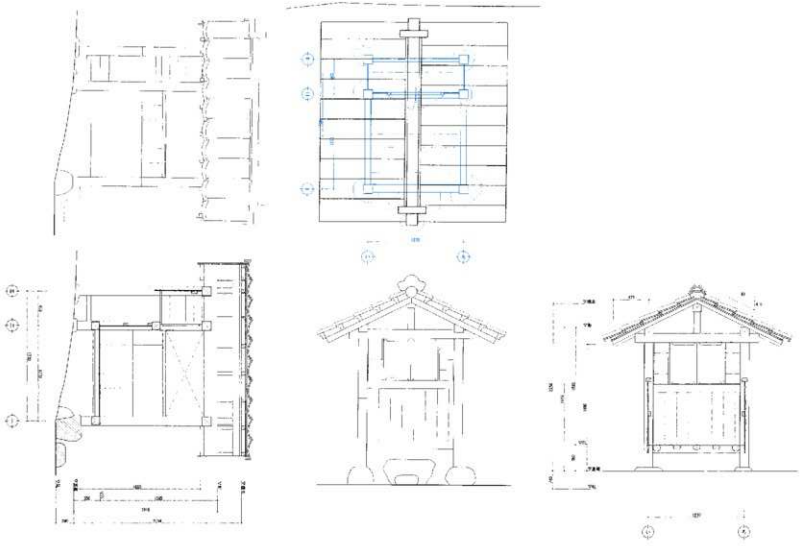
自然石の礎石の上に柱を建て、梁を載せて桁で繋ぎ折置組とする。貫を用いず、足元は敷居框、大引で固める。小屋組みは棟束を建てて棟木を載せ、垂木を配り、野地板・杉皮を張って葺き土を載せてセメント瓦で葺く。

外壁は真壁竪羽目板張り目板押さえとし、内壁は外壁裏面の化粧板壁、床は板張り、天井は屋根裏垂木現しとしている。内陣の建具は板の開き戸である。

なお、内部東面梁張付の木札に、「観音堂瓦葺替控・・・昭和参拾参年八月拾弐日葺替・・・」と墨書があり、昭和33年（1958）に屋根葺き替えがなされたことがわかる。セメント瓦の普及時期については定かでないが、近隣のみやこ町勝山では昭和38年に建築された住宅にセメント瓦が使用されていたことを筆者は明瞭に記憶しており、昭和33年の瓦葺き替えにセメント瓦が使用されたと考えてもよいのであろう。



第13図　高座観音堂周辺地形測量図（1/200）

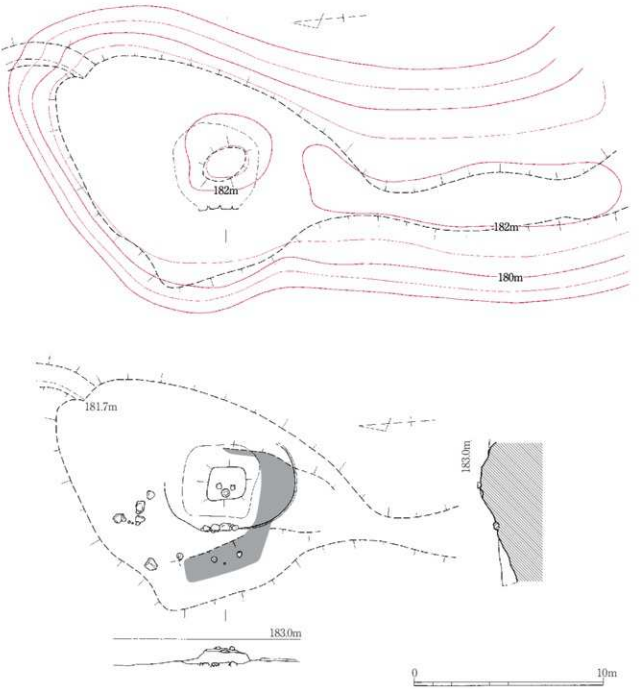


第 14 図　高座観音堂実測図（1/50）

菩薩形坐像　『県報』143では菩薩形坐像と表記され、「石造　像高36.5cm、近代」と説明される。写真から判断するに剃髪姿に袈裟をまとって胸元で合掌するように見えるが、「調査カード」には「髪の一部に黒い彩色有り、顔面と袖に赤い彩色有り」と記されていて、そうであれば剃髪を意図したものではないのであろう。蓮弁を浮き彫りにした高さ14cm、直径33cmの石製円形台座の上に別造りで高さ50cmの光背と一体となる坐像を置いていた。

盆前に清掃、灯明を上げて提灯を下げ、8月17日にお参りと盆踊りをしていたという。

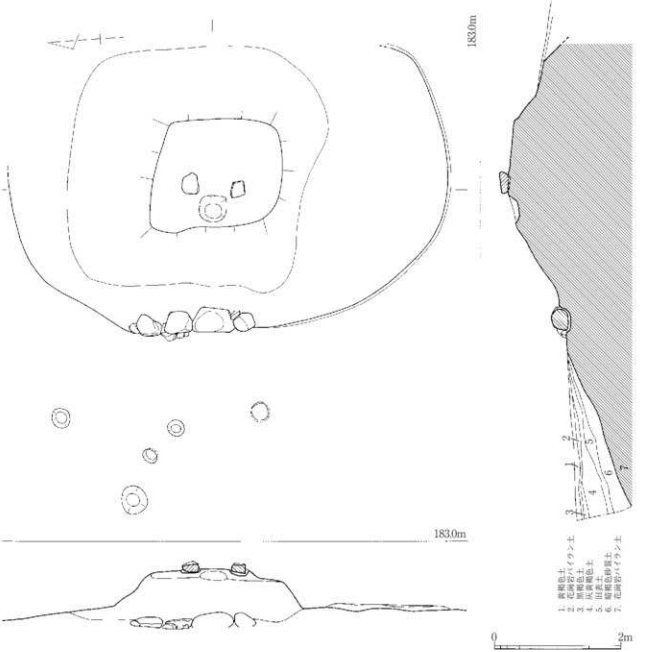
4　広瀬庚申塚稲荷社（図版2・3、第15～17図）



第15図　広瀬庚申塚稲荷社跡周辺地形測量図（1/200）

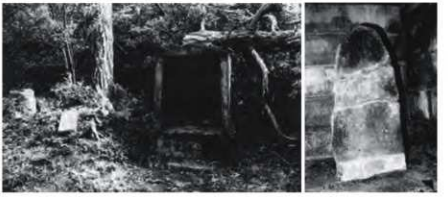
広瀬の集落は祓川左岸にあるが、この社は祓川右岸の小さく張り出した丘陵頂部、集落を一望できる場所に位置する。眼下の水田面との比高差は30 mほどを測り、西および南側は急峻な斜面となる。地形測量図でも北側に取り付いている参道は、北側に大きく迂回していたものと思われる。

この社殿も調査時には移設されていて基壇を残すのみであった。『石造遺物編』・「調査カード」に当時の写真やスケッチ図が付されていて、それによると高さ72cm、幅34cmの安山岩の板状川原石が立てられ、中央上部に「稲何大明神」、左右に一段低く「二月廿八日」、「享保十五年（1730）」、下段に8名の人名が刻まれている。また、左の日付の上の割れた部分の上下にも文字が見える。「二月」の右上にがんだれが、その下に破損部を挟んで「ノ」状の文字が見え、上方は干支の「戌」であるかも知れないが、下位の文字は不明である。「二月」の上には縦にしっかりとした線が引かれていて、「十」の下半であろう。したがって「戌□十二月二八日」と復元できる。これも文字が刻まれた面はとても滑らかとなるが、明瞭な加工痕は見えない。『石造遺物編』の写真ではよくわからないが、「調査カード」に付された写真では現状と同じく横方向に筋が入っていて、3片に割れ



第16図　広瀬庚申塚稲荷社跡基壇実測図（1/60）

ていたことがわかる。この立石の三方はコンクリートブロックを積んで切妻となる屋根が架けられるが、屋根・床の詳細は判読できない。



第17図　広瀬庚申塚稲荷社（「調査カード」）

以前は5月に現地で祭礼を行っていたが、昭和40年代（？）の頃から、田植後の6月に「稲荷大明神祭・水神社祭・土用祭」をまとめて地区内で持ち回りで行っていると「調査カード」にある。

基壇の調査　幅の狭い尾根線の先端付近に、上辺2m、下辺3.7mほどの方形に高さ0.8mの基壇が残存していた。基壇の西辺に近いところには芯々で0.8mほどを隔てて辺長0.2～0.3mの方形に近い石材を平坦面を上にして据えていた。ブロック造には不釣り合いものであり、それ以前の覆屋に使用されていた可能性がある。また、礎石の間中央付近の西に辺長0.4～0.5m、深さ0.1mほどの浅い穴があって、調査時のメモには「灯明穴」とある。あるいは拝石の抜き取り穴か。さらに上記に対応する下辺には、2m弱の長さで石列が残っていた。石段の痕跡であろうか。

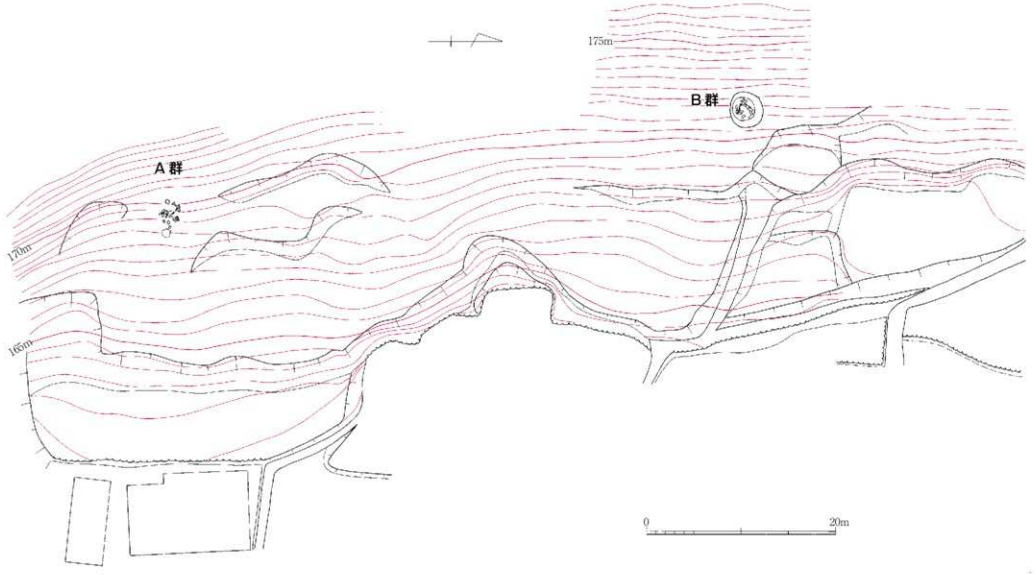
基壇は花崗岩バイラン土を削り出していて、正面となる西側および南側に客土して平坦地を拡張していた。また、正面に当たる付近に5個の柱穴が検出されたが、規則性は看取できず、性格は不明である。

5　広瀬山の神神社（図版3、第18図）

今回の調査では所在を確認できておらず、地番にドットを落としている。『石造遺物編』に記載がなく、「調査カード」も空白であるが、成果品である『県報』143・表5には祠に自然石を祀っている旨が記されている。

今次調査で集められた資料に写真のコピーが付されていて、それによれば地表から数cm程度わずかに高くなる頂部が平坦な巨石の上に。自然石を積み上げて小規模な祠を造り、その内部に棒状の川原石を2個（？）立て据えたようである。現在、下伊良原高木神社境内に移設された「広瀬山の神神社」は御神体と思われる小さな自然石のみで、覆屋であった石祠は所在不明である。

第18図　広瀬山の神神社（21年資料）



第19図　山の神石塔群周辺地形測量図（1/400）

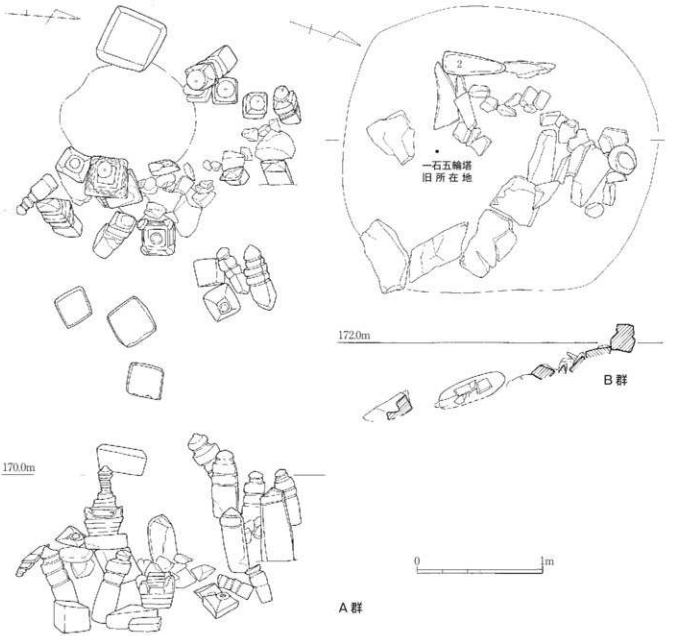
6　山の神石塔群（図版3・4、第19～21図）

集落の南西山腹に位置する。南側をA群、北側をB群とするが、両者は60mほどの距離を隔てるものの、いずれも標高170～172m付近に位置する。また、山麓の宅地の標高が162mほどであり、民家に近い位置にあるといえる。

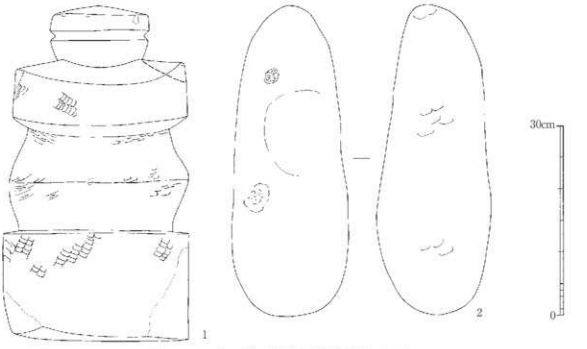
A群　直径1mほどの杉の株の東および北に集中する石塔群。2基の宝篋印塔、9基の一石五輪塔、2基の碑伝や五輪塔からなる。原位置をあまり動いていないと思われ、宝篋印塔が東側に、板碑が南にそれぞれ置かれていて、これらはほぼ2mの範囲にある。

紀年銘や梵字などは見られないが、伊良原ダム事業地内で最も良好に遺存する石塔群である。一部は新設された共同無縁墓地へ移設された。

B群　直径2.2～2.5m程の不整円形といった落ち込みの中で、自然石とともに五輪塔の一部や立て置かれていたと思われる乳棒形の川原石などが検出された。ただ、落ち込みの深さの記録を失



第20図　山の神石塔群検出状況実測図（1/30）



第 21 図　山の神石塔群石塔実測図（1/6）

念している。また、この落ち込みの下位７m付近に、ここから転落したと考えられる一石五輪塔が横転していた。

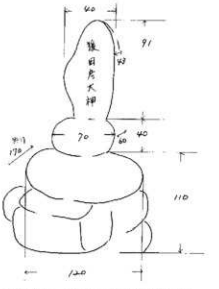
石塔等　これらの石塔はほとんどが共同墓地に移設するなどして、個別の記録作成を行っていない。転落した一石五輪塔と立石のみ図化しているので紹介する。

１は凝灰岩製の一石五輪塔。ほぼ完存するといってよく、総高約 53cm、最大幅は地輪で約 30cm を測る。図側面も正面と同じ法量である。水輪は中位付近に弱い稜を看取できるが、上面観は隅丸方形に近いようである。火輪は軒口が広くなり、軒上辺が浅いU字形を描いて、隅棟の勾配はごく弱い。風輪は低く、径が大きくなり、下端が火輪に埋まるようになる。空輪も低く、成形時には風輪と一体的に削り出されたようで、両者の境にしっかりとした沈線を刻む。加工痕が随所に観察できる。立石としたものは乳棒形の花崗岩で、総高 49cm、最大径は下端付近にあって 18cmほどを測る。正面観・側面観ともに同様の形状となっていて、自然のものとは思えない。成形時の敲打痕と思われるものが若干見える。

7　釜の河内猿田彦大神（図版 5、第 22・23 図）

第 22 図　釜の河内猿田彦大神（「21 年資料」）

国道496号線から釜の河内へ分かれる道路は、分岐して250mほどは山深い谷を通り、釜の河内川を跨ぐ（茗荷谷橋、明賀谷橋）とわずかであるが視界が開ける。釜の河内猿田彦大神はこの橋のたもと、南西に祀られていた（写真左、橋の欄干が写る）。だが、『石造遺物編』には、「部落中央部・・・細く曲がった旧道の途中に建てられている。」とあって、掲載された写真にはバックにかなり広い水田が広がっていて（写真右）、左の写真とは明らかに背景が異なっている。「調査カード」には、砂防ダム建設に際して茗荷谷橋へ移設したとある。



第23図　釜の河内猿田彦大神スケッチ図（「調査カード」）

「調査カード」のスケッチに依れば、複数の自然石を組み合わせた高さ1.1mの基壇、自然石を横置きした高さ0.4mの台石、その上に「猿田彦大神」と刻まれた高さ0.91mの角が取れた安山岩が立ち、総高は2.4mほどとなる。石材の中央付近が大きく凹んでいるが、整った文字がまっすぐに刻まれる。また、向かって右側面に「大正九年（1920）九月吉日　釜の河内中」と小さく刻まれている。

「昔は1ヶ月おきの庚申の日に、持ち回りで食事をしていたが、10年以前より年に1回2月に行っている。組中10軒。」と「調査カードに」ある。

8　釜の河内観音堂（図版5・6、第24・25図）

国道496号線から分岐して1.5kmほど入った釜の河内集落内に観音堂があり、今は釜の河内猿田彦大神の碑が町道を挟んでその斜め前に移設されている。第3図にドットを落とした位置からさらに200m程奥になる。観音堂自体はダム事業によって直接影響を受ける位置にないが、現在は撤去されていて調査報告がなされていることから、関連する事業が及んだものか。

観音堂　釜の河内集落を見下ろす高所にあり、正面に伊良原富士を望むように東面して建っていた。桁行2間、梁行1間だが、やはり桁方向の柱間が2.00・0.61mと大きく異なり、梁間も1.85mと違う寸法になっている。屋根は入母屋造で妻入とし、赤瓦を葺いている。

基礎はコンクリートブロックの布基礎で、土台を敷いて柱を建て、桁で繋ぎ、梁を載せて京呂組とする。小屋組みは見えないが、棟木を載せて垂木を配り、野地板を張った上に瓦を置く。

外壁は内陣は大壁竪羽目板張り目板張り、内陣は真壁竪羽目板張り目板押さえとしている。内陣は外壁裏面の化粧板壁、床は板張り、天井は竿縁天井板張りとする。内陣の建具は格子戸の四枚建て引き違い戸としている。

内部西面板壁に木札が打ち付けてある。「改築覚昭和三十五年（1960）八月七日」とあり、以下「敷地寄附」者名、「総工費　五萬弐阡圓也」、「建築者（大工）」名、「組内氏名」が墨書されている。

観音菩薩坐像　2軀あって、さらにそれを模したとされる石仏も2軀ある。『県報』143では、両坐像ともに「木造、江戸時代」と評され、残存状態はよくない。

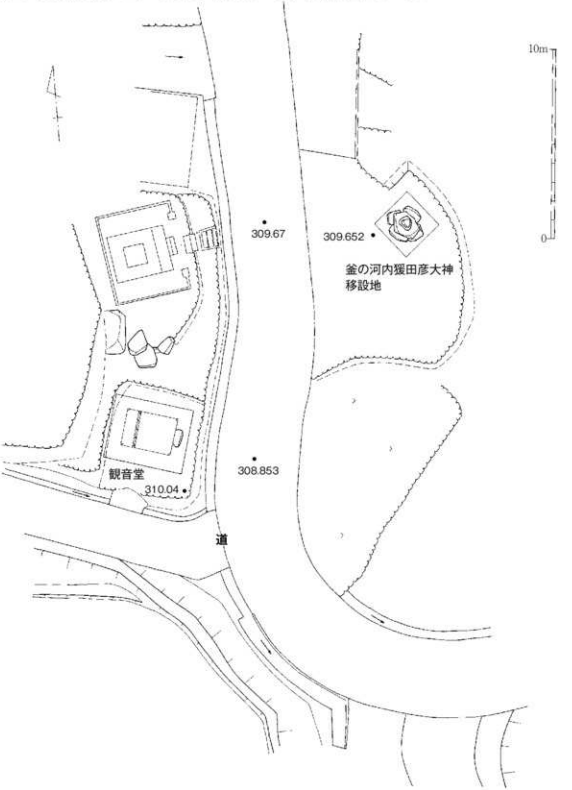
1軀は台座・持物を失い、高い宝冠と円形の頭光を持つ像高50cmの坐像で、背面中央部、頸下付近から「天保十二年（1841）二月、仝村の守」と縦に記し、その下位の腰付近に寄進者と思われる15名の名前が列挙されている。

今1軀は、やはり高い宝冠を被り、台座が残る。『県報』では「像高49.0cm」とあるが、手元の

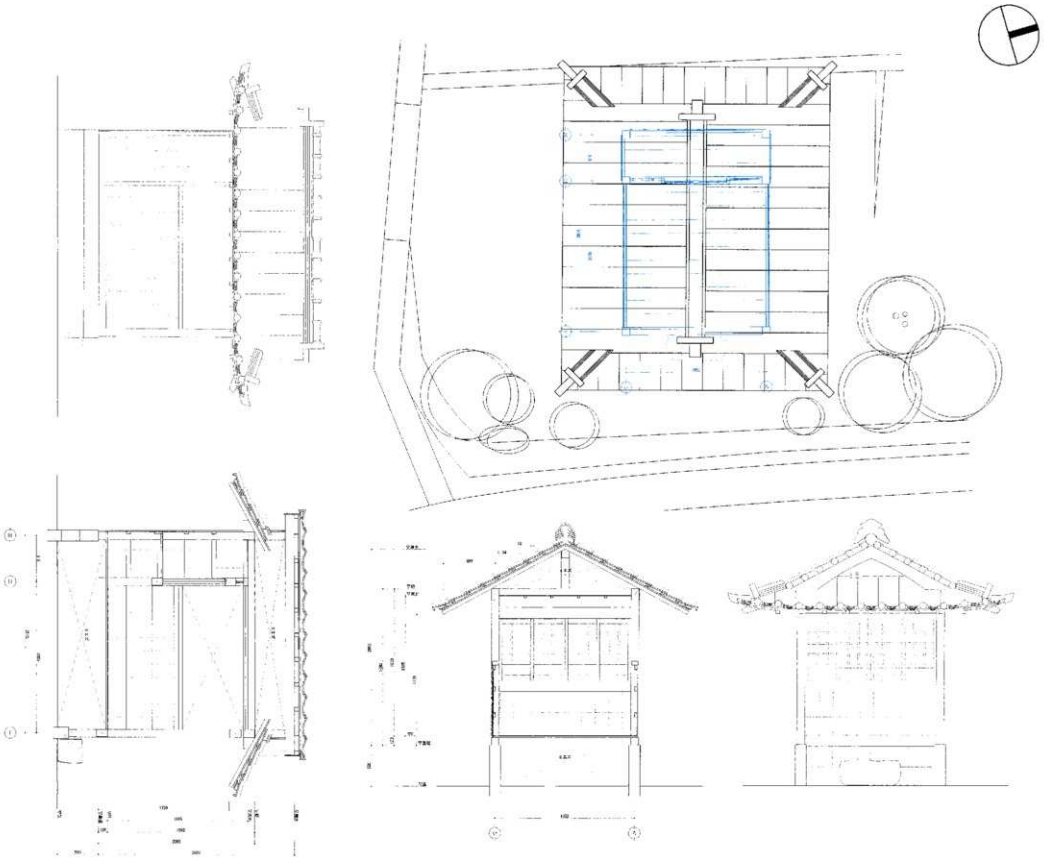
写真では先述の坐像と同程度の高さであり、これは台座を含めた数値と思われる。先の坐像に比して細身となる。これは無銘。

石仏は1躯の台座裏に「寄進　昭和三十五年　人名（夫婦連名）」、外れた後輪の柄にも「明治四□□　吉村千歳　佛師　小倉京町○番地」と銘がある。

「昔は月に一度、子どもを含め夜簡単な（おにぎり、煮染め）食事をしていた。現在は月に1度常会として主婦が集まっている。」と「調査カード」に記載されている。



第24図　釜の河内観音堂周辺地形測量図（1/200）



第 25 図　釜の河内観音堂実測図（1/50）

9　竹ノ畑石塔群（図版6・37、第26～28図）

祓川左岸に沿っていた国道496号線が荒戸橋で川を渡って右岸にルートをとった辺りから南が下伊良原の中心部となる。荒戸橋の東側は、国道脇の標高165m付近に一連の水田が広がり、さらにそこから20m以上高い186～202m付近にも開墾により水田や畑が作られていて、この竹ノ畑石塔群は上段耕作地の東側山麓に位置する。石塔群主要部の直下に新しい墓地が造成されており、そこでも転落したと思われる石塔若干を認めたことから、主要部をA群、墓地をB群として報告する。

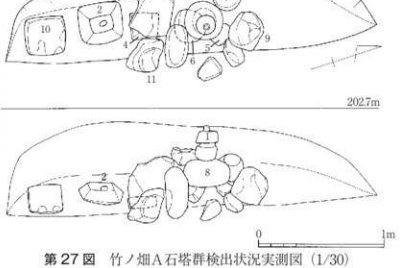
なお、この石塔群は『石造遺物編』でも「東溝・五輪塔（残欠）」としてとして、「野積みされた石コロの上に、うずくまっており風情がある」五輪塔が紹介されている。ここで「東溝」は誤りで、正しくは「東講」である。

A群　等高線に沿って長さ3m、幅0.6mほどの平坦面を造成し、そこに凝灰岩製五輪塔（空風輪1，火輪3，水輪4，地輪2）や茶臼片などが無秩序に集中していた。造成面に遺構はなく、各部の数が揃わないことからも、開墾時に寄せ集めたものであることも考えられる。

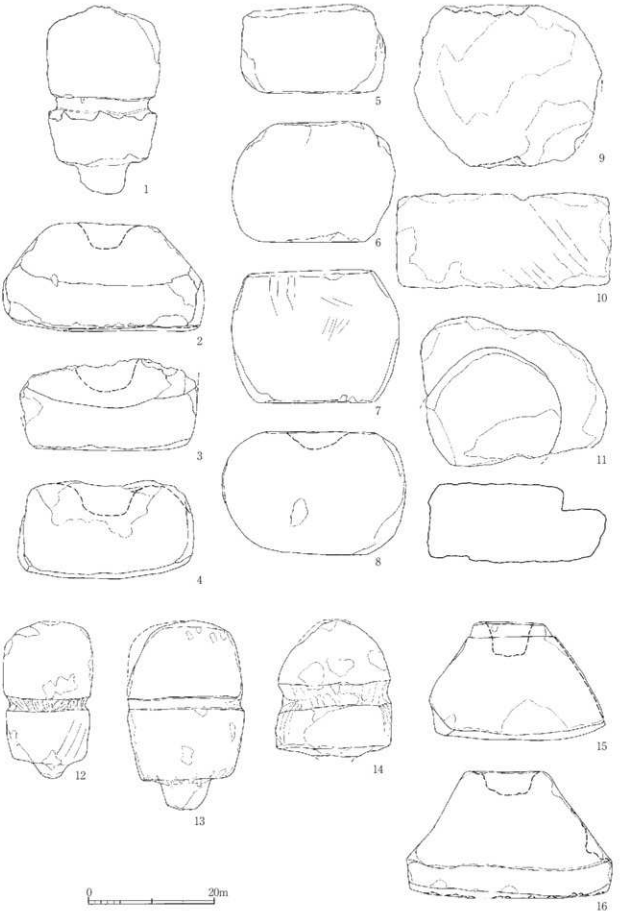
B群　空風輪2点，火輪2点，宝珠らしきものが1点あるが、散在していてA群から転落したものと考えられる。

石塔等　1～11はA群である。上記の点数は調査時の所見を転載したものであるが、個別実測図では水輪と注記するものが5点があって地輪は1点となっている。個別写真でも判然としない部分があるが、5に示した小型の「水輪」が損壊を受けているようであるが地輪であるかも知れない。A群の火輪2点は破損が著しく、水輪も同様に不整となるものが多い。ことに9は表面の大部分が剥離している。特記すべきは多くの五輪塔が灰白色の軟質の凝灰岩であるのに対して、7は同じ凝灰岩でも灰黒色に近く、遺存状態がよい。単に石質によるものか、あるいは製作年代の違いによるものであろうか。また、8では頂部に径20cm、深さ3cm弱の明らかな凹みが穿たれていて、組み合わせには不要なものであることから別の意図があるのであろう。11は茶臼である。スリ目が見えないほど摩滅する。

第26図　竹ノ畑石塔群周辺地形測量図（1/200）



第27図　竹ノ畑A石塔群検出状況実測図（1/30）

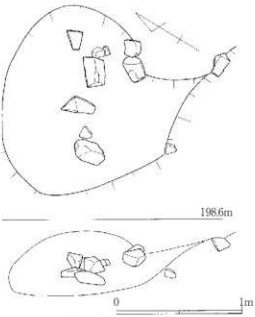


第 28 図　竹ノ畑A石塔群石塔等実測図（1/6）

12～16はB群。12・13の空風輪は境の刳り込みが甘く、空輪・風輪を棒状に成形した後に沈線を刻むような感である。14は「宝珠らしきもの」と記されたものである。刳り込みがやはり甘いが、先の2点に比して幅広く別種の器形を思わせる。ただ、下面では枘が欠損しているようなので、空風輪としてよいものと思われる。火輪のうち15は頂部に小さく段を付している。

10　竹ノ畑小市郎様（図版7、第29・30図）

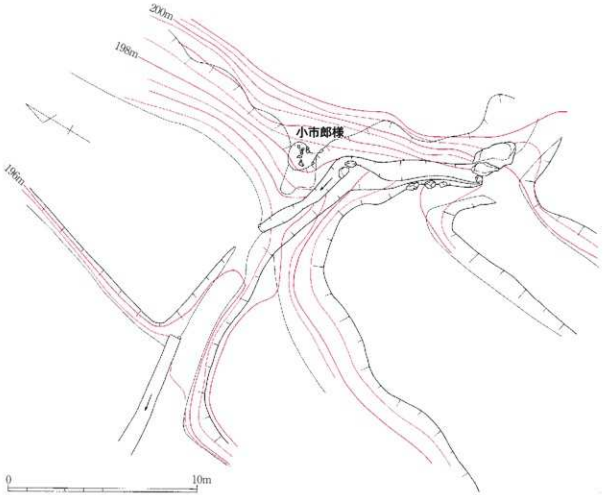
竹ノ畑石塔群の南、同じ丘陵裾に所在する。南北1m、東西2mほどの狭い平坦面を造成し、川原石を並べていたようであるが、現状ではそのような痕跡は認められない。花崗岩の自然礫である。「21年資料」に「案内してくれた女性は別の小石を小市郎として祀ると言う。」とメモ書きがある。



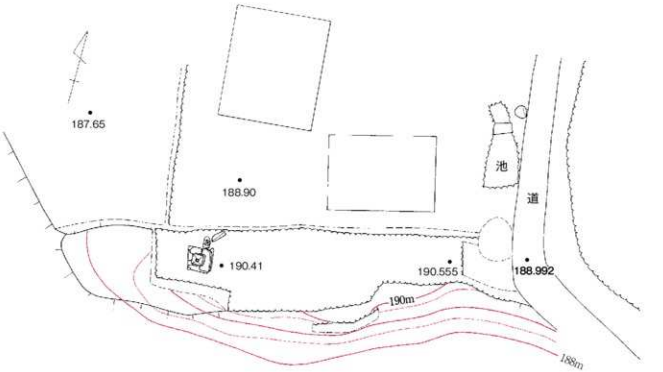
第29図　竹ノ畑小市郎様実測図（1/30）

11　竹ノ畑大日堂（図版7、第31～33図）

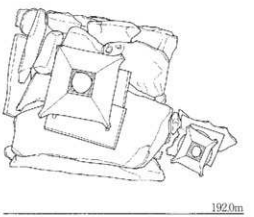
竹ノ畑石塔群の直下に広がる上段耕作地の南端の宅地の脇に位置するが、宅地に比べて1mほど高く造成されている。境内は幅3.0～4.5m、奥行き19mで東

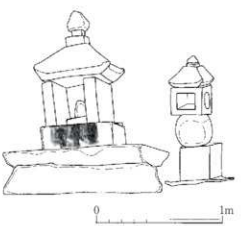


第30図　竹ノ畑小市郎様周辺地形測量図（1/200）

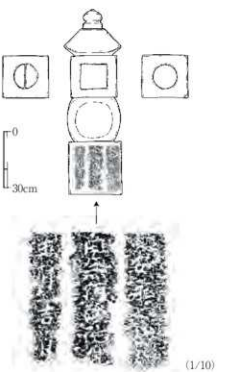


第 31 図　竹ノ畑大日堂周辺地形測量図（1/200）





第 32 図　竹ノ畑大日堂石祠等実測図
（1/30）



第 33 図　竹ノ畑大日堂石灯籠実測図
（1/30）

西に長い形状となり、大日堂はその西端に置かれて東面する。南側に一段高い基壇を築いて石祠を、北側に近接して灯籠を置く。いずれも凝灰岩製で、表面が荒れている。

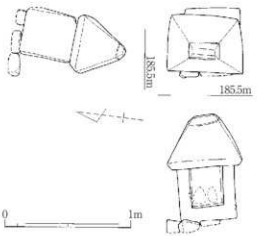
石祠　基壇は正面となる東側では大型の石材を用いて２段ともに１石であるが、背面となる西側では小振りの石材を組み合わせていた。石祠は、高さ20cmの２石を組み合わせて辺長60cmの方形とし、銘文を刻む台石、側壁から奥壁の半分までが１石からなるＬ字形の２枚の加工材を立て、その上に辺長60cmで五輪塔の火輪のような形状の屋根を置き、そしてその頂部に方形の露盤、さらにその上に宝珠を置き、基壇を除いて総高1.1 mほどとなる。露盤と宝珠は一石からなる。台石東面の銘文は、「安永七年戊戌（1778）　奉寄進　五月吉日」である。

内部には「自然石と宮地嶽三女神が祀られている」（傍点筆者）と「調査カード」にメモが残るが、宮地嶽神社の祭神は「神功皇后・勝村大神・勝頼大神」で、通常三女神と言えば「宗像神」であり、混乱したものか。

灯籠　石祠のようなしっかりとした基壇はないが、基底部にはやはり石材が置かれている。下から辺長28cmの立方体となる石、同幅の偏球形の石、幅25cm、高さ22cmほどとやや小振りな中空の火袋となる石、そして頂部に宝珠を置く傘形となる石からなり、総高は98cmほどである。火袋は正面に13×15cmの方形窓、右側面に直径13cmの円形窓、左側面には同大の半円形窓が穿たれ、背面は塞がる。

これも最下段の立方体台石の東面に、「安永七戊戌　南無阿弥陀仏　五月吉日」と刻まれる。

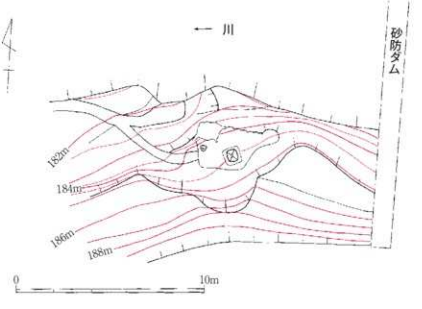
古老の言では、「激しい神様なので、子供を近づけてはいけないと言われていた」という。



第34図　東講の石祠実測図（1/30）

12　東講の石祠（図版8、第34・35図）

竹ノ畑大日堂と竹ノ畑川を挟んで南東近く、川沿いの斜面を造成して石祠を置いている。

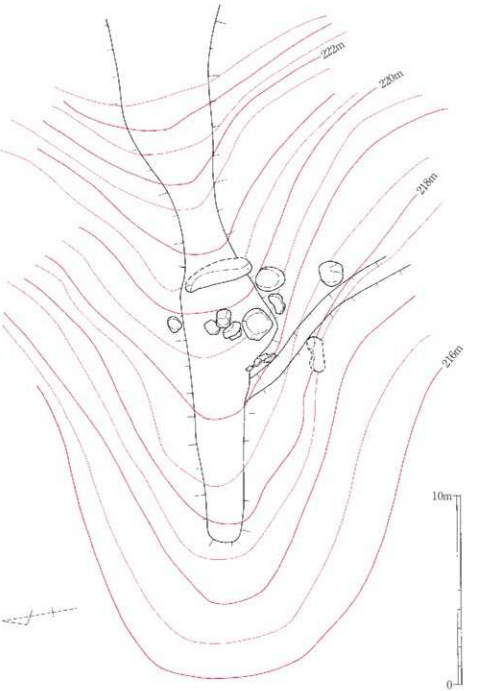


第35図　東講の石祠周辺地形測量図（1/200）

石祠は勾配がきつく丈高寄棟となる屋根と、三方の壁と底が一石から彫り出された身屋の二石からなる。記録類では「調査カード」に花崗岩･凝灰岩、実測図には安山岩と石材が記されているが、凝灰岩である。総高 84cm、屋根の高さは 42cm、身屋の正面幅 44cm、奥行きは 34cmである。

内部に高さ 10cm前後の恵比寿・大黒の土人形が置かれている。

なお、『石造遺物編』に「⑮東溝（講の誤り）・石祠」が掲載されているが、それはここで紹介した石祠から約 500 mほどの南、「明秀寺裏の墓地より三米ほど登った山裾に据えられており」、「花崗岩により作られた家形の祠」、「ご本尊と思われる川原石が安置」などとあって、位置と写真から明らかに別のもので、明秀寺裏の石祠は今回の調査から漏れている、あるいは調査時に不明になっていたものか。

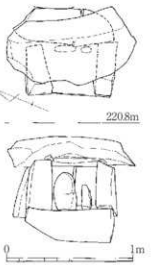


第 36 図　赤岩山神社周辺地形測量図（1/200）

13　赤岩山神社（図版8、第36・37図）

東講の石祠から150 mほど南、眼下の住宅から40 mほど上った標高220 mほどの山中にあり、微地形をみると小さな尾根線上に占地する。尾根線上には幅2～3 mの狭い平坦面があり、そこに露出する巨岩に寄り添うように置かれた石祠である。『石造遺物編』には「⑭東溝・厄神様」として紹介されている。

石祠はいずれも花崗岩の自然石を用いて、底石・三方の壁（奥壁は2枚）・天井を巧みに配し、内部に2個の川原石を立てて集落の方向、西側を向いていた。地表からの総高は0.85 m、天井の最大幅は1.03 mを測る。なお、花崗岩の稜は鋭く、表面は比較的平らかとなる。割石を整形したものでであろう。山麓の3家が祀っていたという。



第37図　赤岩山神社石祠実測図（1/30）

14　上ノ谷石塔群（図版9～11・37～40、第38～44図）

赤岩山神社の位置する斜面の南、200 mの付近に位置する。標高210 mほどで、ここも山麓の民家との比高は30 m余りある。

標高211 mの付近に5×10 mほどの平坦面が、その西側の標高210 mの付近にも奥行き5 mほどの平坦面がある。上段東端付近の一石五輪塔2基、五輪塔・立石などからなる一群をA群、上段北寄りの宝篋印塔2基と倒れた碑伝1基からなるB群、そして下段でも宝篋印塔・五輪塔・碑伝などが検出された（C群）。ここには近世墓も存在し、年号がわかる墓碑として享保15年（1730）、寛政5年（1793）、明治5年（1872）があり、熊谷家の墓所であったことが判明している。

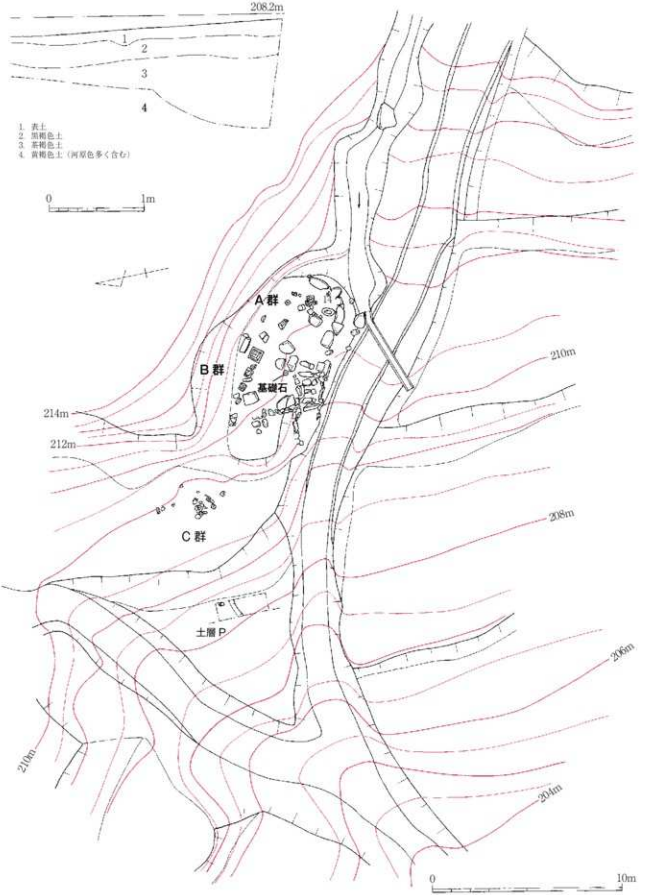
A群　南西－北東方向に並ぶ。北東端近くに2基の一石五輪塔が芯々で約0.5 mの位置に北西－南東方向に並ぶように立っていて、その南には頂部を四角錐とする方柱が立つ。この方柱は頂部直下に2条の沈線を刻む板碑である。その南西に部分的に欠損する3～4基の五輪塔、碑伝1基、一石五輪塔1基などが並ぶように位置する。

B群　A群と直交するような方向に2基の宝篋印塔が立ち、間に碑伝が横転している。宝篋印塔と称したが、笠の形状がそれに近いだけで、側面図で左のものは塔身が、右のものは塔身および頂部が五輪塔の部材に置き換わっていて、比較的新しい時期に適当に積み上げたもののようである。

C群　ほぼ南北方向に並ぶ。北側には大破した一石五輪塔や宝塔の塔身・相輪や五輪塔の部材が一部で重なっていた。南側では宝篋印塔や五輪塔の部材、碑伝などが倒れ、転倒し、折り重なっていた。C群全体で見て、五輪塔の地輪、あるいは宝塔などの基壇・基礎に相当する石材が1点に過ぎないことから本来的に全てがここで使用されたものとは考えられず、処々から集積されたものであろう。

石塔等　1～16（・48・49）がA群、17～24はB群、25～47はC群のもので、基本的に凝灰岩を用いている。したがって、程度に大小があるとはいえ多くが損壊している。なお、括弧内の石造物は作図を行っておらず、写真のみである。

1～3は一般的に「板碑」と呼ばれているが、縦断面を見ると頂部の二条線下の額部の有無で明らかに異なる。多田隈豊秋氏によればこの額部の有無は「碑伝（ひでん）」と「板碑」の違いであるといい、ここではそれに従うこととする（同氏『九州の石塔（福岡県の部）』1974）。さらに、碑伝は山伏が「修

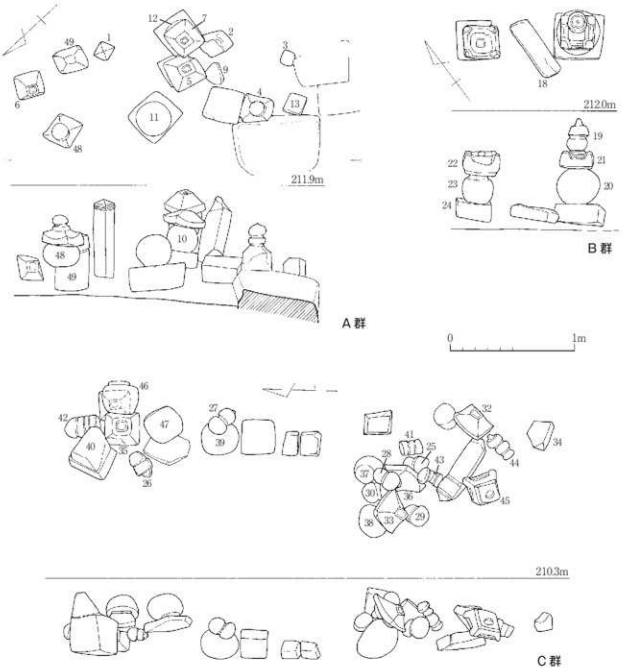


第38図　上の谷石塔群周辺地形測量図・土層図（1/200、1/40）

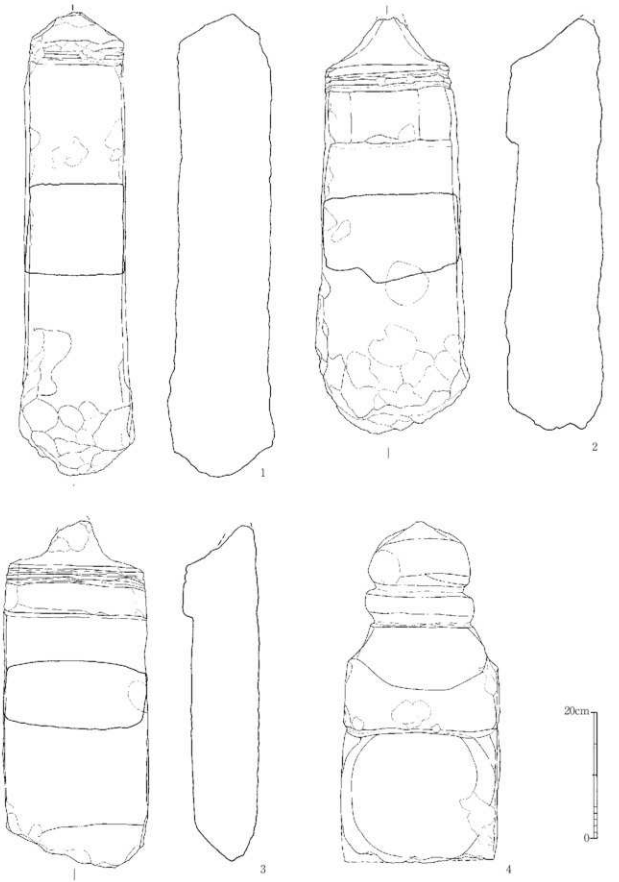
法の時と所と人とを後世に伝えるため」に立て、板碑は「功徳業として立てた供養塔の類」であると性格の差異を記している。

1は全長約73cmの板碑でほぼ完存、破損は少ない。最大幅は下端付近で約18cm。この下端の13cmほどは整形が雑で不整となっていて、地中に埋める部分ということであろう。それ以上はほぼ幅15cm、厚さ15cmの方柱に成形されている。頂部の突出がほかの例に比べて低いが、石材が軟質であり、本来の形状を保つとの確信は持てない。縦断面図で見るように、二条線の下位に碑伝に見られる額部がない。また、額部に付随する左右の面取りも見られない。

2・3は碑伝。2は頂部の突出部先端を欠き、残存高約65cm、最大幅はやはり下端付近で23cmほどとなる。1と同様に下端の15cmほどが不整となり、それ以上は幅18～19cm、厚さは15～16cmで、額部の厚さは現状で17cmほどである。断面図で見るように頂部の先端は背面に近く、かつ前面に



第39図　上の谷石塔群現況実測図（1/30）



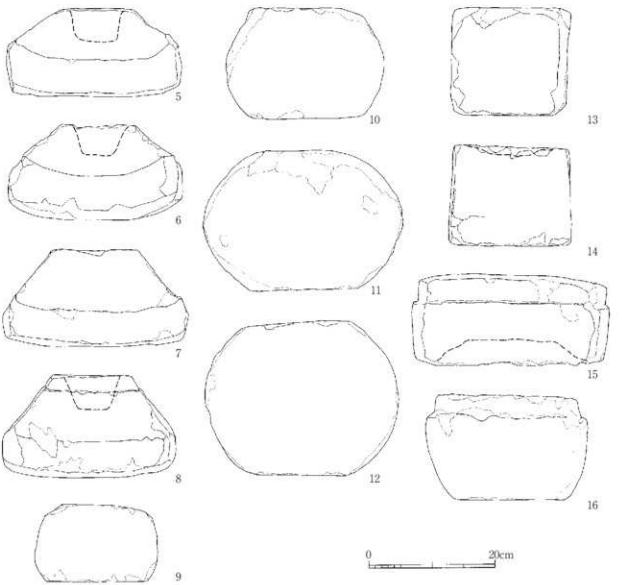
第 40 図　上の谷石塔群石塔等実測図A群 1（1/6）

近い部分では勾配が緩く、逆く字状となる。二条線の下位8cmほどの位置にしっかりとした段を付して額部を作り出し、その左右両端は2～4cmの幅で面取りを施す。3は頂部と下端の多くを失うが、下端右端は原状を留めるようである。その場合は全高54cmほどとなる。幅約23cmで、横断面では中央部が膨らむ形となる。これも二条線の下位に額部を作り出し、その部分は12cm、段以下は11cmほどの厚さとなる。額部の左右には幅2cm以下の面取りを付す。これも頂部は縦断面で逆く字形に高く突出していたと思われるが、正面観でも2と異なってく字形となる。3点ともに二条線は側面でとどまって背面に及ばず、種字等は見られない。

4は凝灰岩製の一石五輪塔。下端の一部を欠いているが、本来的に地輪は作られていなかったようである。水輪・火輪は方柱状に整形して沈線で画すが、水輪は低く甘い段を付して円形を浮き彫りし、火輪は軒と屋根の勾配を表現する。空輪・風輪・火輪も沈線で画し、風輪は極度に扁平とし、空輪のみが通常の五輪塔の形状を作り出す。全高54cm、最大幅25cmほどの大きさとなる。

5～8は火輪。法量は様々であるが、隅棟の反りが小さい傾向がある。7は枘穴の図化を失念、8は頂部に段を付す。9～12は水輪で、これもすべて大きさが異なる。

13・14は立方体に近い形状となり、宝篋印塔の塔身であろうか。14は図頂部に浅い凹みが見ら

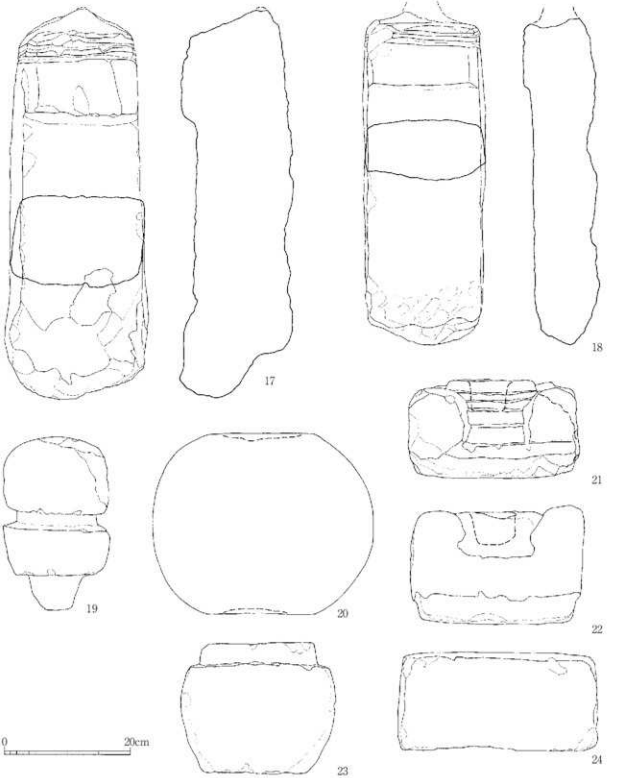


第41図　上の谷石塔群石塔等実測図A群2（1/6）

れるが、13の頂部は平となる。15は上部に段をもつ平面方形の部材で、宝篋印塔の台石か。

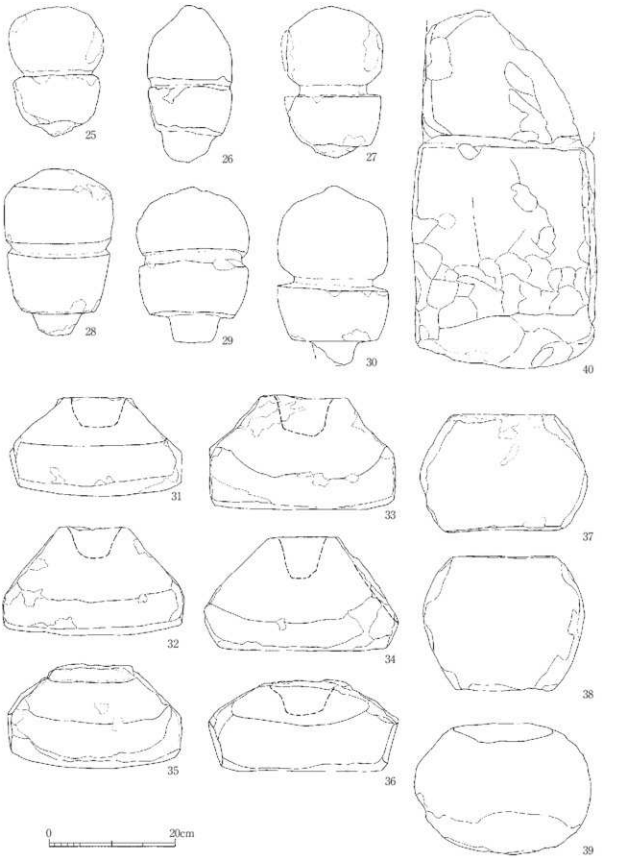
16は水輪状の形状となり、その上端を小さく削り込んで段を付けるもので、胴部径に比して高さが低いが宝塔の塔身か。

17～24はB群。17・18は頂部下に額部をもつ碑伝で、いずれも頂部を一部欠き、表面が部分的に損壊するほかはよく残存する。17は総高62cmで、頂部先端を欠損する。二条線の下に高さ8cmほどの額部を置き、その厚さは16～17cmほどである。身部の幅は19cmほど、厚さは15cmほどで



第42図　上の谷石塔群石塔等実測図B群（1/6）

あるが、下端から15cmほどの間は表面の整形が雑で、前方に突出するなど形状も乱れることから、ここは地中に埋めるべき部位であろう。18は残存高52cm余で、ほかの類品に比べて表面は遺存状態がよいが、背面はかなり荒れている。二条線下の額部は厚さ11cmほど、身部は幅19cmほど、厚



第43図　上の谷石塔群石塔等実測図C群1（1/6）

さ 10cmほどで、下端の 10cmほどの部位はやはり表面調整が雑で、埋める部位といえよう。もちろん、ほかの石塔でも当然であるが、雑な調整部位を埋めただけでは不安定なので、その上も一定程度埋めるはずであるが、どこまでが埋まっていたか痕跡が残らない。ただ、下端付近は必ず地中化するので、略したということであろう。

19 は空風輪、20 は図上下両面がわずかに浅く凹む水輪。21・22 は宝篋印塔の笠部であるが、いずれも風化が進む。23 は宝塔の塔身、24 は地輪あるいは宝篋印塔の台石か。

25 ～ 47 はC群。空風輪は概ね大きさにしたがって配置したもので他意はないが、26・28 は棒状に整形の後に沈線を刻んで空輪・風輪を区別したもののようである。27・29・30 はしっかりした沈線で空輪・風輪を画する。

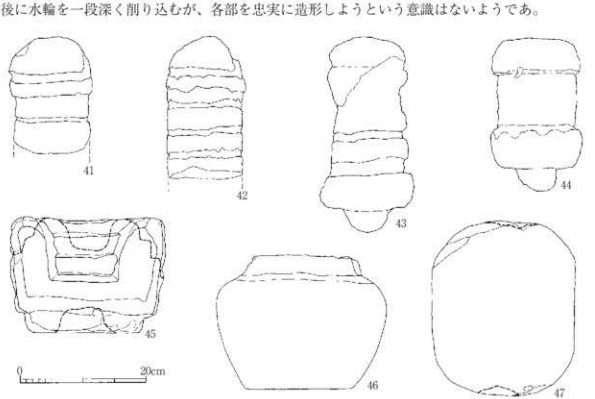
31 ～ 36 は火輪で、これらも隅棟の反りは弱いか直線的となる。35 は頂部に小さな段を付し、36 は勾配が弱く、とても低くなる。

37 ～ 39 は水輪で、39 の形状が不整となるのはこれだけが硬質の花崗岩を用いたためである。

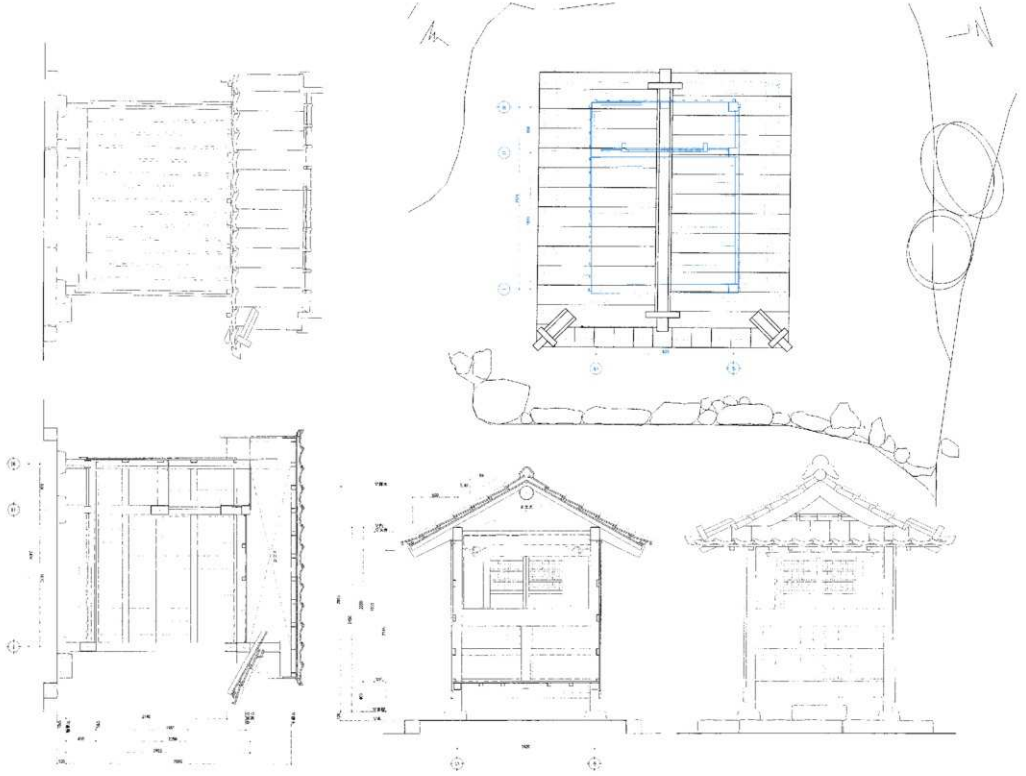
40 は一石五輪塔の残片で、地中に埋める基部と地輪、そして水輪の一部が残るものである。残存高 57cm余りで、下位の 17cmほどに工具痕がよく残っている。残存部は全体に方柱となり、地輪・水輪を全周する沈線で画している。

41 ～ 43 は宝篋印塔の相輪であろう、損壊が甚だしい。44 は変形の相輪か。45 は宝篋印塔の笠部、46 は宝塔の塔身であろう。47 は写真では上部が平坦に加工されるようで水輪として問題がないように見えるが、図では水輪として置いた場合の最大径部分の対となる部分にわずかであるが凹みがあると記されている。水輪の可能性が高いと考えるが、図では敢えて縦位とした。

48・49 は写真だけで図はない。いずれもA群の凝灰岩製一石五輪塔。48 は高さ 59.7cm、最大幅 26.0cmで損壊が進むが、水輪が球形に造形されている点から比較的忠実に作ったものであることがわかる。49 は空風輪を欠くが、残存高 46.7cm、最大幅 32.9cmの大きさで、全体に隅丸の方柱を作った後に水輪を一段深く削り込むが、各部を忠実に造形しようという意識はないようである。



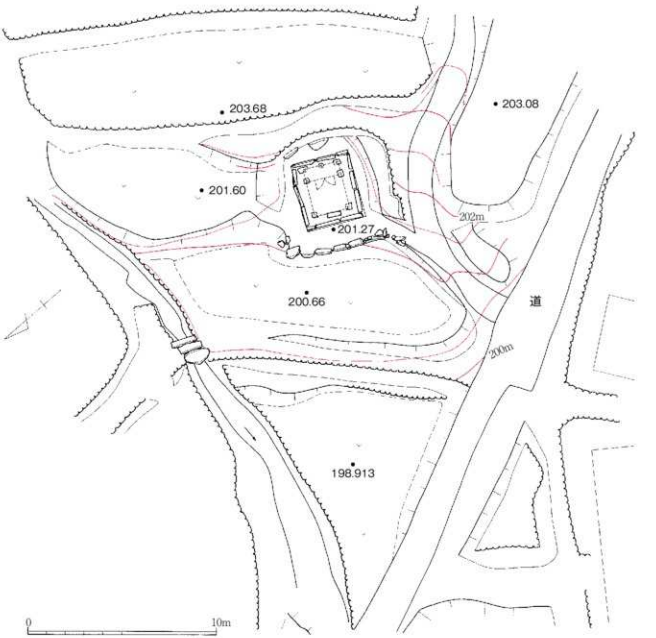
第 44 図　上の谷石塔群石塔等実測図C群 2（1/6）



第 45 図　原地蔵堂実測図（1/50）

15　原地蔵堂（図版 11・12、第 45・46 図）

下伊良原地区の南寄りに不思議な地形がある。丸山と呼ばれる一見独立した丘陵のように見える山で、この山の西側を祓川が流れ、国道はその右岸を並走している。この山の西は川を挟んで丘陵が迫り出していて、祓川がここを流れていなければ丸山も連続した山塊と見て当然のような地形である。しかし、丸山東側の切り通し状となる谷の最高所は標高 204 mほどで、丸山南西部の河原の標高は 181 mほどに過ぎない。44 のドットを落とした上伊良原高木神社付近の標高は 205 mほどで、川面はさらに数m下位にあることからも祓川が丸山の東を流れたことがあるとは考えられないので、この不思議な地形ー祓川の流路は本来的なものであったと考えるしかない。『県報』143 の「自然」でもこの丸山西側の流路について触れられていないことから、筆者が思うほど奇異な地形とは



第 46 図　原地蔵堂周辺地形測量図（1/200）

受け取られていないのであろう。

原地蔵堂はこの丸山の北東部にあり、四方を畑に囲まれて位置する。8月17日に盆踊り、10月24日頃にはお通夜と称してお祭りをしていたという。

地蔵堂　今回報告する他の小堂と同様、1×1軒の建物の東側に奥行きのない内陣を付す形となる。前面は1.82×1.82mの一間堂となり、内陣の奥行きは0.60mの規模である。内陣・外陣の間には間仕切り壁を設け、棟を東西に通して入母屋造妻入としている。

布石で画された基壇上、自然石切石の礎石の上に柱を建て、桁で繋ぎ、梁を載せて京呂組としている。貫を使用せず、足元は敷居框、大引で固めている。小屋組は見えないが、棟木を載せて垂木を配り、野地板を張って葺土で反りを造り、セメント瓦を葺く。棟木は正面は角材、背面では丸太が見える。

外壁は大壁竪羽目板張り目板押さえとし、破風妻壁は板を横に張っている。内壁は外壁裏面の化粧板壁、床は板張り、天井は竿縁天井板張りとなっている。

内陣の建具は格子戸の開き戸である。

堂内に墨書された木札があって、以下のようにある。

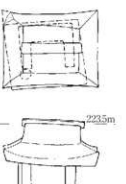
最初此地蔵堂発起之事宝暦十一歳辛巳（1761）十二月也
此堂地敷之儀者昔より善七畑ニ紛無御座候建立
之時節清兵衛善七弐人之相談ニ而相究候上者末代ニ至
脇々古何之族出入決而有間敷候末代ニ至様子相知レ不申節者
此書物ヲ以玲明可申候為念如斯ニ書記者也大工善七手ニ叶直ニ才工
仕もの也

仏像　いずれも江戸時代のものと評価された地蔵菩薩立像（像高23.0cm）、観音菩薩立像（同43.5cm）の2体の仏像が祀られていた。地蔵菩薩立像は楠の一木造りで、左手首・右手錫杖・光背を欠損する。蓮台および岩座は別材で、胡粉と彩色が一部に残る。観音菩薩立像も楠の一本造りで、右手首・左手肘先を欠き、これにも胡粉・彩色が残る。焼けた痕跡があって、焼尾観音・火伏せ観音とも呼ばれ、元はこの谷最南部の集落である帆柱にあったものと伝えられている。

16　丸山厄神社（図版12・13、第47・48図）

先の丸山の山頂部平坦面の北東端に祀られた石祠である。ここはかつて下伊良原高木神社の御旅所であったが、国道との比高差が40mほどあって高いことを理由に廃止されたという。正面に「丸山御旅所表道」、背面に「皇紀二千六百年記念」、左側面に「昭和十一年（1926）五月開設」、右側面に「土地一丁四反歩　寄附者」と3名の名が刻まれた高さ2m余、最大幅28cmの花崗岩製の石柱が台石の上に立っていた。

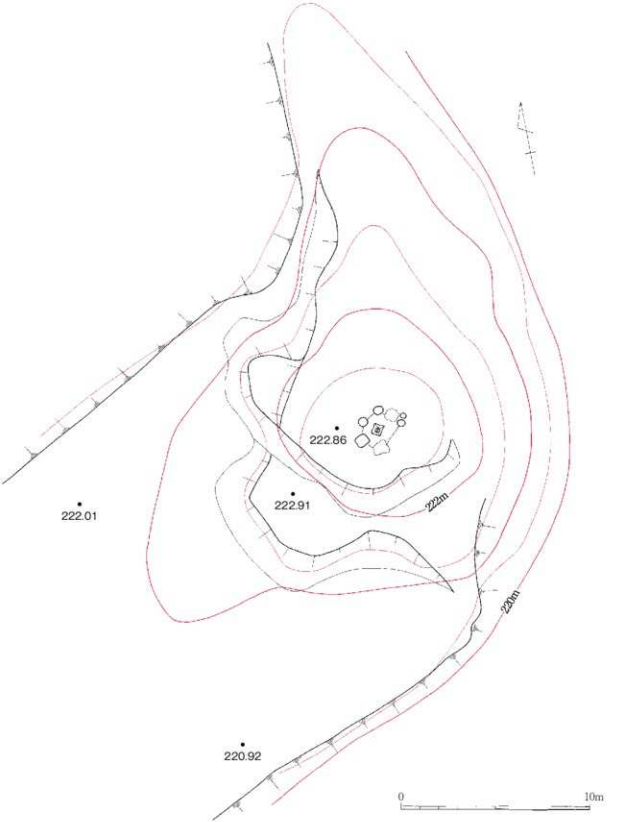
地形測量図で見るように、石祠は丘陵頂部よりもさらに1.8mほど高いところに置かれていて、測量時の所見では「盛土」の可能性が想定されているが、発掘は行っておらず未確認。想定された盛土は、地形が乱れていて範囲を推測しがたいが、径10mないし10数mといったところであろう。石祠が東を向いていることから、南西の舌状に張り出した部分は無視していいのかも知れない。



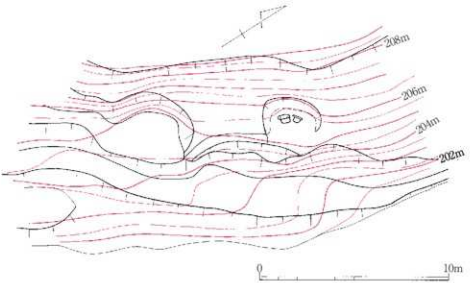
第47図　丸山厄神社石祠実測図（1/20）

石祠は台石・平面コ字形に三方を囲む壁、そして棟を載せて中位に段を付けた屋根の３つの部位からなるが、これらは凝灰岩を加工・整形したものである。全高 68cm、基壇高 5cm、屋根高 25cm、同幅 51cmを測る。

「21 年資料」に「昭和 53 年（1978）調査」と欠かれた数枚の写真のコピーが残るが、この時には既に石祠の内部は空となっていたようである。丸山頂部は非水没地で、石祠は現地に残る。



第 48 図　丸山厄神社周辺地形測量図（1/200）



第49図　丸山庚申塔周辺地形測量図（1/200）

17　丸山庚申塔（図版13、第49・50図）

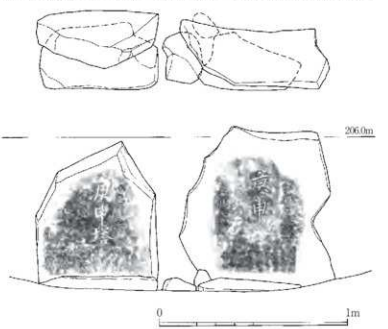
丸山の東麓、里道より２mほど高い位置で山腹に２×３mほどの平坦面を造成し、その中に近接して立てられていた２基の庚申塔。いずれも前面に拝石を置く。

北側は中央に大きく「庚申」（まだれの中が上に突き抜けていない）、その右側に一段低くかつ小さく「享保四[己]亥歳（1719）」、左側に「二月十七日」と刻み、下段に９名の人名を列挙する。弥生時代の石蓋土壙墓に使用するような安山岩の板石を使用し、剥離面をそのままにして線刻する。拝石正面からの高さは80cm、最大幅は75cmを測る。割石の可能性もある。

南側では中央に大きく「庚申塔」と刻み、右左に年号、月日を、下段に人名を刻む点は似ている。これも「庚」のまだれの中は上に突き抜けていない。右に「延享二年（1745）」、左に「四月十八日」とあるが、この年月日のそれぞれの上にやや小さく、各１文字が付されてる。やや判然としないところがあるが、「延享二年」の干支が乙丑であることから右に「乙」、左に「丑」が置かれたものと思われる。日付の左にさらに一段落として「但二度待上」、そして下段に11名の名前を刻む。11名の内、「享保四歳」庚申塔で右から２番目に記された「甚九良」が、ここでは右から６番目に「甚九郎」とあり、同一人物であろう。

これは厚みのある板状の安山岩を用いており、表面をある程度研磨するようである。拝石正面からの高さ約70cm、最大幅65cmを測る。

終戦までは「庚申（かのえさる）の日」に大宮司（下伊良原高木神社



第50図　丸山庚申塔実測図（1/20）

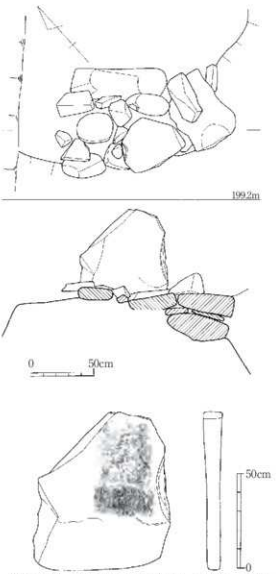
の宮司であろう）さんを呼んで祀っていた。」。また、61日ごとに原地区の男が集まって簡単な食事と酒1升と決めて、健康と豊作を願って参っていたともいう。掛け軸（十二支の絵）があるという（以上、祀りの様子は「調査カード」から）。

18　越当庚申塔（図版14、第51・52図）

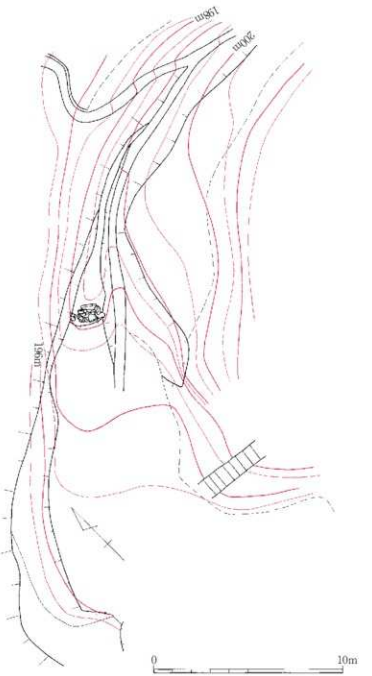
丸山の南東、東側の山裾にあって、庚申塔の直ぐ東に旧道が走る。西側にも段落ちがあって、南西の旧道から見るとちょうど島状の高まりの上に位置することとなる。

庚申塔は外周を打ち欠いた安山岩の扁平な石材を使用し、総高83cm、最大幅71cm、厚さは7～10cmほどの大きさで、前面となる南西の下端に主に花崗岩の自然石を置いて固定している。

文字は全体に右に寄っている。中央に大きく「庚申」、右側はわずかに下げて文字を小さくして「延享元年（1744）」「甲子」、左側も同様にして「六月十四日放立」、そして下位に9人の人名を刻むが、



第51図　越当庚申塔実測図（1/30、1/20）



第52図　越当庚申塔周辺地形測量図（1/200）

丸山庚申塔と同一の人名は見られない。「放」は「敬」の異体字としてよいのであろう。

丸山庚申塔「延享二年」銘塔に一年先行して立てられた庚申塔である。庚申塔は60日ごとに巡ってくる庚申（かのえさる）の日の夜に、体内にいる三尸（さんし）の虫が離脱して天帝の元に罪過を告げに行かないように、猿田彦や青面金剛を祀り、夜通しで勤行・宴を行い、これを三年間18回続けた記念に建立することが多いという。丸山庚申塔・越当庚申塔はともに「大字下伊良原・原」に所在することから同じ村内であろうが、丸山の2基と共通する名前はない。。

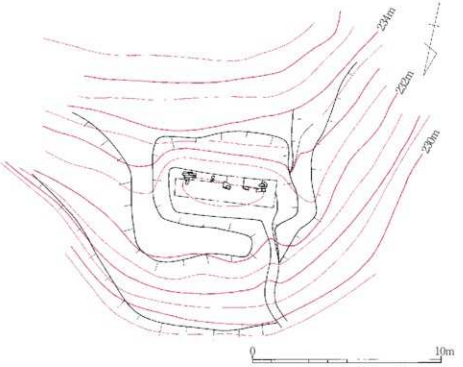
「昔は、山の神祭と一緒にしていたが、現在はお祀りはしていない。」と「調査カード」にある。

19　屋敷上大日堂（図版14・15、第53・54図）

越当庚申塔の東の丘陵尾根線上に位置する。尾根の先端部を尾根線と直角方向に掘削して、2×6mほどの長方形の平坦面を造成し、そこに石造物を並べ置いていた。その標高は232m付近である。背面（南側）は1.5～2.0m近い高低差の法面となり、南北2辺の短辺も土手状の高まりをもち、前面でも最大0.25mほどの高まりがあって、北辺西端に参道を開削している。これら三方の土手状の高まりは開削した土を置いたものであろう。ただ、この高まりの断ち割りを行っておらず、意図したものか－転石あるいは層状をなすかなどーを確認していない。屋敷上大日堂と呼称するが、建物跡やその痕跡も確認していない。

開削した長方形の平坦地の北端に安山岩の台石に載った高さ92cm、最大幅72cmの安山岩の扁平な石材があり、中央に「種子　大日如来」、種子と「大日如来」間の空隙に頭を揃えて右側には「天明四甲辰年（1784）」、左側には「九月吉日盛之」と刻まれていて、これが遺跡名となった大日様である。刻まれた種子は金剛界大日如来を表す「𑖀（バン）」である。なお、向かって左側縁は割ったように見える。

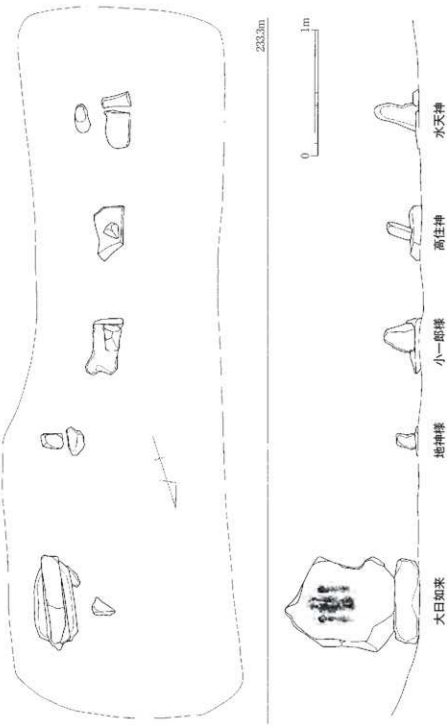
その西には小型の自然石が台石上に立てられていて、それぞれ順に地神様（高さ19cm）、小一郎



第53図　屋敷上大日堂周辺地形測量図（1/200）

様（同 23cm）、高住（同 22cm）、水天神（同 34cm）と「調査カード」に記録されている。それぞれ簡易な構造であるために、今回の調査時には大日様をはじめとして転落あるいは移動していた。図は一部復元して掲載している。

毎年、作物の取り入れが終わった 12 月にお札の祀りを行っていたという。今は「大日如来」と刻んだ石塔だけが下伊良原観音堂に竹ノ畑大日堂などと並んでいる。

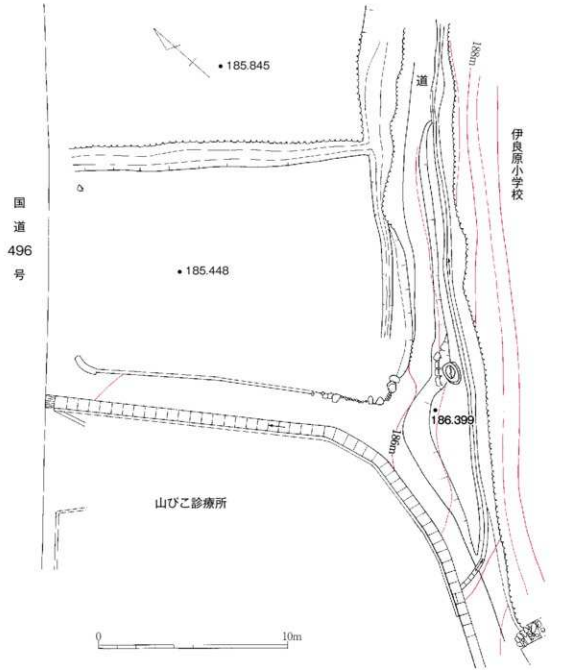


第 54 図　屋敷上大日堂現況実測図（1/30）

20　原援田彦太神（図版 15、第 55・56 図）

現在の国道は祓川右岸に接して蛇行するが、この猿田彦が祀られた小道は旧道であろう。伊良原小学校の敷地に沿い、越当庚申塔の脇を通って原の集落へ続いている。石塔の前で分岐する道は岩屋河内へ続く旧道であったものと思われる。なお、現在この援田彦太神は下伊良原集団移転地から岩屋河内へ至る道路脇に同地区に向けて立てられている。これは、かつての所在地でも同じ意味をもって立てられていたことを示しているといえる。

高さ 0.78 mの二段の台座の上に高さ 1.37 m、幅 0.71 mの安山岩の川原石が立てられ、「援田彦太神」、左下に小さく「明治三十三年（1900）九月建之」と刻まれる。「援」の偏は 2 画目が直線的となるて偏に見えるが、本来はけもの偏の「猨（さる）」であり、「猨（猿）田彦」の意である。石塔が載る二段の台座の上段（花崗岩）正面に、右から「神賀中」・「世話人」以下 9 名の氏名が

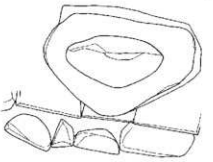


第 55 図　原援田彦太神周辺地形測量図（1/200）

小さく縦書きで、並べて刻まれる。

なお、二重基壇の下にも塊石を組んだ構造物が2段あるが、最下段（高さ0.1ｍ＋）は階段状となり、その上の段（同0.2ｍ）は台座の下に組まれるようである。

お祀り等はなかったという。



21　原水神様（図版15、第57・58図）

国道496号から岩屋河内へ分岐する岩屋河内橋の下流側河川敷に巨岩が露出していて、その上に立てられていた。花崗岩の川原石で、高さは0.5ｍほど、基部はコンクリートで固められていて細部はわからない。

5月5日に水神様の前に竹笹2本を立ててその間に注連縄を渡し、前に幣を立て、酒・塩・米をお供えし、宮司を呼んで祭典を行った。その後宴席を設定していたと、教員をしながら郷土史会でも活動されていた神崎昭吾氏の談が「調査カード」に記されている。

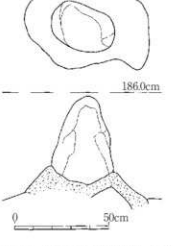
第56図　原援田彦太神現況実測図（1/30）

22　奉安殿跡忠魂碑（図版16、第59図）

伊良原小学校グランドの南東、山林の下端に西向きに置かれていた。

基壇は2ｍほどの高さまで花崗岩の切石を組み上げた上に花崗岩の自然石巨岩を横置き、その上に緑泥片岩の「忠魂碑」と刻まれた巨岩が立つ。「忠魂碑」と刻まれた左下に「内閣総理大臣　広田弘毅書」とある。

現在は上伊良原地区移転地の直ぐ北の国道脇に移されていて、前面に「忠魂碑変遷記録」という碑が添えられている。その文面の一部を引用しておく（碑文は縦書き）。



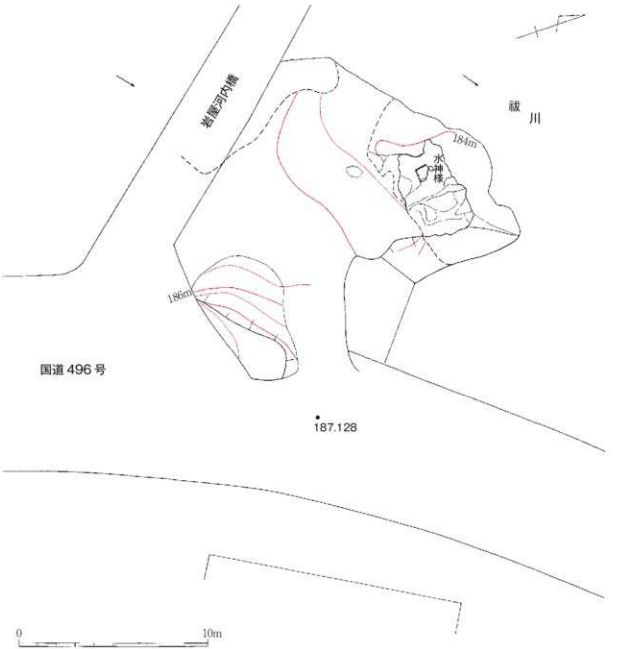
第57図　原水神様実測図（1/20）

一、忠魂碑建立　昭和拾壱年八月吉日　日清・日露の大戦を始め幾多の戦役に於て名誉の戦死を遂げ護国の神となった英霊に対し、その功績を称え英霊を祀るため建立

(1) 碑の搬送博多駅－犀川駅列車輸送 (2) 犀川駅－伊良原小学校校庭まで十二km二頭立て馬車村民各代表百人規模日の丸鉢巻き、紅白襷掛けでロープを引っ張る　近郊住民手に手日の丸小旗で声援　当日は非常な雨降り

伊良原小学校三年生以上の児童村民多数村境（高座）まで出迎え、建立地、伊良原小学校校庭に万歳の中無事到着

二、忠魂碑撤去　昭和二十年八月拾五日敗戦　占領政策で戦争に関係あるものは撤去の指令　当



第 58 図　原水神様周辺地形測量図（1/200）

時村責任者村民の意志も無視撤去慚愧の念　近郊の市町村では忠魂碑撤去一村もなし　而も真二つに折られた忠魂碑、激涙したものです

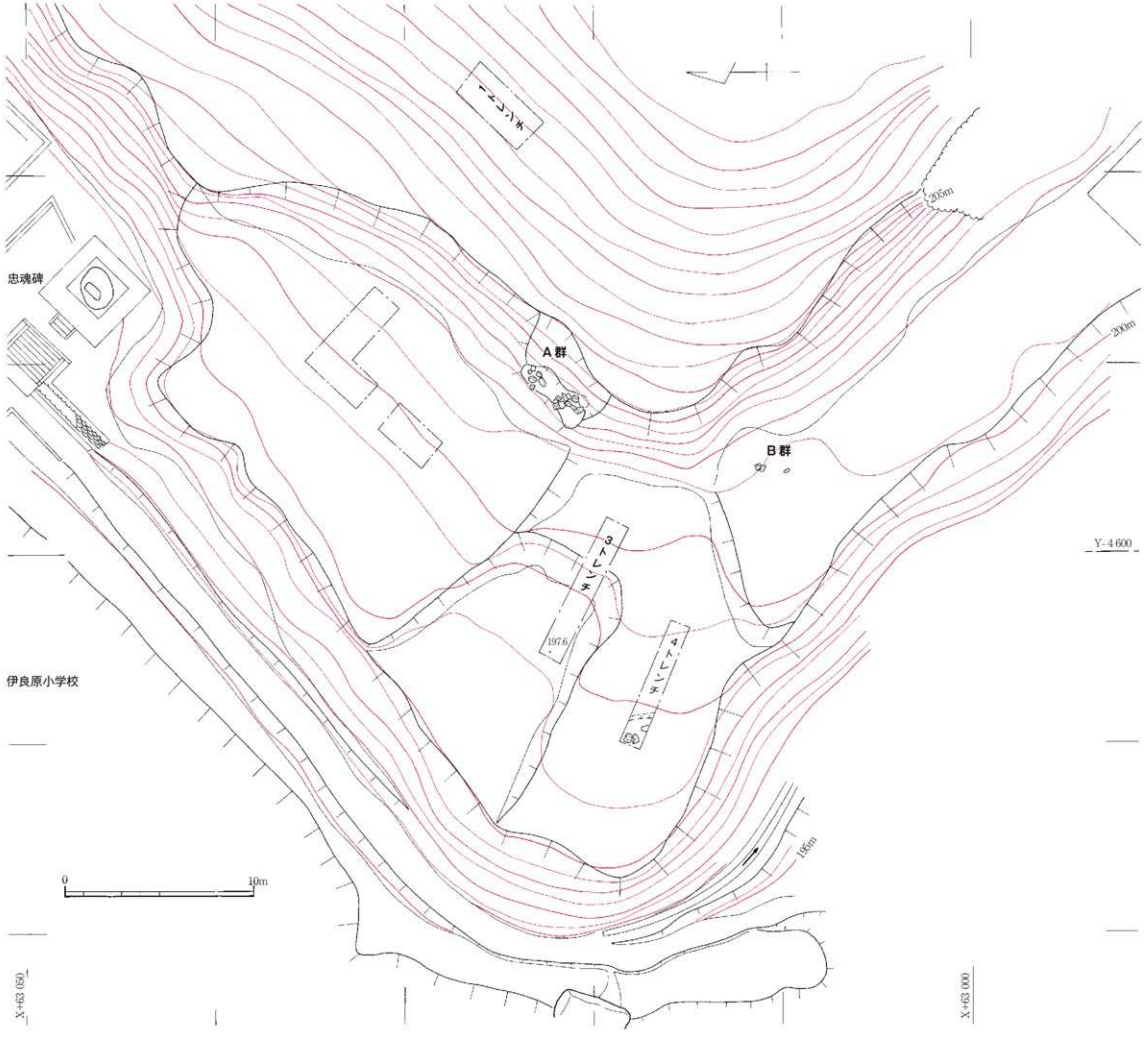
三、再建　戦没者遺族会が組織されるや忠魂碑再建の気運高まり遺族会全員の賛同、役員の尽力で再建される今日まで供養に勤めてまいりました

四、遷座建立　福岡県営伊良原ダム建設により埋没地域となり遺族会としては忠魂碑はなんとしても残さねばと意志決定がなされ、役員一同県に強い要望を重ね県も要望に応えていただき再建移設補償と有難い回答、早速建設委員会で協議決定し村上石材工業所に工事を依頼し、御尽力で見事に忠魂碑が完成、末永く供養に勤める事を誓い変遷記録と致します

（以下、建設委員名、施工者、記録者名、平成二十二年九月吉日とある）

23　長畑石塔群（図版 16・17・40・41、第 59 ～ 61 図）

伊良原小学校の南西部で祓川は西側に大きく振れる流路をとるが、東側の山岳の地形も同様に西



第 59 図　長畑石塔群・奉安殿跡忠魂碑周辺地形測量図（1/200）

側へ張り出している。小学校グランドの標高は190 m付近であるが、それに接する丘陵西端部の標高200 m付近には幅10 m前後の平坦に近い地形があって、その平坦面の直ぐ上に石塔群がある。ちなみに、この平坦に近い部分に4本、そこから7 mほど高い斜面に1本の計5本のトレンチを掘削したが、他に遺構・遺物は見られなかった。

石塔群は丘陵先端部を挟んで南北に10 mほどの距離を置く2群からなり、北をA群、南をB群として以下を続ける。

A群　等高線に沿うように南西－北東方向に長さ3.7 m、奥行き1.0～0.6～1.5 mほどの瓢箪形の平坦面を造成して、その両側の幅広となる部分からそれぞれ石塔が出土した。

図右（南西）側には一石五輪塔2基、碑伝1基、五輪塔の部材（地輪1点、水輪1点、火輪5点）が、左側には五輪塔の部材（地輪2点、水輪2点）と石塔かと思われるものがそれぞれ乱雑に出土している。

B群　これは平坦面の再奥部に所在するというべきで、五輪塔1基が倒れていたものである。地輪・水輪は重なり、火輪はずれて傾き、空風輪は転落して0.7 mの位置に落ちていた。セット関係にあったと見てよいであろう。

石塔等　1～12（・18）がA群、13～17がB群の石塔で、特記しないものは凝灰岩製である。

1は総高40.5cm、幅20.4cmの碑伝で、完存するようである。頂部は尖り気味となり、弧状に刻まれる甘い二条線の下にしっかりとした額部をもつようであるが、側面図の作成を失念していて、厚さ等は不明。2は一石五輪塔で、図の下端左右を欠いているようであるが、中央付近は原形に近いのであろう。総高42.8cm、最大幅は地輪の部分で19.0cmである。空輪・風輪間は沈線を刻むだけであるが、その他の部位は明瞭に加工・整形している。火輪の屋根の勾配が弱く、長方形に近い形状となるが、水輪は中央が膨らむ円柱状に削り出している。

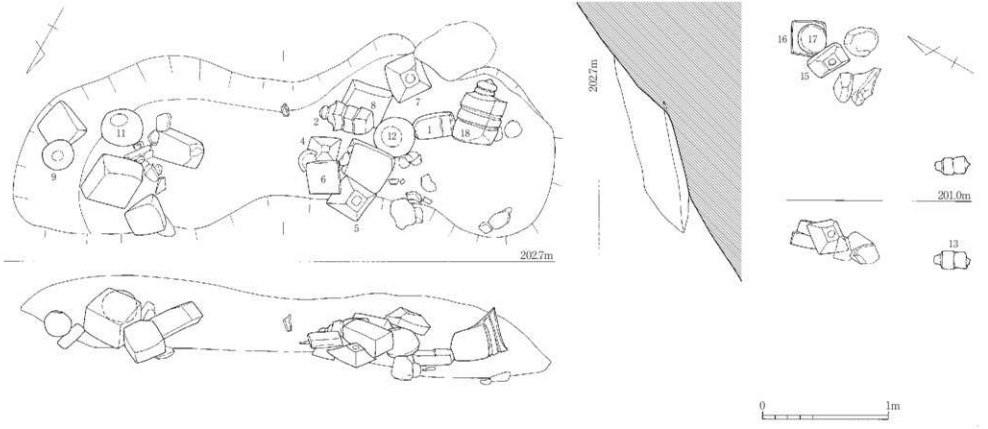
3は空風輪。4～8は火輪で、大きさや屋根の勾配に変化が見られる。8は勾配が緩やかで、軒が高くなる。9～12は水輪。

13～17はB群。13の空風輪は空輪・風輪部ともに丸味を失って円柱状となり、段を以て両輪の境とする。14～16は屋根勾配の緩い火輪で、16は特に軒口が幅広くなる。17は水輪の残欠で、図下部を欠損する。

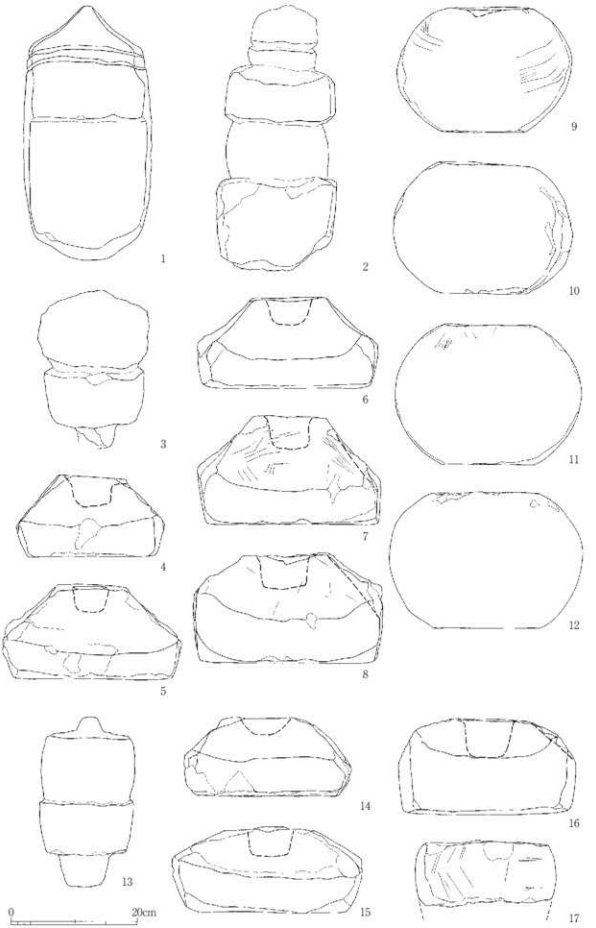
18は写真のみ。総高57.1cm、最大幅28.8cmの一石五輪塔で、小豆色に近い緻密な凝灰岩を使用する。全体に隅丸方形の角柱を削り込んだようで、各部の境界はしっかり刻み、細部の表現は丁寧であるとはいえ、水輪は本来の形状を失う。

24　羽後屋敷石塔群（図版17～21・41～43、第62～67図）

長畑石塔群の南には平地が乏しく、祓川右岸の国道396号線から直ぐに急峻な斜面となる部分がある。ただ、国道から1 mほど高いところに奥行きが最大で5 m程の平坦な地形があり、道路側に石垣が築かれている。この石垣に組み込まれた、あるいはそこから脱落したと思われる石塔群をA群と呼ぶ。A群上の平坦地にトレンチ等を掘削し、そのうちの南端のA－1トレンチで石列と思われるものを確認したが、これは後述する。A群の北西20数m付近の石垣上の平坦面の最奥部に巨石が連続して露出しているが、その付近の道路近くに一石五輪塔が転落し、巨石の裾にも一石五輪塔と五輪塔の空風輪が露出していたことから調査区を設定した（B群）。また、上述の平坦面の東側、15 mほど高いところにもわずかな平坦面があって、石塔が露出していたことからここも部分的に



第60図　長畑石塔群検出状況実測図（1/30）



第61図　長畑石塔群実測図（1/6）

掘削を行った（C群）。

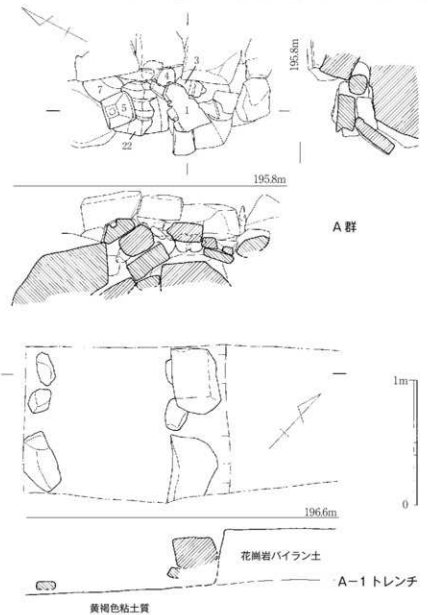
A群　石垣の最上段は下段に比べて東側に引いており、新しく後補したものであろうか。石塔群の南には地山中の礫と思われる巨石があり、北側にも巨石がある。その間に一石五輪塔２基、板碑１基、五輪塔の部材（地輪１点、水輪１点、火輪１点、空風輪２点）が積み上げられたような状態で石垣の部材として使用されていた。また、前面に一石五輪塔１基と五輪塔水輪１点が転落していた。積み上げられた五輪塔は本来的にセットとなるもののようである。

A－1トレンチ　トレンチ西寄りに0.5 mほどの段があり、その下に並べられた石列がある。石垣であった可能性もあるが、石材の大きさから見てさほど高いものであったとは思えない。

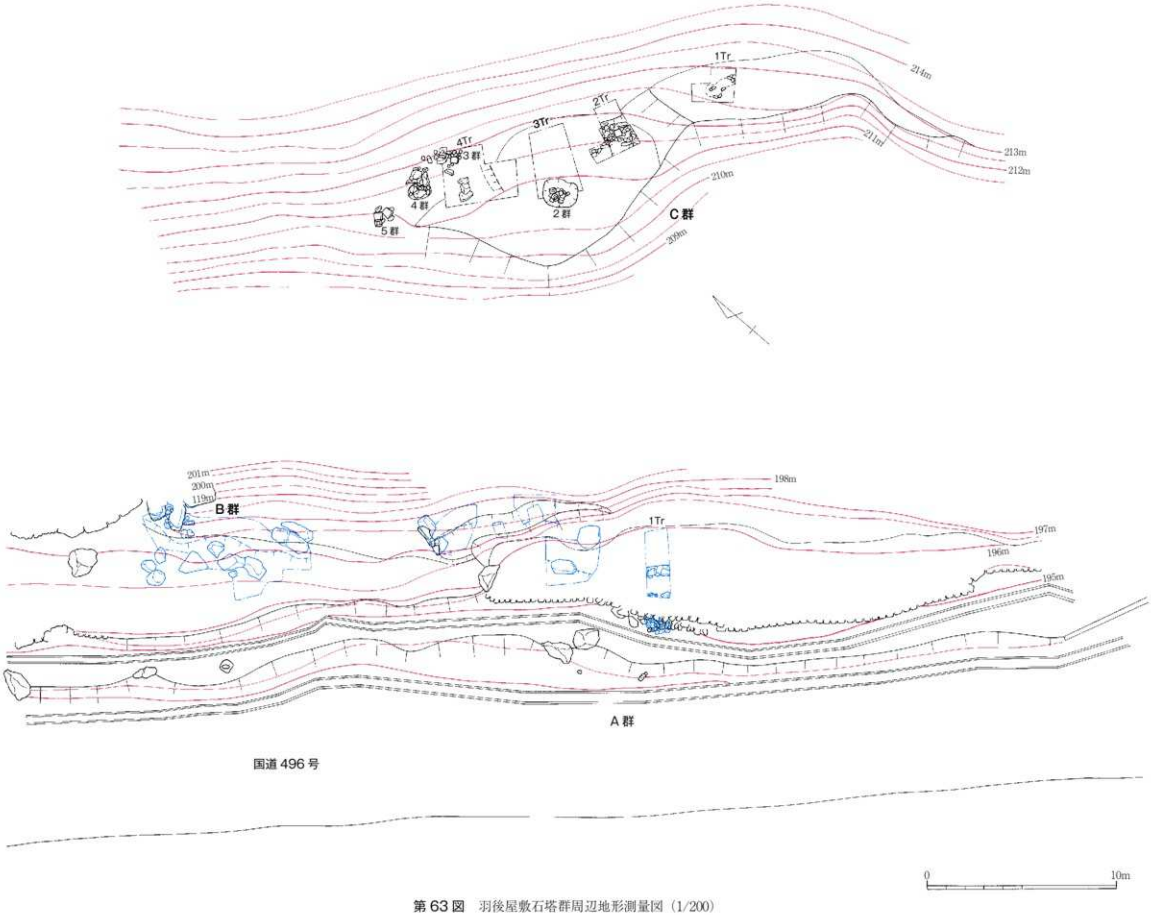
B群　巨石群の南側に一石五輪塔１基と五輪塔空風輪が岩にもたれるように置かれ、巨石に囲まれた部分には五輪塔（地輪１点、火輪２点）があった。いずれも転落したものと思われる。

C群　等高線に沿う方向で南北約30 m、最大幅８mほどの不整な２段の平坦面があって、その北半の低い部分に石塔群が散在していた。

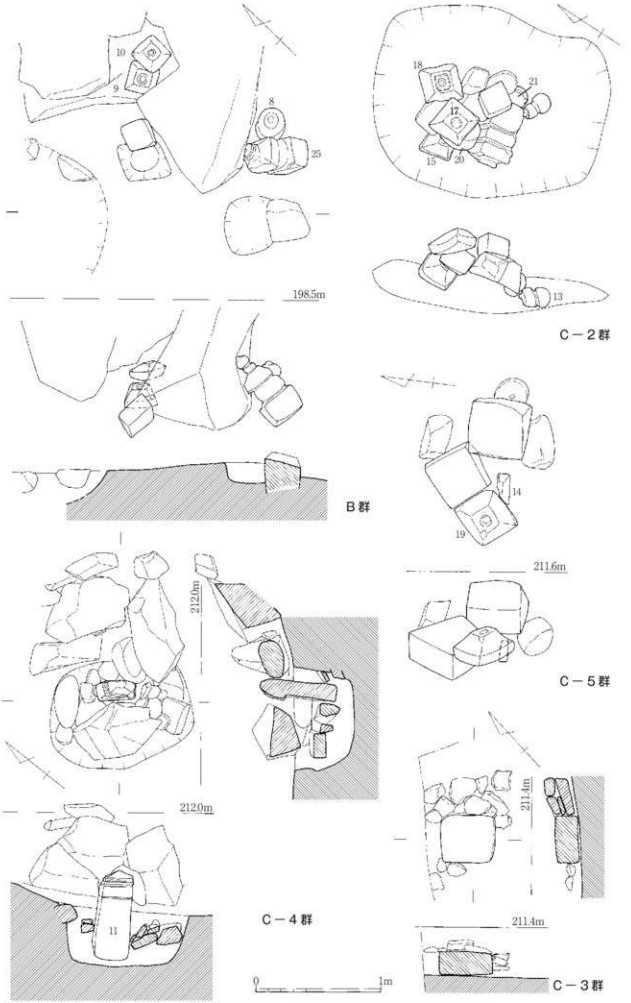
C－1群　C－2トレンチ内で検出したものである。地山は花崗岩バイラン土で、写真で見るように礫を混入していないことから、ここで検出した礫は全て持ち込まれたものと思われる。ただ、



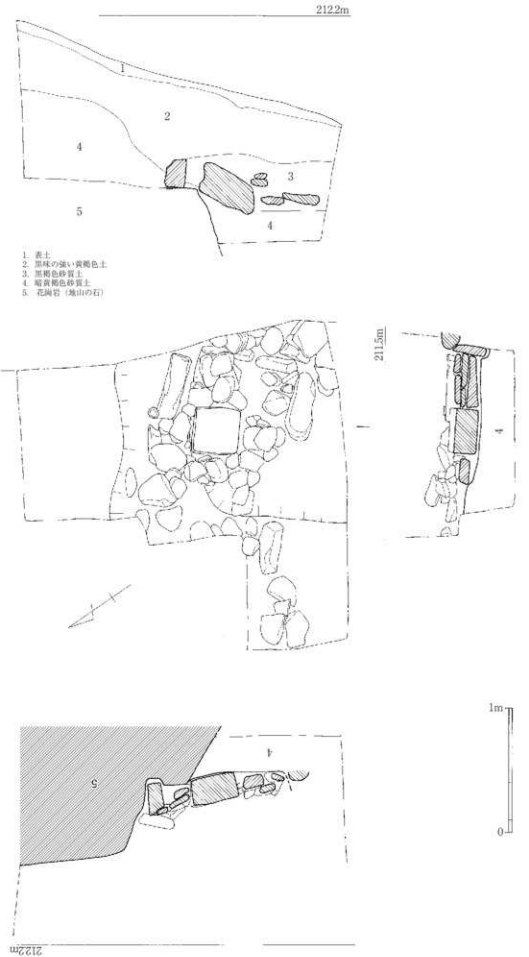
第62図　羽後屋敷A－1トレンチ及びA群石塔検出状況実測図（1/30）



第63図　羽後屋敷石塔群周辺地形測量図（1/200）



第 64 図　羽後屋敷Ｂ・Ｃ石塔群検出状況実測図（1/30）



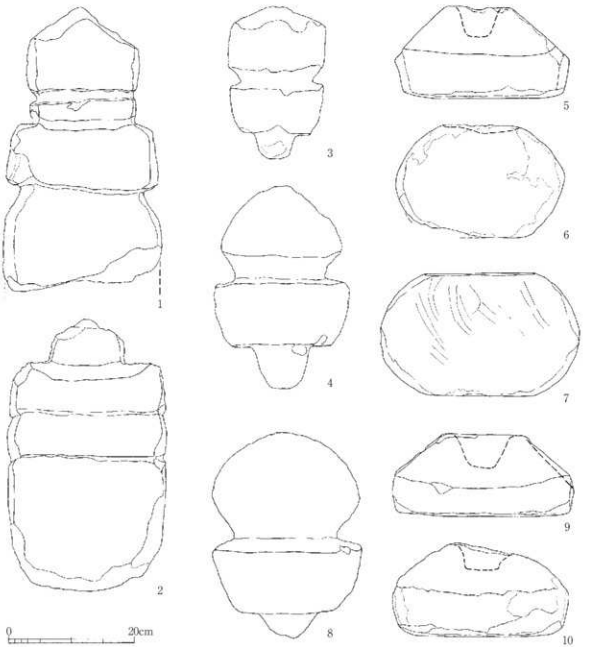
第65図　羽後屋敷C－2トレンチ検出状況等実測図（1/30）

礫の在り方に規則性は見えず、掘削範囲ではその意味は不明瞭といわざるを得ない。しかし、一辺長0.4 m、厚さ0.2 mの方形に加工した台石の北および東の二方に立てた石材が見られることから、これを仕切り石として台石の周辺に小礫を敷き詰めた可能性も考えられる。掘り過ぎて判然としないが、台石とその周辺も浅い掘り込みの中にあったようである。

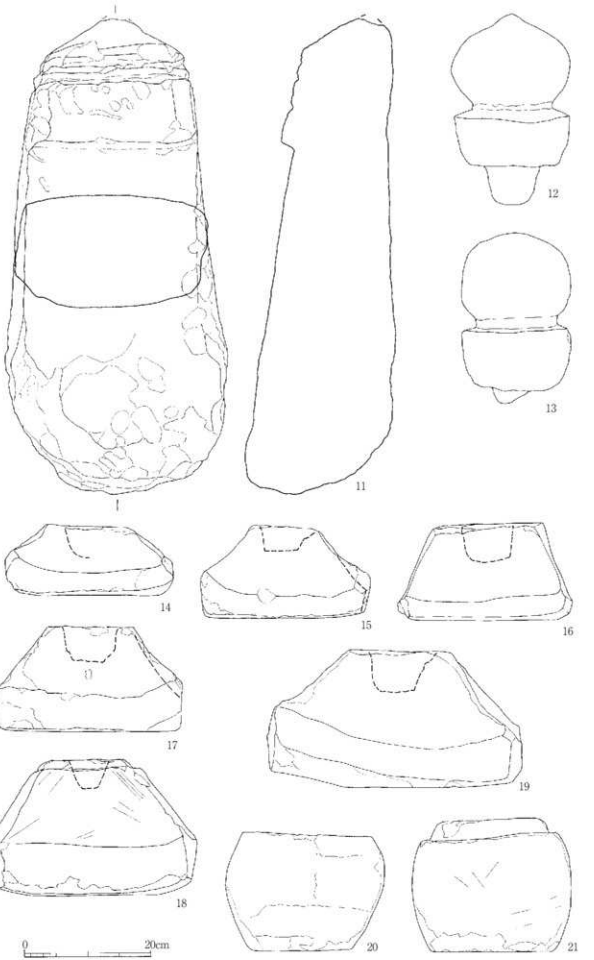
C－2群　低い段の中央付近にあたる。南北長3.8 m、東西長1.5 mほどの不整な隅丸長方形の掘り込みの中にあるが、深さは記録されていない。一石五輪塔1基と五輪塔の部材（地輪1点、水輪2点、火輪3点、空風輪1点）が乱雑に寄せ集められた状態で検出された。

C－3群　C－4トレンチの北隅で一辺長0.45 m、厚さ0.18 mほどの方形に加工された台石が検出された。ここでも周辺に小型の河原石が見られるが、ここには仕切り石のような石材は確認できなかった。

C－4群　平坦地の北端付近で検出した碑伝である。発掘前の状態がわからないが、深さ0.4 m、直径0.9～1.15 mの不整円形に近い掘形に立て据えられた状態の碑伝である。基底部付近には川原石が詰められて固定されていた。頭部付近前後の比較的大きな石は転石であろう。



第66図　羽後屋敷A・B石塔群実測図（1/6）



第 67 図　羽後屋敷C石塔群実測図（1/6）

C－5群　C－4群の西に近接する。方形に加工された地輪あるいは台石2点、小片を含む火輪2点などが集められていた。

石塔等　第66図1～7（・22・23）がA群、同8～10（・24～26））がB群、第67図11～21がC群である。なお、括弧内の石塔は作図していない。

1・2は一石五輪塔。1は地輪を欠き、水輪はなお丸味を表現するが、火輪は直方体に近く成形する。軒口が最大化したというべきか、屋根勾配が垂直に近くなったというべきか。風輪は小さく薄く作り、空輪が大型化し、下半部は直方体、上半部は角錐のようになる。全体を板状石材から削り出したようである。2は非常に形骸化したもので、空輪に相当する部位を欠失するが、地輪・水輪・火輪が扁平な円柱状となって沈線で区別するものである。ただ、高さが低い水輪部はわずかに膨らみをもたせている。

3は空輪の側縁が垂直に近い面をもち、風輪が逆台形となる正面観となる。4の空輪は下位に最大径部が来る宝珠状となるが、風輪は3に似る。これは総高32cmを測る。5は残存状態が比較的良好な火輪。隅棟は直線的になり、屋根の反りはほとんどないといってよい。6・7は水輪で、7では工具痕と思われる斜位の痕跡が残る。

8は形態的には4に近いものだが、空輪の高さが径に比して小さい。9・10は火輪で、10は損壊が進んでいるが、両者ともに屋根の勾配が緩く、反りがない。

11は土坑に立て据えられていた碑伝。表面に小さな破損が随所に見られ、頂部も若干損傷するように見えるが、概ね原状を維持するものと思われる。総高75.4cm、基部付近で最大幅は35.2cmを測る。頂部はやはり背面の延長線上に位置するが、今までに見てきたものに比べて山形の勾配が直線的となっている。正面および左右両側面の二条線はしっかりと刻まれ、二条線の下位9～10cm付近に段がつく。この額部左側では損傷のために判然としないが、右側では2.5cmの幅で面取りが施される。額部の厚さは約15～17cm。額部直下で厚さ15cmとなる身部は下端付近で22cmほどの厚さになるまで直線的に肥厚する。また、額部直下の幅は28cmほどであるが、下端から20cmほど上位で最大幅となる。なお、この最大幅付近から下位は加工痕が顕著に残り、本来埋められることが前提であったものと思われる。

12・13は空風輪。12は遺存状態が良好。13は空輪が球状になるが、頂部を欠失したものか。

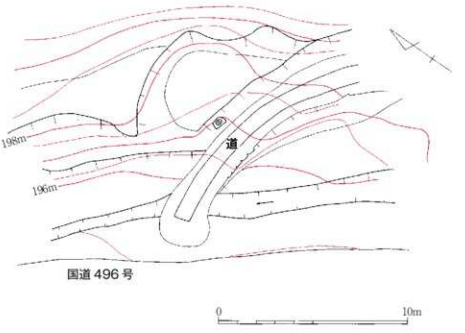
14～19は火輪。14は屋根の勾配が弱く、表面が荒れている。15は隅棟の反りが強い。16～18は屋根の勾配が強く、反りが弱く直線的になる。19は図左軒下が反り上がって、下面が水平とならない。

20は上下の切断面の径が随分異なるもので、あるいは宝塔とすべきか。21は上端に段を付し、宝塔としてよいであろう。最大径25.3cm、高さ21.2cmである。

22は空風輪を欠く一石五輪塔で、残存高41.6cm、最大幅27.8cmを測る。水輪は球形を意識し、火輪も屋根の形となる。23は残存高44.1cm、最大幅20.2cmの碑伝。額部が狭い。24は残存高48.6cm、最大幅23.2cmの形骸化した一石五輪塔。地輪が異様に大きく、全体に方柱状となる。25は整美といってもよい一石五輪塔。これは高さ63.4cmである。26は空風輪を欠く一石五輪塔で、地・水・火輪は沈線で区画するのみといってよい。全体に方柱状となる。

25　鳴滝猿田彦大神（図版21、第68・69図）

羽後屋敷石塔群の直ぐ南に国道から東へ入る小道があって、その最奥部には鳴滝不動尊が祀られている。この不動尊について、『県報』143では「石造不動明王像」が祀られるとあり、「みやこ町



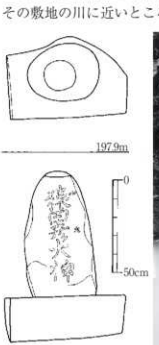
第 68 図　鳴滝猿田彦大神周辺地形測量図（1/200）

内遺跡等分布地図」（『みやこ町文化財調査報告書』第 6 集、2010）には「祓川左岸山中に所在。安山岩崖に窟・滝等が発達。彦山禊場と伝う」とある。この道路の分岐点の直ぐ東に立つのが鳴滝猿田彦大神である。今は移転した上伊良原公民館の敷地に置かれる。

花崗岩の台石に載る、やはり花崗岩の自然石で、高さは 67cm、幅 34cm を測る。表面は整形のために敲打しているかも知れないが、非常に荒れた肌であり、中央に「猿田彦大神」と大書、その右側には頭を揃えるような位置に「明治廿九年（1896）」とやや小さい文字でかすかに刻まれている。

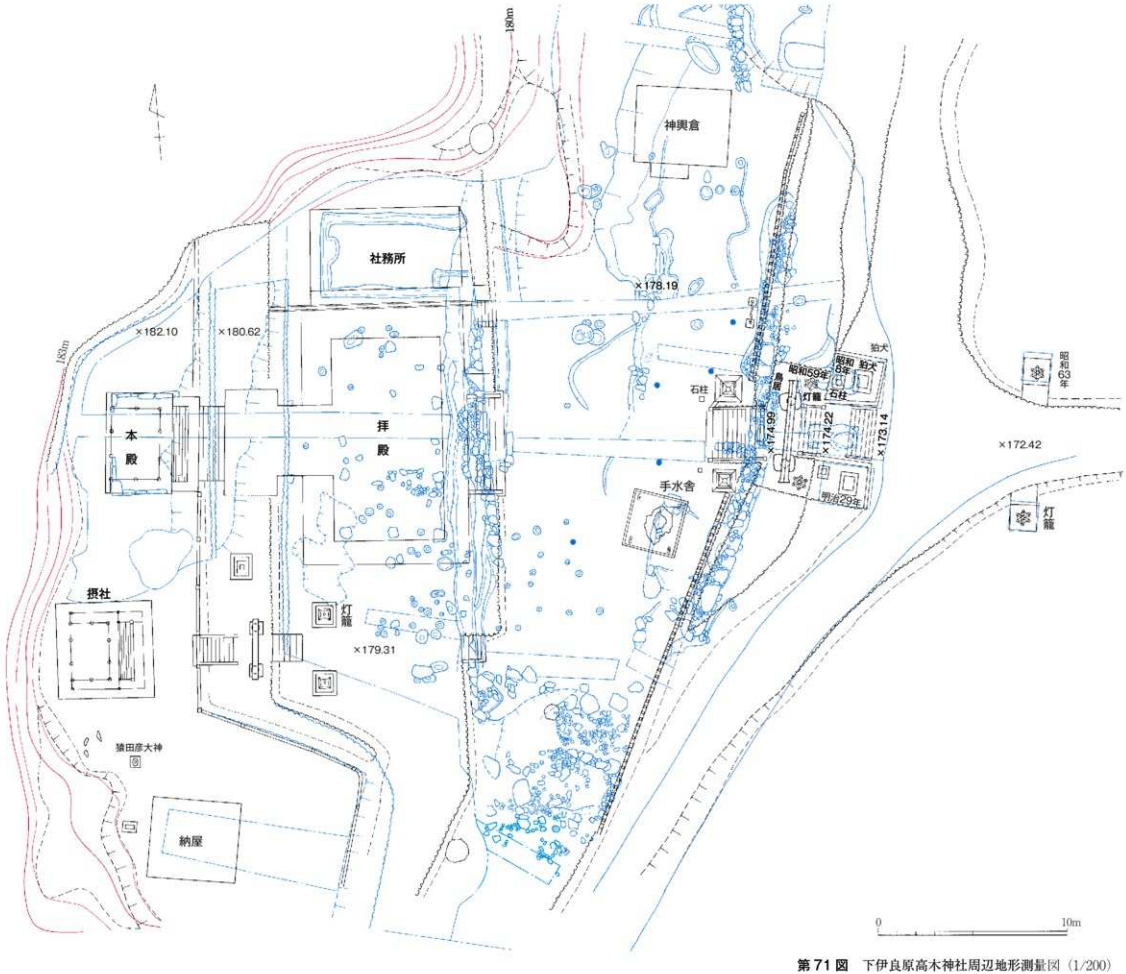
26　西の塚水神様（第 70 図）

国道 496 号線から下伊良原高木神社へ向かう参道が祓川を渡ったところの直ぐ北に民家があり、その敷地の川に近いところに自然石（川原石）を台座の上に置いた水神様が祀られていた。残され



第69図　鳴滝猿田彦大神実測図（1/30）

第 70 図　西の塚水神様（「21 年資料」）



第 71 図　下伊良原高木神社周辺地形測量図（1/200）

た写真（コピー）から判断して総高約 1.2 m、0.6 mほどの高さまではコンクリートの基礎のようで、その上に自然石を横置きにして台石とし、さらに 0.4 mほどの高さの川原石を立てている。その根元は倒れないようにコンクリートで巻いているようである。

家屋解体時に神事を行って解体、川原へ戻したという。

27　下伊良原高木神社（図版 22、第 71・72 図）

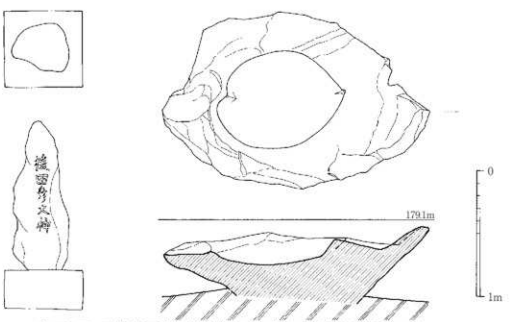
下伊良原高木神社は、英彦山（享保 14 年：1729 以前は彦山）の神領内に祀られたという 48 の大行事社の一つで、その開始は弘仁 5 年（814）とも同 10 年とも伝えられる。ただ、貞応年間（1222～24）に「宮園」から現在地へ遷座したと伝わる。

平成 25 年度に境内地の発掘調査を実施し、アカホヤ火山灰の単純層や縄文時代の包含層のほか、貞応年間に比定できる土師器鍋が一定程度出土したことから伝承は根拠のないものではなさそうである。ただ、祭祀行為を窺えるのは大小の土師器皿（杯）が伏せて並べ置かれ、その周辺に銅銭数枚が散乱（？）した状況、そしてその近くに火熱を受けた焼土やあるいはしっかりとした柱穴などが伴う可能性が考えられる 15 世紀前半頃のものが最も古い痕跡と考えられる。また、今時のダム建設に伴って移設するまで使用された石垣の下層から複数の石積みなどが現れたが、それらは古くても江戸期のものと考えられている。

第 71 図は石造物調査時の 1/100 地形測量図と発掘調査時の 1/20 遺構実測図を重ねたものである。地形測量図を分割して合わせようとしたが、それでも部分的にずれが生じている。精度の問題として了としていただきたい。

境内には鳥居・狛犬・石灯籠等々、当然のように多くの石造物がある。ただ、多くは明治以降の年号が記されていて、ここでは「宝暦十（1760）」年銘のある鳥居、「安永二歳（1773）」銘のある手水鉢、そして年号はないが「猿田彦太神」の石碑を紹介する。

鳥居　この神社には 2 基の明神鳥居がある。1 基は祓川東の国道脇、参道の入口に立つもので、昭和 8 年（1933）に建てられたものである。今 1 基は境内へ通じる石段の途中に置かれたもので、向かって右柱には「奉寄進」と大書し、下にやや間隔をあけて「氏子中　三宅氏」と小さく並列さ



第 72 図　下伊良原高木神社猿田彦大神・手水鉢実測図（1/30）

せる。左柱には「寶暦十庚辰十二」と、いずれも東面に刻む。額束は無銘ですべて花崗岩を用いている。

手水鉢　拝殿の一段下、広場の南端付近にあった。長軸4.3 m、短軸2.8 m、高さ1.1 m以上ある花崗岩を用い、水穴は長軸2.0 m、短軸1.5 m、深さ0.3 mほどの楕円形に近いが、長軸の一方を尖り気味に突出させ、その反対側を凹ませてハート形に変化を付けている。長軸側面に、右から「安永二歳」・「白川又右衛門（宣？）寛」・「白川治良兵衛信富」・「巳八月吉日」とある。『石造遺物編』・「調査カード」ともに人名は「白川」以下不明とあるが、「白川治良兵衛信富」は『県報』143、274頁にある白川家略系譜中の「信富　次郎兵衛　寛政五年（1793）没」と「次郎兵衛」の表記が異なるが同一人物としてよいであろう。後述する上伊良原高木神社の手水鉢に「安永二年（1773）　庄屋白川又左衛門房寛」・「古屋河内貞七　己六月吉日」と刻まれている。年号が同じであり、ここで「白川又右衛門（宣？）寛」と読んだ線刻を改めて見ると「白川又左衛門房寛」と確かに読める。同一人物によって上伊良原・下伊良原両高木神社へ手水鉢の奉納がなされたということであろう。なお、『犀川町誌』によれば、文化2年（1805）から文政三年（1820）の間に下伊良原村庄屋として「白川又左衛門」の名があり、その間は上伊良原村に庄屋が記載されていないことから、兼帯していたと考えられる。ただ、手水鉢の記年とは半世紀ほどの隔たりがあることから、同じ通称を使用した親子と見てよいであろう。

猨田彦太神　境内に所在した。「調査カード」によれば台石は方形に整形した白色系の花崗岩、石碑は灰色系花崗岩（？）の自然石で、丁寧な加工は行っていないようである。台石は約60㎝四方の正方形で高さは30㎝ほどあり、石碑は高さ約1.2 m、最大幅0.45 mを測る。「猨田彦大神」と大書するほかには銘はない。また、これも原・釜の河内猨田彦同様、けもの偏がて偏となる。このような境内地に建てられることに疑問があるが、『石造遺物編』の調査がなされた昭和51年（1976）には既にここにあった。現在は移設した下伊良原高木神社境内の南東端に置かれる。

28　下地ヶ原石塔群（図版23・43～47、第73～81図）

この付近は最も棚田が造成された地区であるが、棚田の上位に墓地が形成されていた。『石造遺物編』では「家士が原石塔群」として紹介され、「石塔はいろいろな種類があり、概算してみると、一石五輪塔一基、五輪塔二〇基以上、板碑四基以上がある。いずれもこの付近に散在していたものを、集めたものらしい」と記されている。

第73図は墓地の改葬が行われる前に作成した測量図で、墓域は3区画に分かれる。北端（北区）は北辺に3 m、東辺に5 mほどの長さの石垣が築かれ、東西方向はなお5 m程まで平坦になり、西端では1 m弱の高さで掘削している。東南端に階段が付き、墓石は南半に集まる。また、この区画の西端には五輪塔などが集積されていた。中央の区画（中区）は8×10 mほどの規模で、参道はスロープとなっていた。前面となる東辺では北区より0.2 mほど低くなり、両者の境は土手状に0.3 mほど高くなっている。ただ、この区画は西側に向かって徐々に高くなり、東西の標高差が0.7 mほどある。墓石が最も集中していて、最も古い年号の墓石は南西隅付近の「元禄九年（1696）」と刻まれたものであった。この区画も東辺および参道の北に石垣を置く。南端の区画は南北10 m、東西9 mほどの最も大きな区画で、これも東辺南端付近および北辺東端付近に石垣が見える。中区との間にやはり0.3 mほどの高さの土手を置き、東端付近は中区よりわずか0.1 mほど高くなるが、西端付近はほぼ同レベルとなっている。参道に石段を置き、区画内に墓石が散在していた。なお、この3つの区画は「下伊良原下地ヶ原遺跡V区」として、改葬後の平成26年度に部分的に発掘調査

を行い、平成29年に報告書が刊行されている（「伊良原Ⅵ」『福岡県文化財調査報告書』第257集、2017）。第73図では発掘調査の遺構配置図を重ねている。

さて、石塔であるが北区西端で集積された石塔群を5群としたが、それらを含めてこの3つの区画から分散して数点の石塔等を採集していて、それらを順に紹介する。

1群　南区の北西隅付近にあった五輪塔空風輪、および頂部を欠く一石五輪塔である。

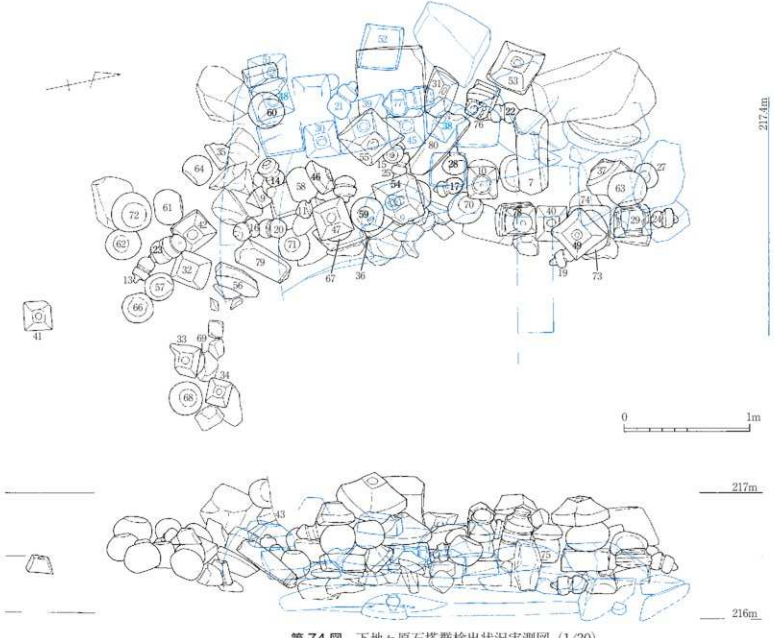
2群　1群の南東、石段のほぼ正面奥寄りにあった五輪塔火輪と同空風輪各1点である。

3群　中区西端中央付近にあった板碑である。

4群　3群の北東に集石があり、その上にあった五輪塔水輪1点。

5群　北区西端に集積された石塔群である。5×2mの範囲に一石五輪塔6基、碑伝5基、五輪

第73図　下地ヶ原石塔群周辺地形測量図（1/200）

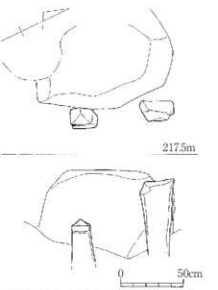


第 74 図　下地ヶ原石塔群検出状況実測図（1/30）

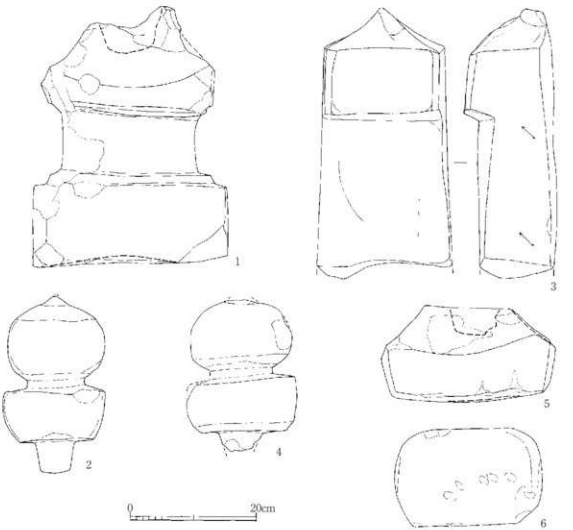
塔（空風輪20点、火輪25点、水輪21点、地輪9点）などが密集していた。一見組み合わさったような五輪塔も見られるが、全体的な在り方として周辺から集積されたものに相違ないであろう。

石塔等　第76図1・2が1群、4・5が2群、3が3群、6が4群、7以下が5群で、これらも基本的に凝灰岩を用いている。76～80も5群で、これらは作図していない。

1は頂部に枘穴があることから別造りとなる石塔。残存部はいずれも方形に作り、基礎に相当する部位の上部および屋根に相当する部位の下端に段を付けている。水輪に相当する部位が球形をまったく見せていないことから本来的に方形を意識したものだとすると、その上下の小さな段と併せてこれは五輪塔というよりも宝篋印塔を一石で作り出すために簡略化したものではないかと思わせる。通常の一石五輪塔であれば空風輪も一石から作るのであるが、宝篋印塔に近づけようとすれば相輪は一定程度複雑なものとなることから、失敗して全体に影響を及ぼすことを回避するためにそこだけを別造りとしたものではなかろうか。ただ、屋根の四隅につく隅飾の表現が見られないこと、相輪が今回の調査では見つかっていないことは否定的な材料といえるが、直方体に近い塔身の上下



第75図　下地ヶ原石塔群3群検出状況実測図（1/30）



第76図　下地ヶ原石塔群1～4群石塔実測図（1/6）

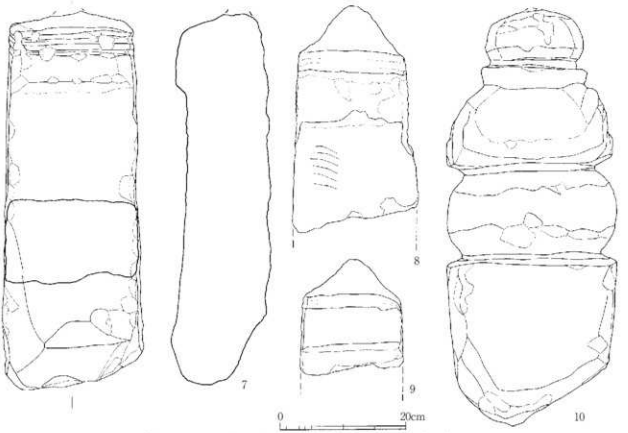
の段の意味を重視して宝篋印塔とするのが妥当であろう。2は表面が荒れているが原状をよく留める空風輪。

3は頂部が低く山形となる碑伝で、下部を欠く。残存高40.9cm、最大幅は下端で21.8cmとなる。額部上端の二条線がないが、額部は最大4cmのしっかりとした段をもつ。額部の厚さは最大で14.5cm、身部は同12.5cmほどとなる。なお、額部左右に弱い面取りを施したようになっている。

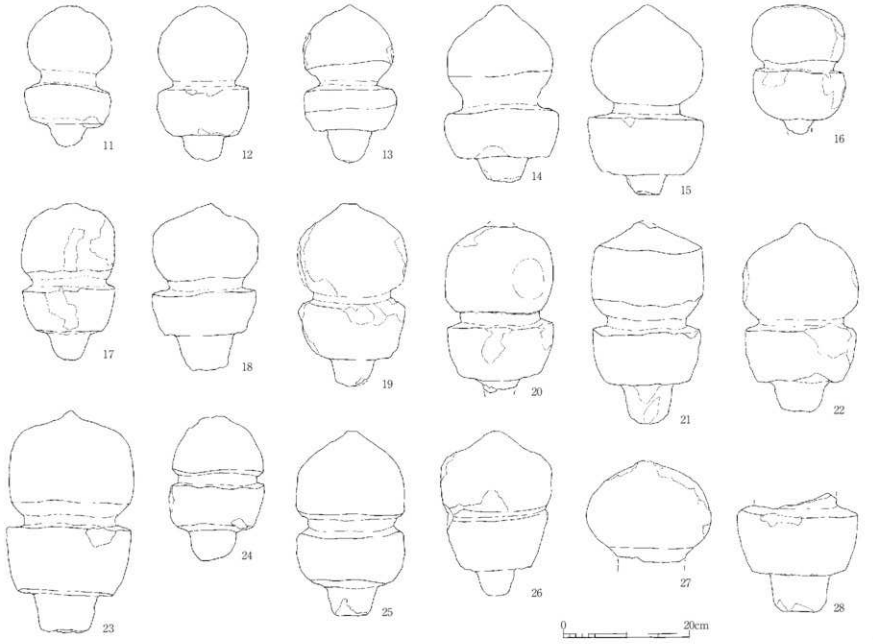
4は頂部・枘などを欠く空風輪で、両者の境は明瞭に刻まれる。5は図で見る以上に荒れた感じの火輪で、石材によるものであろうか。軒口が幅広く、屋根の勾配は直線的となる。

6は形状がやや不整となる水輪で、最大径は23.5cmを測る。

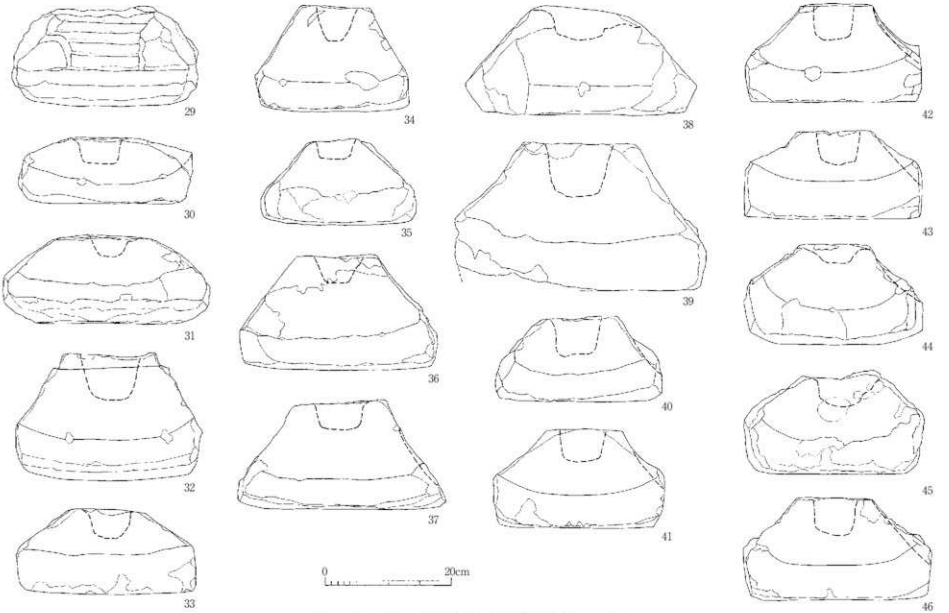
7～9は碑伝。7は他例に比して頂部の山形の盛り上がりが小さいが、中央部付近、先端を欠損する。山形の直下に二条線を刻むが、本来的なものか、摩耗によるものか非常に甘くなっている。その下4cmの付近に2cm弱の段がつくが、この後も甘くなっている。全体に風化が進んでいるのであろう。額部の左右には幅2.5cmほどの面取を施している。背面も風化によるものか起伏が甚だしくなるが、額部の厚さは最大で15cm、身部の厚さは整った形状を保つ下端（整形範囲としてよいであろう）付近で15cmほどとなる。下端から11cmほどの間は他例のような加工痕が見えないが、これも風化によるものであろう。幅は二条線付近で約20cm、整形範囲下端付近で22cmほどである。8は残存長33.5cm、最大幅20cmほどである。頂部が山形に尖り、風化のために判然としないが二条線が刻まれていることは確かである。そして、その下7cmほどの位置に段が付くが、縦断面図を作成しておらず厚さ等の記録を失念している。ただ、これも額部左端に面取りを確認できる。9も下位を大きく欠損する。残存高17.2cm、最大幅16.4cmで、これも厚みの記録を失念。8に似た形状となり、風化のために二条線が図示されていないが、写真では左山形直下に弱い2条の凹みが見えることから二条線が刻まれたことは確かであろう。その下6～7cmに段があり、額部左側に面取りが



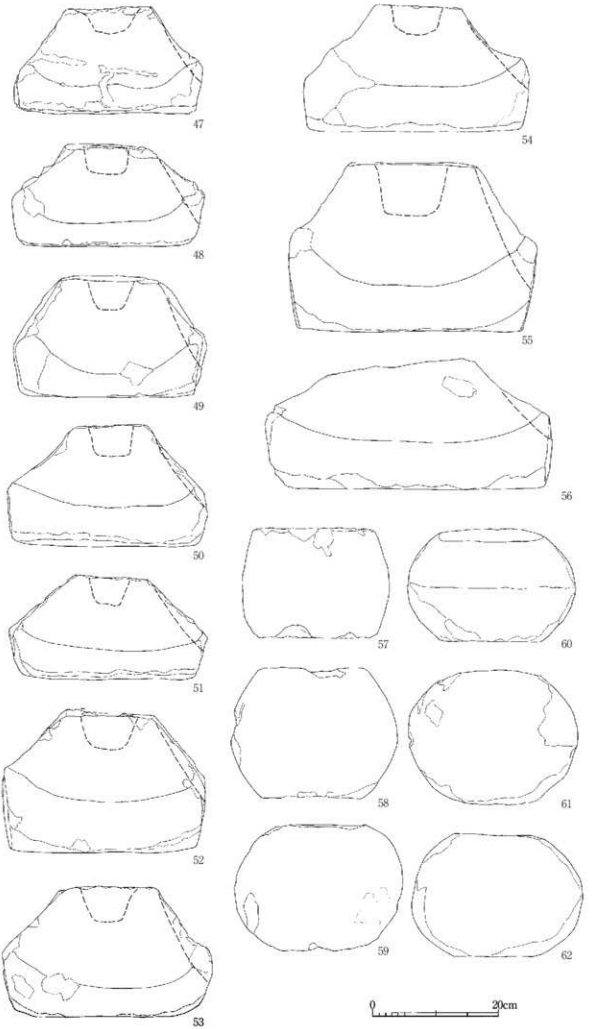
第77図　下地ヶ原石塔群5群石塔実測図1（1/6）



第 78 図　下地ヶ原石塔群 5 群石塔実測図 2（1/6）



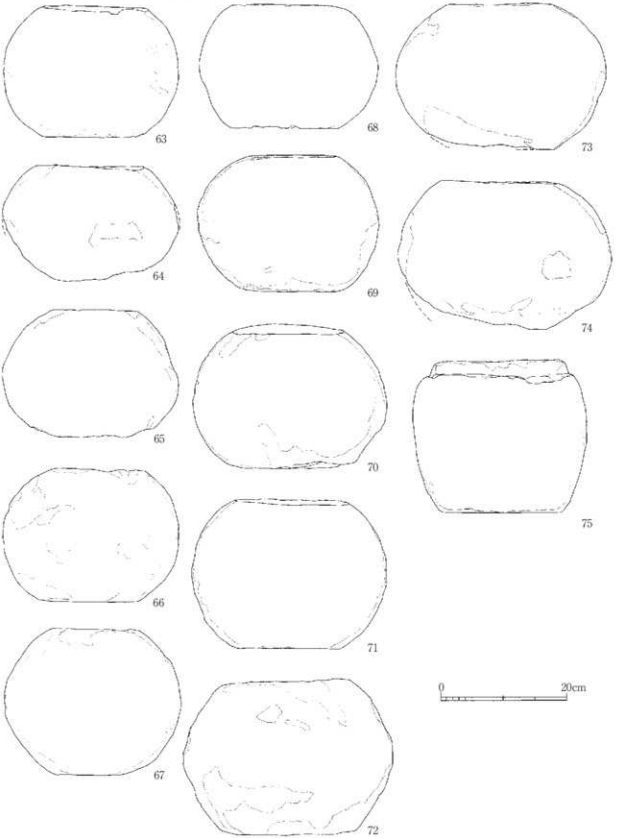
第 79 図　下地ヶ原石塔群 5 群石塔実測図 3（1/6）



第 80 図　下地ヶ原石塔群 5 群石塔実測図 4（1/6）

わずかに観察できる。先の２点の碑伝が灰白色～黄白色といった凝灰岩であるのに対し、これは灰黒色の凝灰岩を使用。

10は総高66cmの一石五輪塔で、完存するようである。地輪下部は不整となるが、ここは埋める部分であろう。地輪の幅は27cmで、水輪径・火輪幅もほぼ同大である。水輪は扁平な張りの弱い球形に作り出し、火輪は隅棟が異様に高く、屋根中央部が低くなって軒上辺が大きくU字形を描い



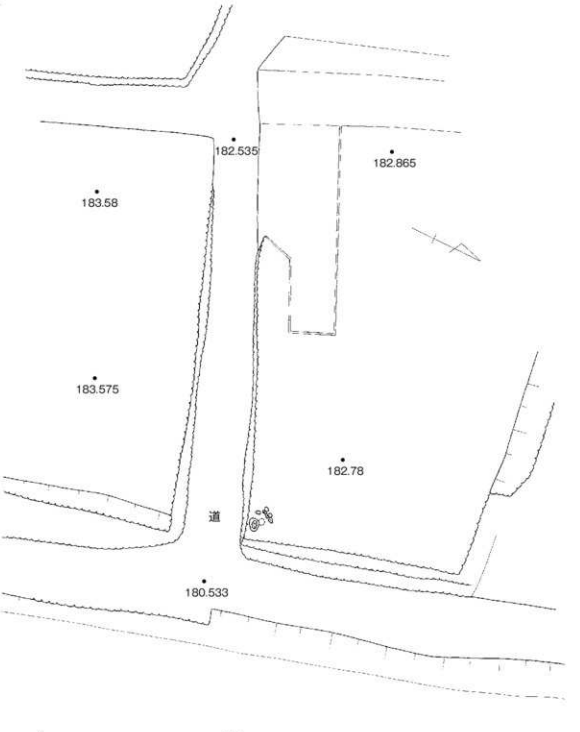
第81図　下地ヶ原石塔群５群石塔実測図５（1/6）

ている。風輪はもはや独立した様でなく、空輪の受け鉢状に小型化している。

11～28は空風輪。残存状況によって印象が変わってしまうが、11～15・27は一応空輪が玉葱状の形状となって側縁が張りをもつもの、16～23は玉葱状の空輪の即縁が弱い曲線を描くあるいは直線に近くなるもの、24～26は空風輪を棒状に整形した後に両者を溝あるいは沈線で区別するものを並べた。16は風輪下部が丸味をもつ。

29は1点だけが確認された宝篋印塔の笠部で、表面の摩滅が著しい。

30～56は火輪あるいは笠形である。30･31は高さが低く、隅棟の勾配が非常に弱い火輪。ただ、30は各辺中央付近の勾配がきつくなっていて、軒上辺が浅いU字形となる。31は軒上辺がほぼ水平に近く、屋根と隅棟の勾配はほぼ同じである。32は屋根上端に段を付ける。隅棟や屋根の反り



第82図 西の塚猿田彦大神周辺地形測量図（1/200）

は弱く、ほぼ直線的となり、軒上辺は緩くU字形を描く。

33～39は隅棟や屋根の反りが弱いもの、軒上辺が直線に近いものを並べたが、幾分恣意的な嫌いがなしとはしない。33は高さが低く、30・31などとの中間的な形態となるもの。34は幅24.2cm、高さ16.8cm、最大となる39は幅39.9cm、高さ23.6cmを測る。40～46は軒上辺がU字形を描くものであるが強弱があり、52・55は特に著しい。

57～74は水輪。57は球形というよりエンタシス状に近い形状となるもの、58は張りが強いが、やはり球形と呼ぶには相応しくない。以下は体部が球形ないし偏球形となるもので、最大となる74は幅33.7cm、高さ23.5cmの大きさである。

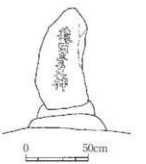
75は宝塔の塔身であろう。最大径部分が上位にあって、張りが弱く、上部に段を付す。

76は残存高40.7cm、最大幅23.6cm、77は胴41.7cm、23.0cmを測るほぼ同大同巧の石塔である。台石・塔身は方形で、屋根は勾配が強く反りが弱い。その頂部、露盤と呼ぶべき所に3弁の蓮弁状の浮き彫りを施す。頂部は相輪あるいは宝珠を載せていたものと思われる。立てたときの安定を図るために、基底部下面の中央部が突出している。78は方柱状の石材から削り出した一石五輪塔で、地・水・火輪は平面が方形に近い。残存高46.7cm、最大幅25.8cmを測る。79・80は頂部を直線的で勾配の低い山形とし、二条線を刻む板碑で、額部をもたない。79は残存高55.2cm、最大幅20.7cm、80は同57.5cm、22.9cmを測り、両者ともに完存するようである。

29　西の塚猿田彦大神（図版24、第82・83図）

国道496号線から西の塚橋で萩川を渡るとしばらくしてT字路となり、それを右（北）へ行けば下伊良原高木神社へ通じる。曲がって直ぐ2軒の民家の間に隘路があってふたたびT字路となるが、その交差点の北西角、民家の敷地の隅で南を向いてこの猿田彦大神は立っていた。今は、下伊良原集団移転地北の国道脇に置かれる。

丸味のある台石の上に、0.8m近い高さの自然石を立てて「猿田彦大神」とのみ刻んでいる。いずれも安山岩で、加工痕は見えない。現状で立石の下端ははコンクリートで固定しているが、「調査カード」作成時の平成9年も同様であった。また、当時から石碑の背面に当たる北西部に数個の小型の川原石がやはり立てられていたが、それらも現在地では脇に並べ置かれている。



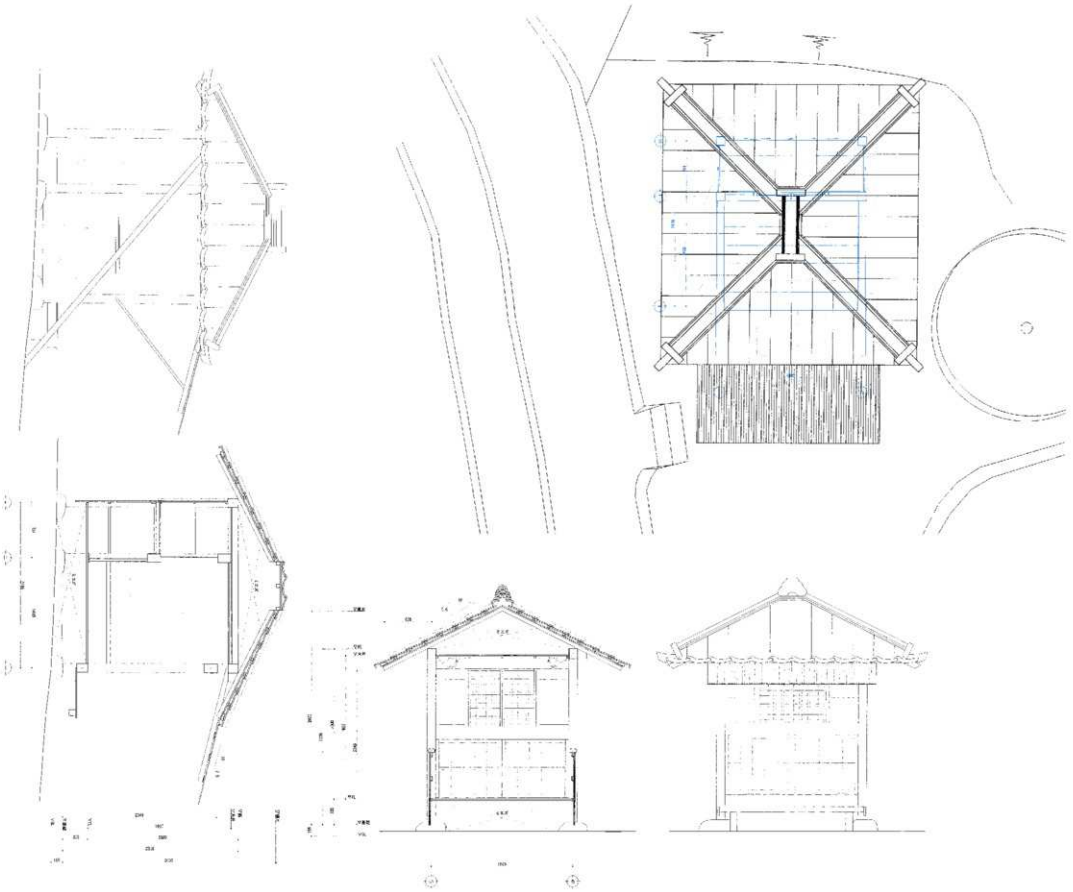
第83図　西の塚猿田彦大神実測図（1/30）

12月13日が猿田彦の祭日で赤飯を炊いたという。また、正月には注連縄を替え、餅を供えた。

30　西の塚観音堂（図版24・25、第84・85図）

集落の南端、小川に沿った里道の脇の水田の一画に置かれている。堂は南に向いて開き、北側に古木が一本あり、平成9年の調査で作成した「調査カード」にはさらに北に墓石と石祠が写っているが、今回の調査の祭には既に遷されていた（第88図、「弓若八幡大菩薩像祠」参照）。

観音堂　他の小堂と同様、1×1軒の建物の奥に小規模な内陣を置いて、構造上は1×2間とする建物である。外陣は1.47×1.9mの柱間で、梁行が随分広くなり、内陣の奥行きは0.73mを測る。



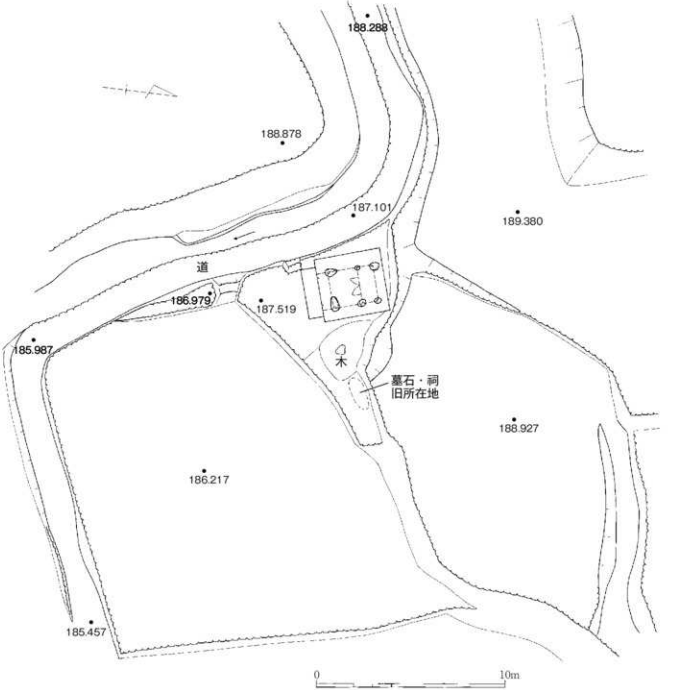
第 84 図　西の塚観音堂実測図（1/50）

自然石玉石基礎を据え、柱を建てて桁で繋ぎ、梁を載せて京呂組としている。貫を使わず、床下は見えないが足元は敷居框で固めている。また、入口に切目縁を置くが、その上のトタン庇とともに手元の昭和56年（1981）の写真には両者がなく、平成9年の「調査カード」には写っている。

小屋組は見えないが、垂木を配って野地板・杉皮を張り、葺き土を載せてセメント瓦で葺いている。なお、屋根は南北方向に小さな棟を置く寄棟造である。

外壁は真壁竪羽目板張り目板押さえ、内壁は外壁裏面の化粧板壁、床は板張り、天井は竿縁天井板張り。内陣の建具は格子戸の開き戸、内陣下部に地袋を設け、建具は板戸の開き戸とする。

聖観音坐像　舟形光背を有し、蓮弁を作り出した蓮台に載る凝灰岩製の坐像で全高81.0cm。詳細は不明だが頭に宝冠を載せて右手は右腿に添え、左手に経巻らしきもの（正しくは蓮の茎）を持ち、「稚拙な彫り」と『民俗調査編』で評されている。『県報』143では「近代」の制作とされる。

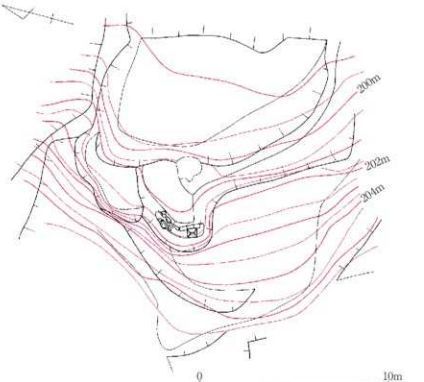


第85図　西の塚観音堂周辺地形測量図（1/200）

31　弓若八幡大菩薩像祠（図版 25、第 86 ～ 88 図）

城山と呼ばれる山の東麓に位置し、斜面を削り込んで幅 1 ～ 1.5 m の平坦に近い面を 3.5 m の長さで造成、その西端、最奥部にコンクリートブロックを敷き、その上に石祠を祀っている。石祠背面からの削り込みは 1.5 mほどである。

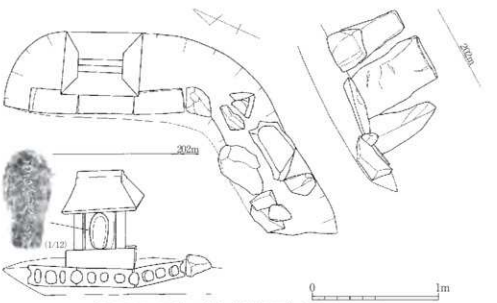
石祠は屋根の幅 60 ㎝余、同奥行 50㎝、同高さ 30㎝強で、平面は入母屋造を思わせるが、断面五角形となる棟が高い寄棟造というべきであろう。正面・背面の屋根は上端付近が膨らんで弧を描き、それ以下と左右両側面は直線的となる。壁は三方を囲み、横壁から背面に掛けてL字形の石材２個を組み合わせ、さらに背面中央に１枚の板石をはめて３枚の石材から構成される。台石も２枚の石を前後に並べ、これらはいずれも花崗岩で、表面が非常に滑らかとなりいかにも新しく作られた感がある。



第 86 図　弓若八幡大菩薩像周辺地形測量図（1/200）

石祠の内部には砲弾形に近い安山岩の川原石が立て置かれ、その表面を削って平滑にし「弓若八幡大菩薩」と線刻する。削った面には縦位の細条痕が無数に残る。

石祠の南に石祠に対して斜位となる方向で自然石４個が立てられ、それらの前、北西側に拝石が横置きされている。これらの自然石に文字はない。最大の立石は幅 50㎝、高さ 60㎝ほどである。



第 87 図　弓若八幡大菩薩像祠等実測図（1/30）

第 88 図　西の塚観音堂脇の石祠（「調査カード」）

これらは無縁墓地として処置されたが、埋葬があったかどうかの記録はない。

なお、先の西の塚観音堂の脇にかつて存在した石祠が、この弓若八幡大菩薩像祠によく似ている。平成 9 年作成の「調査カード」の写真を掲載しておく。石祠の脇に置かれたものが何であるか詳細がわからないのであるが、それには「西塚□人□神　明治十一年（1878）」とあったようである。「調査カード」に依ればは次のような言い伝えがあるという。

> 明治の頃、某さんというお金持ちがいた（当時の金で 3000 円もっていた）。鶏の卵をアオダイショウが食べてしまうので、蛇と見れば悪いことをしてない蛇まで殺していた。ところがある日突然足が動けなくなったので、山伏（蔵持山の中ノ坊）を呼んで占ってもらったところ「蛇の祟りだろう」と云うことになり石祠を祀ることになった。当時はヤワイ石で作っていたので壊れ、今あるのは緒方さんが新しくしたもの。

ただ、石祠が似ているとはいえ、「調査カード」に「弓若八幡大菩薩」という書き込みがないことから、似て非なるものであるかも知れない。

32　城山五輪塔群（第 89 図）

城山の頂部に「大蔵日向守之墓」・「西塚無縁之墓」という 2 基の墓石が立ち、その間に石塔の部材が数点まとめられていた。『石造遺物編』には一部がランダムに積み上げられた写真が掲載され、平成 9 年の「調査カード」にあるスケッチではさらに積み上げられていたようである。今回の調査時には既に所有者が別の土地へ移した後で測量図等は作成していない。城山石塔群では 2 基の墓石の間にあったと「調査カード」に記され

第 89 図　城山五輪塔群（「調査カード」）

るが、後述する地蔵堂石塔群１～３は「大蔵日向守之墓」・「西之塚無縁墓之塔」と「無縁之塔」の３基の石塔の間にある。したがって、これは城山五輪塔群を移設したものである。

なお、平成25年に下伊良原西の塚遺跡Ⅳ区としてこの山頂部にトレンチを入れたが、遺構は確認できず、ほぼ完形の土師器小皿１点が出土しただけである（福岡県教育委員会「伊良原Ⅵ」『福岡県文化財調査報告書』第257集、2017）。ただ、墓石等とトレンチとの正確な位置関係は確認できない。

33　城山庚申塔（図版26、第12・90図）

第90図　城山庚申塔
（「調査カード」）

これも今回の調査時には既に移設されていて、庚申塔の実測図のほかに地形測量図等の資料はない。『石造遺物編』の記述を引用しておく。

> 城山と呼ばれる小山の西側麓に、この塔は彫面を南向きにして建てられている。上部を除いてはほぼ長方形で、川原石を用いてつくられている。高さ75cm、横44cmをはかる。表面の上部に刻まれた文字は次のとおりである。

続けて庚申塔に刻まれた文字を記している。中央上部に大きく「庚申」と刻み、右左に「元文四年（1739）」、「未三月十四日」と、頭を下げてやや小さく刻んでいる。「庚」の字はまだれの中を上下に分けていて、下は「ハ」となる。元文４年の干支は「己未」である。下段には９人の名前が刷し字で記されている。石材は厚みのある安山岩で、文字を刻んだ面のみ滑らかに加工したようであるが、平滑化は企図していないようである。

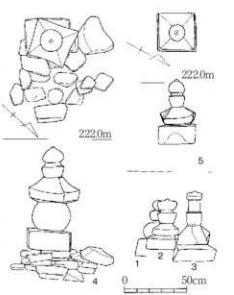
34　地蔵堂石塔群（図版26、第91・92図）

城山の西側に連続する丘陵尾根線上にあり、先端の畑地との比高差は８～９mある。

石塔は新しい墓石の間に適当に積み上げられた見かけ上３基（1～3）があり、その北側にこれは本来のセットと思われる五輪塔１基（4）、そしてそれらから１mほど低い位置にこれも積み上げられた石塔１基（5）がある。

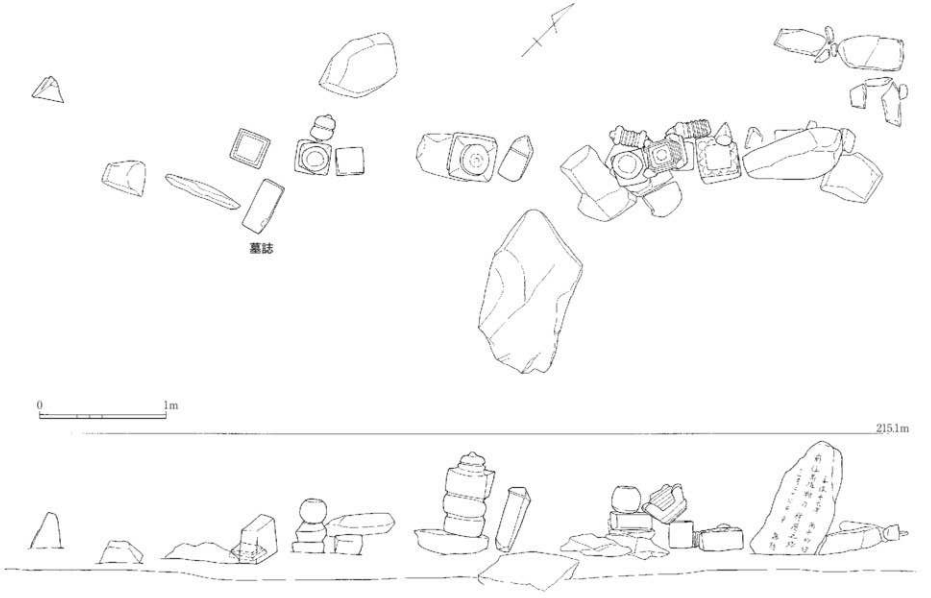
１は別個体の地輪・水輪が重ねられ、その上に空風輪がセメントで固定されている。２は地輪・火輪がやはりセメントで固定されていて、その上に大きさが不釣り合いな空風輪が天地逆に置かれている。３も地輪と火輪の組合せか。セメントで固定された相輪は別物であろう。この１～３が本来城山石塔群と呼ばれたものであるということは先述した。

４は本来の組み合わせと思われる。周辺には川原石が置かれ、



第91図　地蔵堂石塔群実測図
（1/30）

第92図　地蔵堂石塔群・瑞応寺石塔群周辺地形測量図（1/200）



第 93 図　瑞応寺石塔群検出状況実測図（1/30）

第 94 図　下伊良原寺ノ谷遺跡と瑞応寺石塔群

五輪塔はその上に立てられている。凝灰岩製で、総高1.7 m。川原石も当然持ち込まれたものであろう。

5は幅1.1 ～ 1.6 m、長さ4.1 mほどの自然石を乱雑に並べた石列の中、南端近くに位置する。詳細な図が残されていないが、石列の頂部が内部に比べて0.1 ～ 0.2 m高いだけであるので、積み上げたものではないようである。北側に自然石の扁平な立石が3基があり、1基には「南无阿彌陀佛」と端正な文字が刻まれ、周囲に拳大ほどの川原石が散乱する。石塔は水輪を欠いた五輪塔であるが、空風輪の大きさが不釣り合いで、これも適当に積み上げたものであろう。

35　瑞応寺石塔群（図版26、第91・90図）

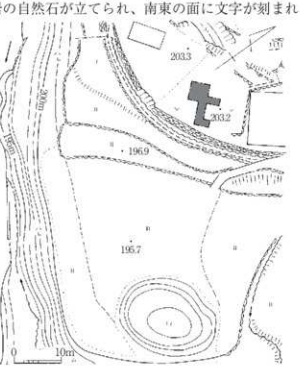
地蔵山石塔群の南、丘陵の南斜面中の平坦面に位置し、前面にあたる南東部は既にダム関連工事で崖となっている。他の石塔群が一石五輪塔や五輪塔・板碑を主体としているのに対し、ここではそれらに加えて石碑や墓誌があって趣が異なる。また、ほぼ南西から北東に掛けて直線的に配されていた。ここは被水没地域となるため測量だけで調査を終えたが、現在は所在不明。

南西端に花崗岩の墓誌があり、中央に「歸真圓信大徳覚位」右左には一段低く、「正徳元年（1711）」、「卯八月八日立之」とある。『石造遺物編』では「正徳六年」と読んでいるが、正徳6年6月に享保に改元している。正徳元年の干支は辛卯、正徳6年は丙申で、実際にはない「正徳6年8月8日（享保元年8月8日）」の干支は乙未である。日付の頭にある卯の文字が該当するのは正徳元年である。墓誌は縦40cm、幅26 ～ 30cm、厚さ18cmでわずかに台形となる。

その隣りには地輪・火輪・水輪を重ねたものと地輪だけの五輪塔が並ぶ。さらに一石五輪塔と板碑が互いに近接して立つが、一石五輪塔は自然石の上にある。さらに北側に日輪・火輪が重なる五輪塔と崩落した宝篋印塔、そして石塔が建てられている。宝篋印塔の台座には簡略な反花が刻まれ、塔身の4面に金剛界四仏を表す種子 （ウーン：阿閦如来）、 （タラーック：宝生如来）、 （キリーク：阿弥陀如来）、 （アク：不空成就如来）が刻まれる。ウーンとある面の右上に「享保六□□」とある。享保6年は1721年である。

北東端付近には高さ1 m、幅0.5 mほどの安山岩の自然石が立てられ、南東の面に文字が刻まれている。中央に「前住萬縁物外禅座之塔」、右左頭を下げて「享保十六年（1731）丙子　俗姓」・「十一月二十六日辛　諏訪」とある。享保16年の干支は辛亥であり、文意はわからない。

この石塔群の東、眼下の水田で平成18年度に発掘調査を行っている。「Ⅱ　位置と環境」で紹介したように、この下伊良原寺ノ谷遺跡で規則的な配列を保って2 ～ 3度の建て替えが行われた掘立柱建物跡群などを検出し、記録に残る瑞応寺跡を想定している。記録には「元和八年（1622）之頃所記之由緒于今也」、「貞享元年（1684）安国寺久山和尚弟子梵州僧住職・・」などとあり、小倉安国寺末寺としている。これらの石塔群は位置的に瑞応寺との関連するものであろう。年代的にも大きな齟齬はないといえる。



第95図　塚本遺跡試掘位置図(1/800)

36　塚本遺跡（第7・95図）

「塚本遺跡」として調査した地点についても「Ⅱ　位置と環境」で紹介した。その調査地点の西の畑地で試掘調査を行ったものである。

本来が北西から南東へ傾斜する地形を造成していて、現地表から地山の花崗岩バイラン土まで0.6～1.3mの深さがあり、土層スケッチでは深いところで10層に分層されている。

地山に掘り込む柱穴様の落ち込みを数基確認したが、大きな撹乱が複数入っていて、面的な調査は行っていない。

37　岩屋河内庚申塚（図版28、第12・96図）

地形測量図がないので詳細は不明であるが、地籍図ではこの地番の北辺に沿って里道が描かれていて、石塔の存在と関連なしとはしないであろう。当時の主要な道路であったものと思われる。石塔は造成地にあったとされているが、ダム事務所作成の地形図では平地が図化されていないので、小規模なものであろう。現地にあったころの写真では露出した巨岩の前面に置かれている。

第96図　岩屋河内庚申塚（「21年資料」）

庚申塔は右側面に自然面を残していて、正面となる部分は自然面と明らかに異なる破面で、これは文字を刻むために滑らかな面を作り出したようである。文字は全体に繊細で、「庚申」以外は見落としそうな華奢なものである。中央やや右の上部から「庚申」と大書し、右左には頭を下げて「享保七年（1722）壬寅」、「六月七日」と小さく刻む。また下段には6名の人名を刻むが、「調査カード」に記載がない。非常に繊細な線刻のために気付かなかったものであろう。

38　岩屋河内厄神様（第12・96図）

今回調査時には既に移設されていて、旧所在地が特定できなかったものか、地形測量図等が残されていない。地図中のドットは当時の調査担当者が町教委作成の文化財分布地図（1/8000）に落とした位置を参考にしたものであるが、精度に疑問がある。

第97図　岩屋河内厄神様（「21年資料」）

『県報』143に掲載された「岩屋河内　厄神様自然石　小社」は所在地から見て町文化財分布地図にある「中組厄神様」と同一で、それはここでいう「岩屋河内厄神様」と所在場所が明らかにが異なり、かつ標高260m以上の所に所

在するとされていてダム関連の事業が及ばないので基本的に調査対象ではなく、本例とは別個のもののようである。「岩屋河内下組庚申塔」が移設された下伊良原高木神社境内に「岩屋河内」が付された石造物は「庚申塔」のみである。

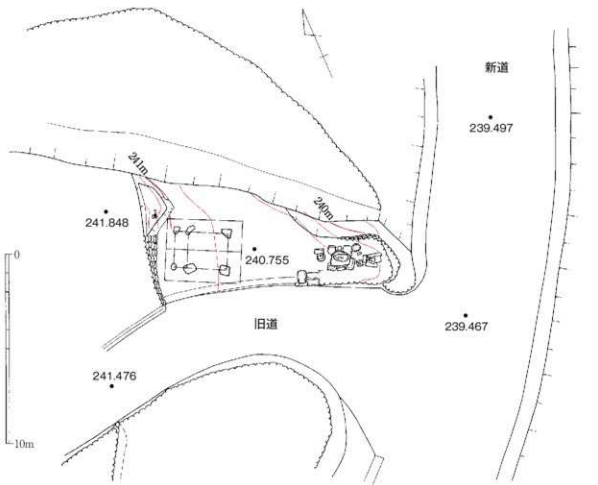
今回の調査時に作成された資料に「下伊良原　1980」と書き込みのある写真コピーが添付されている。これが地番であれば塚本遺跡の直ぐ西の宅地を示していて、該当しないのでこれは撮影の年を記したものであろう。残された写真はブロックで作られたような簡単な小屋に自然石３個を置いたもので、これは川原石ではないようである。

39　下組薬師堂・石塔群（図版 28 ～ 30，第 98 ～ 100 図）

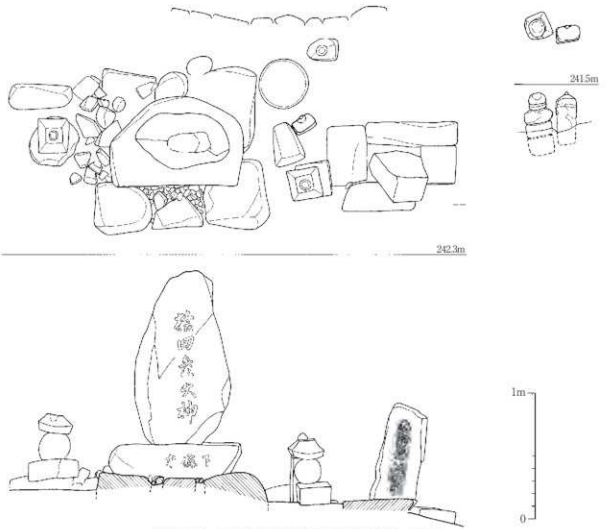
東西方向に三角形に近い形状の敷地の西端に薬師堂が東面して位置し、東端に猿田彦大神等の石塔群が南面して並んでいる。また、敷地の北西隅、薬師堂に向かって右後ろとなるところに神伝と一石五輪塔各１基が並んでいた。道路に面するがそれより１ｍほど高くなっていて、周辺を水田に囲まれている。

薬師堂　これも他の小堂と同様、１×１間の外陣に内陣を付す形態である。前部は 1.94 × 1.94 ｍの規模で、内陣は奥行き 0.72 ｍとなる。屋根は東西に棟を通す切妻造、妻入で東面する。

自然石玉石基礎を置いて柱を建て、桁で繋ぎ、梁を載せて京呂組としている。貫を使用せず、柱と桁・梁を方杖で固め、足元は敷居框、大引で固める。小屋組は見えないが、棟木を載せて垂木を



第 98 図　下組薬師堂周辺地形測量図（1/200）



第 99 図　下組薬師堂周辺石塔群実測図（1/30）

配り、野地板を張って波鉄板を葺く。

外壁は真壁竪羽目板張り目板押さえとし、破風妻壁は大壁に竪羽目板張りとしている。内壁は外壁裏面の化粧板壁、床は板張り、天井は竿縁天井板張りである。内陣の建具は格子戸の開き戸。

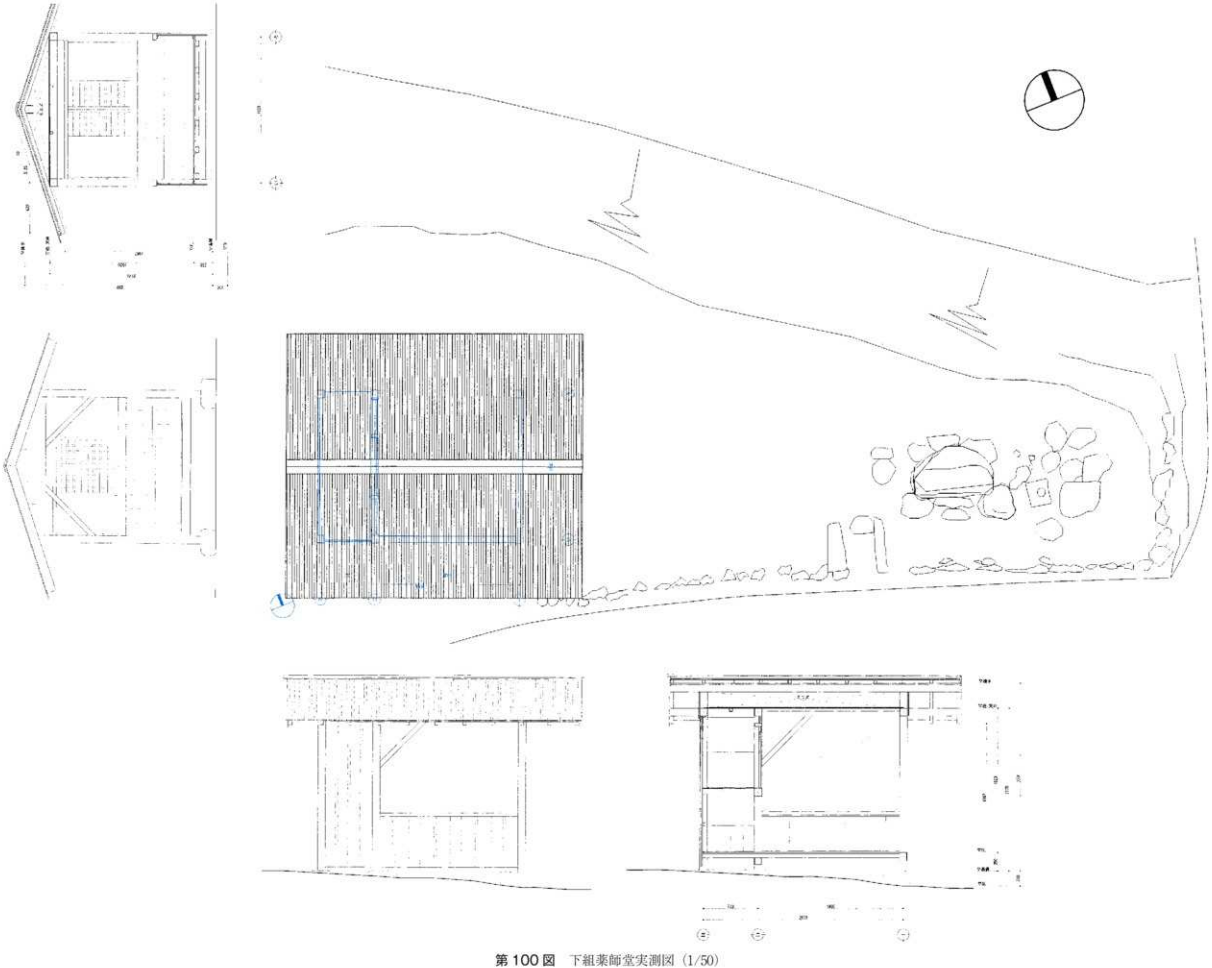
軒出が不釣り合いに深く、いかにも後補という感がある。

薬師如来坐像　『県報』134 では「薬師如来坐像（伝厄神）　木造　彩色　彫眼　像高 45.1cm　室町時代　右肩先・左手先欠　台座は江戸の後補」と説明されている。

東石塔群　西から五輪塔、猿田彦大神、五輪塔・碑伝、大乗妙典一石一字塔が並び、彫面は南を向く。五輪塔は凝灰岩。

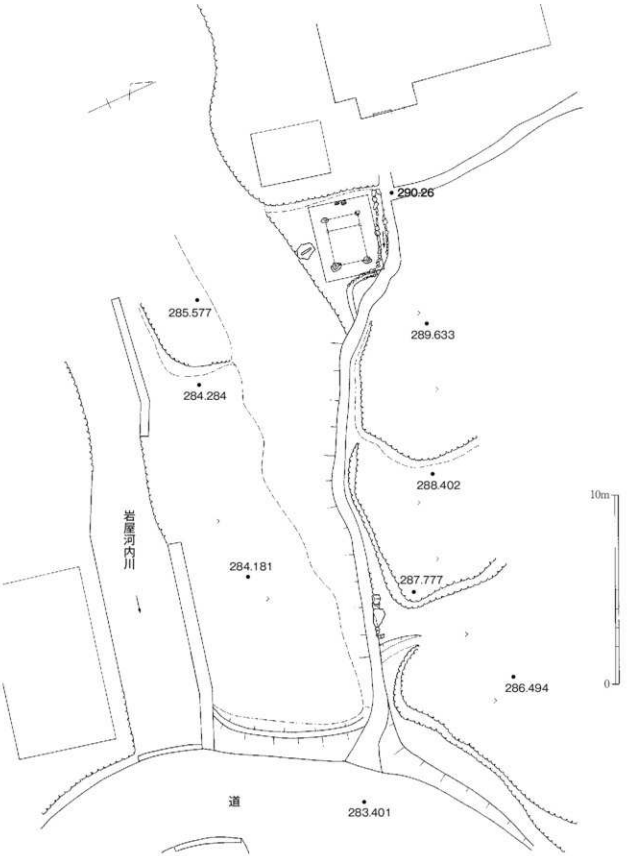
猿田彦大神は花崗岩を組んだ基壇の上に花崗岩の巨石を横置き、その上に「猿田彦大神」と刻んだ高さ 1.32 mの流紋岩系の石塔が建つ。加工・整形の痕跡はなく、彫面中央付近が右側から中央付近にかけて弧状に凹んでいるが、それも構わず中央部に「猿田彦大神」と大書、背面にはやはり中央に大きく「明治四十二年（1909）三月吉日」と流麗な草書体で大書する。また、横置きした台石にも「中講下」と刻んである。今、岩屋河内に向けて原猿田彦大神とともに並び立つ。

碑伝は五輪塔の北、背面に置かれていた。頂部を尖らせ、二条線のわずかに下位で段を付けて、その直下に種子 𑖤𑖼（ウン）を墨書していたという（「調査カード」）。0.55 mの高さが露出していた。これは凝灰岩。



第 100 図　下組薬師堂実測図（1/50）

東端は大乗妙典一石一字塔が並び、これには記年等はない。安山岩の角柱に近い石材を使用し、下端が別の石材で方形に囲まれていた。発掘調査は行っていない。この石塔は現在、下伊良原観音堂の一画に竹ノ畑大日堂などの石造物とともに並べ置かれている。周囲には五輪塔２基、板碑・碑伝・一石五輪塔各１基が配置されるが、これらは下組薬師堂の東西石塔群にあった小型の石造物で



第 101 図　上組観音堂周辺地形測量図（1/200）

ある。

西石塔群　高さ0.49 mの一石五輪塔は水輪の中位までが埋没、同0.42 mの板碑も下位の0.1 mほどが埋没していた。碑伝は頂部の突出が弱く通有の二条線がないが、その下の段はつくられる。

40　上組観音堂・石塔群（図版30・31、第101～103図）

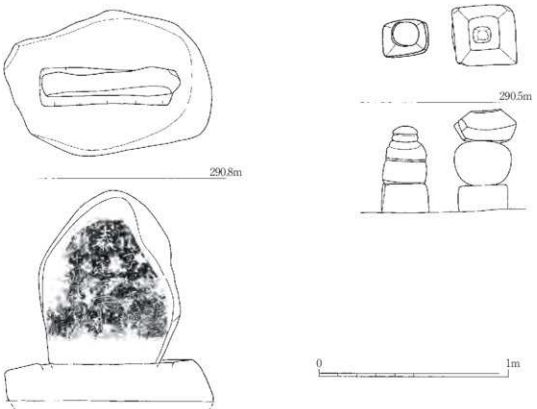
下組薬師堂から直線で500 m余り西側、谷奥に入った付近に所在する小堂である。谷筋を走る道路はこの薬師堂の数十m東で南北に分かれ、北の道はしばらくして行き止まりとなるが里道がさらに延びている。南の道は比較的新しいようで、車道が西側の谷（田川郡添田町津野）まで先の里道と交わりながら続いている。北側がより古い道で、さらに古くはこの観音堂の脇を通っていたことも推測される。なお、観音堂の南は5 mほどの崖があってその下に畑地が作られているが、本来は岩屋河内川まで深く落ちていたものと思われる。観音堂は川縁に立地していた。

観音堂　桁行2間（前部1間1.87 m、後部1間0.67 m）、梁行1間（1.76 m）の規模の小堂で、前後に間仕切りを設ける。屋根は棟を東西に置く入母屋造として、東面する妻入としている。

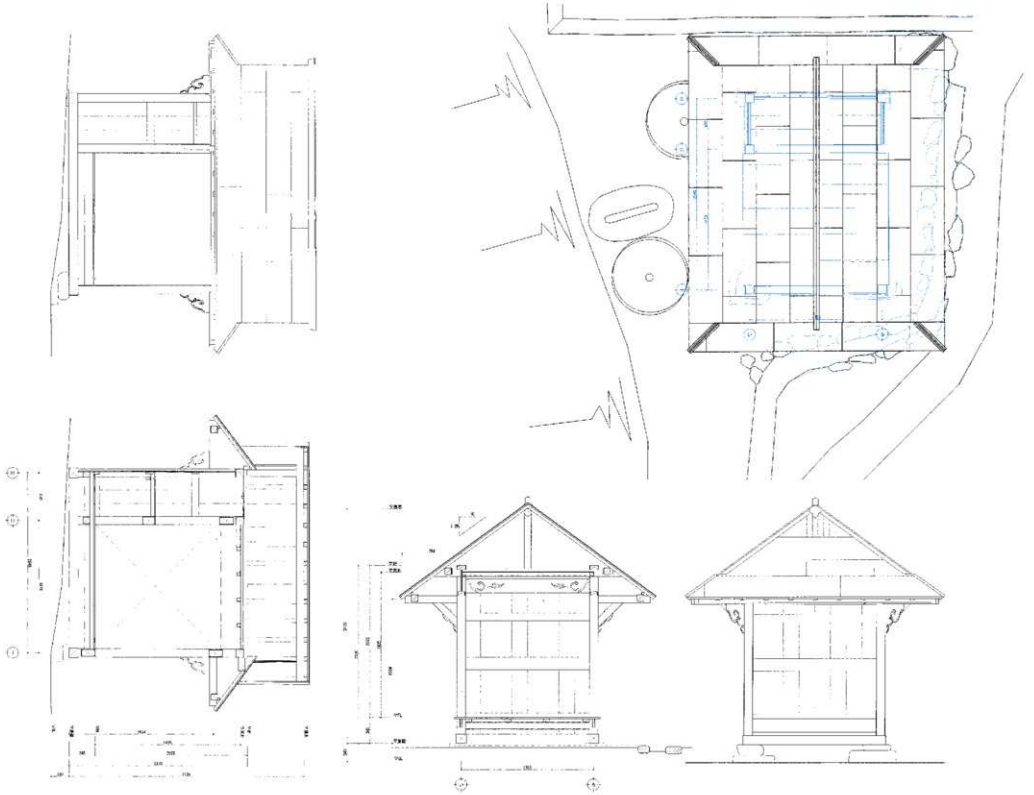
自然石基礎を据えてその上に土台を置き、柱を建てて貫で固め、梁を載せて出桁で繋ぎ、折置組としている。軒は柱から腕木を出して持ち送り、方杖で支えて軒桁を掛けている。足元は敷居框、大引きで固める。小屋組は棟束を建て、棟木を載せて垂木を配って葺き下ろし、野地板・鉄板を張っている。

外壁は真壁竪羽目板張り目板押さえ、破風妻壁は大壁に竪羽目板張りとしている。内壁は外壁裏面の化粧板壁、床は板張り、天井は竿縁天井板張りである。内外陣の境に建具はない。

内陣内部に保存されている改築時の木札に、「明治‥己卯‥七月‥」とあり、明治12年（1879）



第102図　上組観音堂石塔群実測図（1/20



第 103 図　上組観音堂実測図（1/50）

に改築されたことがわかる。廻縁の痕跡から天井竿縁の方向が変わっていることが明らかであるが、天井板には角釘が使用されているため、明治12年に造作の改変が行われたが当初の建立がより遡ることは間違いない。小屋組の桁は梁の痕跡と合致しないことから、明らかに架け替えられたもので、鉄板葺きに替えられている。

観音菩薩坐像等　内陣に置かれた厨子内に2軀の小像などが納められていた。『県報』第134集では「地蔵菩薩立像　木造　像高45.2cm　江戸時代」、「観音菩薩坐像　木造　像高26.7cm　江戸時代」、「位牌　木造　高33.0cm　明和元年（1764）」とある。また、位牌には墨書があって、「（表）南無阿弥陀佛　圓壽坊法道大徳　（裏）明和元甲申(1764)四月二十九日　天台流盲僧霊佛」と読まれている。

「調査カード」には、台座も一体に彫り出された観音菩薩坐像にはさらに別造りの須弥壇があって、その背面に「安政五戊午（1858）　奉寄進　七十才盲僧　安禾院　三学坊」、底面に「大工緒方　保兵衛　□作㊞」とある。また、厨子の両側面にも墨書があり、右側面の二行は判読不能、左側面には「・・宝暦𠆢□二歳　□奉寄進　施主　三学坊」と記録されている。このうち、「暦」・「子」ははっきりしない。ちなみに「宝暦2」の干支は「壬申」である。今一つ「宝」が付く元号は宝永であり、「宝永2」(1705)の干支は「乙酉」である。どちらかといえば「乙」に比べて「壬」がより「子」に近く見えるであろう「宝暦2」は1752年、いずれにしても「三学坊」が同一人物を指すとは考えがたい。

石塔群　観音堂の南側、崖の縁に庚申塔が堂と同様に東を向いて立てられているが、厳密には同じ方向を向いているわけではない。また、堂の背面にあたる西側の狭いところに一石五輪塔・五輪塔各1基が並べ置かれていた。

庚申塔は外縁が丸味をもつ板状の安山岩川原石で、背面は明らかに剥離した面で、大きく半截したようであるが矢穴などは見えない。苔むした台座には石塔が安定するように掘り込みを穿っている。石塔は中央に「奉建石庚申」と大きく、右左に一段低くして「享保七壬寅（1722）」、「十月八日」としっかりと刻み、「壬寅」と頭が揃うような位置に7名の人名を細く刻む。「庚申」・「八日」の間の人名は頭が1角上がり、その左では「八日」と連続するように刻まれている。台石からの高さは90cm余り、幅は75cmほどである。

一石五輪塔は空風輪が扁平で火輪に軒を作り出しているが、それ以下の火輪ー地輪まで角柱状となって、刻みを付して区別するだけである。火輪ー地輪が積み上げられた五輪塔であるが、角石材の大きさのバランスがよくない。適当に組まれたもののようである。

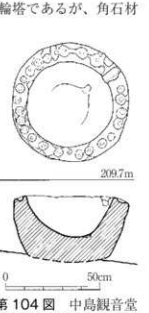
41　中島観音堂（図版32・33、第104～106図）

浦向集落の最南部の小さな谷状地形の中にあり、南北両側に沢が走って観音堂の前面で合流する。最大で南北7m、東西9mほどの平坦地を造成して、そこに1×1間の堂に小規模な内陣を付す形式の小堂である。

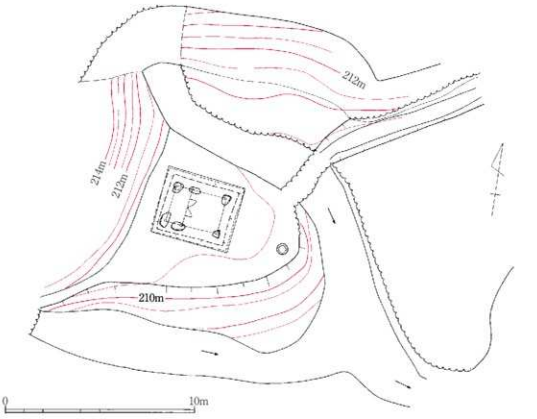
観音堂　構造上は1×2間入母屋造、妻入で東面する小堂。外陣は1間（1.867m）の方形プランとなり、その西に奥行0.77mの内陣を付す。

自然石玉石基礎を置き、柱を建てて桁で繋ぎ、梁を載せて京呂組とする。貫を使用せず、足元は敷居框。、大引きで固める。小屋組は棟束を建てて棟木を載せ、垂木を配り、野地板を張って波鉄板で葺いている。

外壁は真壁竪羽目板張り目板押さえ、破風妻に壁を造らず開放として



第104図　中島観音堂前手水鉢実測図（1/20）



第 105 図　中島観音堂周辺地形測量図（1/200）

いる。内壁は外壁裏面の化粧板壁、床は板張り、天井は竿縁天井板張りとしている。内陣の建具は格子戸の開き戸である。内陣下部に地袋を設けて建具は板戸の引き違い戸としている。

内部に木札があって、

観音堂改築概要

改築年月日　昭和参拾年（1955）七月拾七日

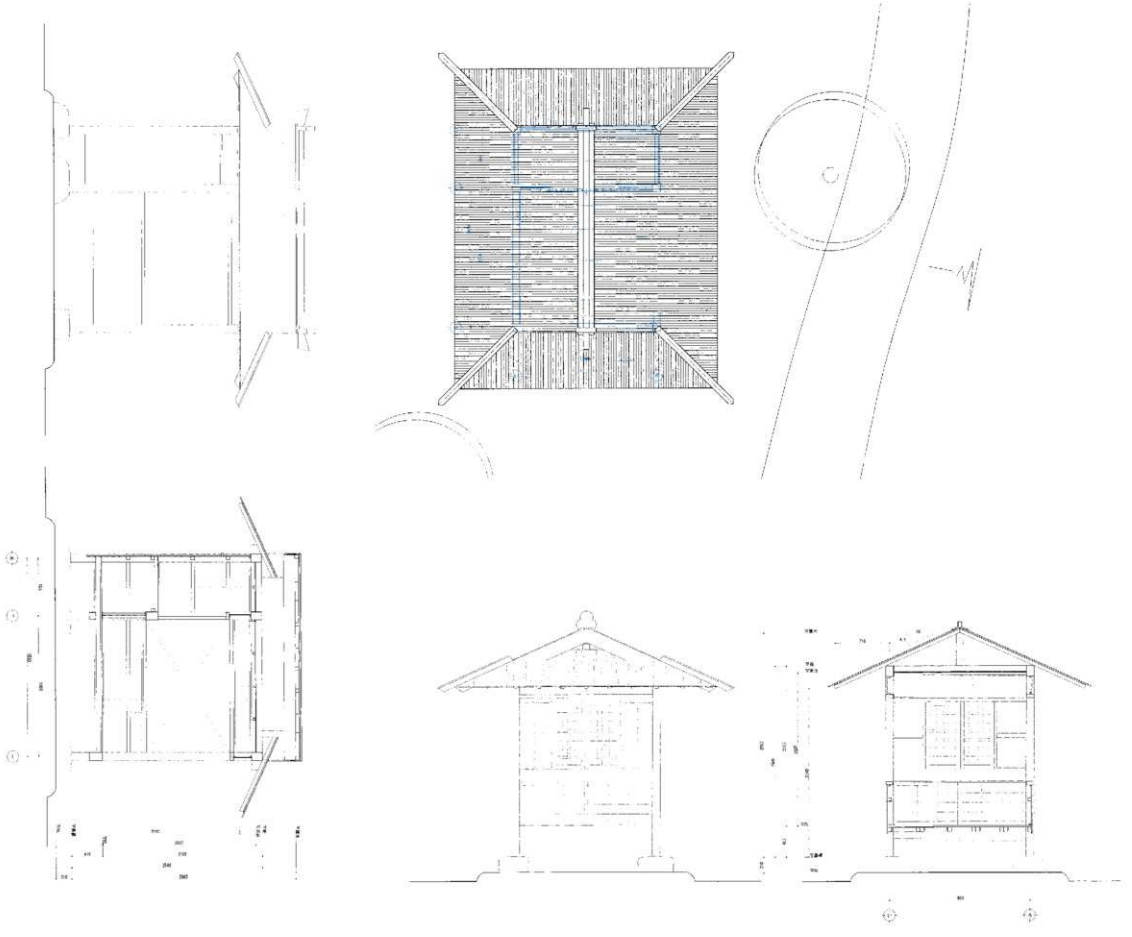
以下「総工費　参萬壹千壹百圓」、そして「大工」、「世話人」、「会計」の人名が墨書されていて、建築年代がわかる。

馬頭観音立像『県報』143 では「浦向観音堂」として紹介されている。像高 38.5㎝の木像で、「近代」の作品と評されている。現在の所在地では同像の脇に高さ 22㎝の小さな木片が置かれていて、あるいはこれが当初に祀られた仏像であったのかも知れない。

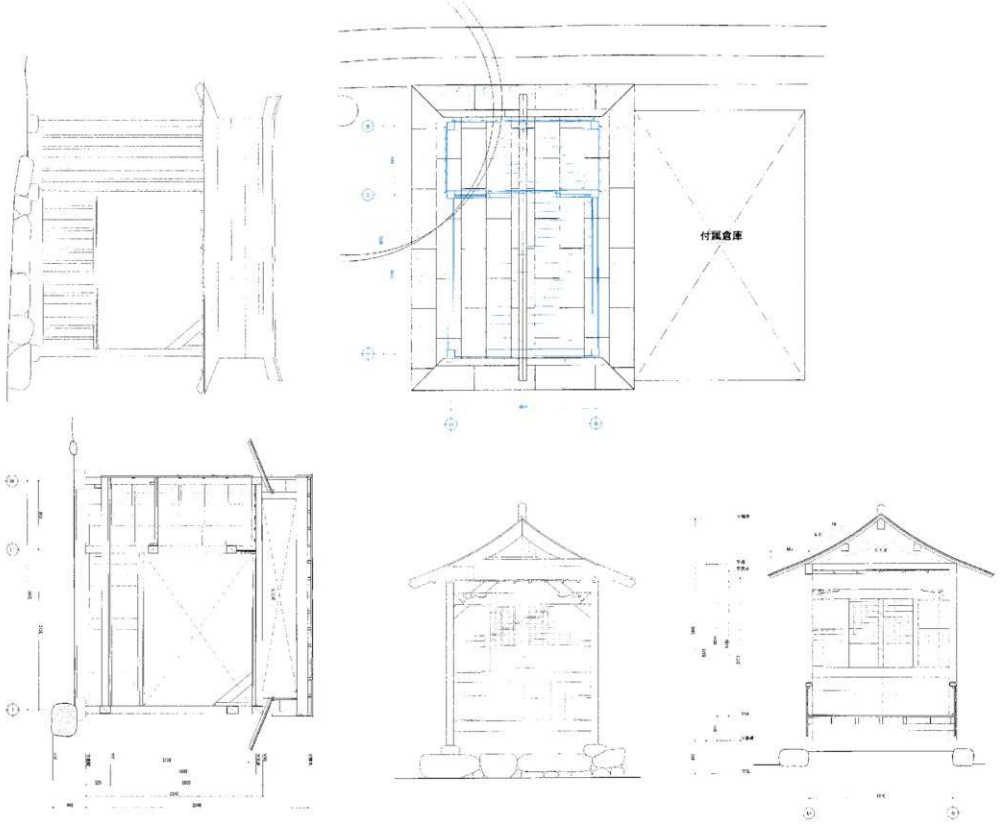
石造物　外径 60㎝余り、内径 45㎝程の平面略正円形の手水鉢で、現状で高さ 0.33 ｍを測る。凝灰岩製。頂部に幅 20㎝弱の略平坦面を作り、そこに直径 5㎝ほど、深さ数㎝ほどの半球形の穴を隙間なく掘り込んでいる。いわゆる杯状穴としてよいのであろうか。その穴とは別に、排水のための溝、そして底部にも排水用の小孔が穿孔されている。内面は比較的滑らかな曲面となるが、外面は粗成形のままで工具痕を示すものかはつった、あるいは敲打したような小さな面が無数に見える。

42　中村地蔵堂・力石（図版 33・34、第 107 ～ 109 図）

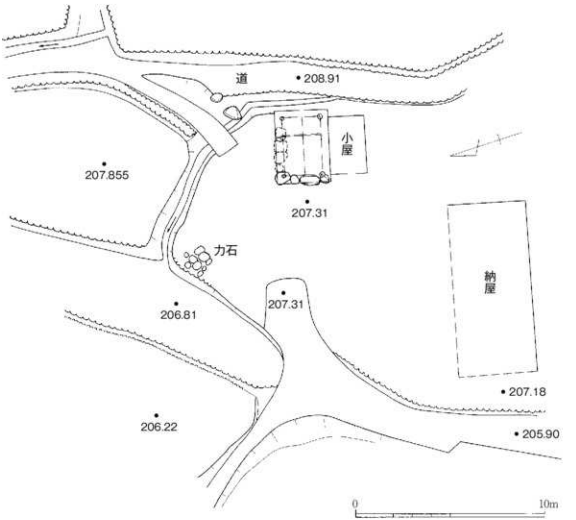
中村地区は上伊良原高木神社の北に隣接する地区で、旧犀川町役場伊良原支所や伊良原保健所が位置するなど、行政的には上伊良原・下伊良原地区の中心的な存在であった。家屋は概ね祓川右岸に展開し、その東側には棚田が広がっていた。今、この棚田があった付近に集団移転地が造成され、



第 106 図　中島観音堂実測図（1/50）



第 107 図　中村地蔵堂実測図（1/50）



第 108 図　中村地蔵堂・力石周辺地形測量図（1/200）

伊良原小学校・中学校を統合した「いらはら学園」が立地している（上伊良原榎町遺跡）。

地蔵堂　堂の北は水路を挟んで同レベルの水田、東側には１m高く里道があって、その東はさらに１m高い水田となる。南・西側は宅地である。この堂も今までに紹介した小堂と同じく、形式上は１×２間であるが、実態として一間堂に半間の内陣を付すものである。

前面は桁行長2.12 m、梁行長1.91 mの規模で、内陣の奥行は0.91 mを測る。堂は入母屋造反り屋根、妻入で西面する。前面となる西辺と北辺は露出するためかやや大型の自然石で基壇を造り、背面となる東辺および小屋が取り付く南辺には基壇が造られていない。基壇のある部分ではその上に小振りの扁平な川原石を礎石として置き、基壇のない部分では地表が基壇の上面レベルと同程度に高くなって、そこにやはり小振りの川原石を置くようである。礎石の上に建てた柱を桁で繋ぎ、梁を載せて京呂組としている。貫は使用せず、足元を敷居框で固めている。

小屋組は見えないが、棟木・母屋を載せて垂木を配って反りを造り、野地板を張って鉄板で葺く。

外壁は真壁竪羽目板張り目板押さえとし、破風妻壁は大壁に竪羽目板張り、内壁は外壁裏面の化粧板壁となる。床は板張り、天井は竿縁天井板張りである。

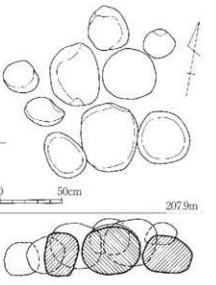
内陣の建具は格子戸の引き分け戸である。

内陣内部の壁に木札が掛けられていて、「地蔵堂改築寄附」、それぞれの寄付額と寄附者氏名、「明治四十二年（1909）八月□□」、そして「発起者」、「世話人」、「大工」のそれぞれ氏名が墨書され

ている。外陣にも木札があって、こちらには「昭和三十九年八月八日　地蔵堂建築寄附」、以下各人の金額と寄附者氏名、そして「材木寄附者」、「世話人」、「大工」の氏名がそれぞれ墨書されている。

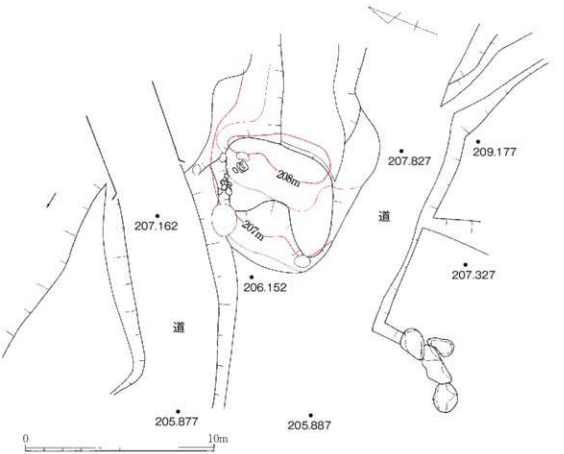
仏像　『県報』143では、「地蔵菩薩半跏像　木造　彩色　彫眼　像高79.5cm　江戸時代」、「如来形坐像　木造　彩色　彫眼　像高32.5cm、江戸時代」とある。

半鐘　総高41.5cm、口径24cmのの梵鐘形の青銅製鐘で、以前あった火の見櫓から移されたと伝わっているという。乳座の間に「津中（現大分県中津）」を横位に配し、その二文字の中央下に「∧（やまがた）」、その直ぐ下に「カ」を入れて屋号を表し、さらに下位に「特製」と置く。これらは陽刻されている。



第109図　力石実測図（1/30）

力石　地蔵堂敷地の北西隅に置かれた9個の球形の花崗岩で、大きさ、重量は以下の通り。1（26×24×13cm、13.5kg）、2（27×22×20cm、19.5kg）、3（34×25×28cm、43kg）、4（42×30×26cm、84.5kg）、5（48×44×31cm、100kg以上）、6（35×30×21cm、32.5kg）、7（43×34×31cm、79.5kg）、8（41×35×28cm、77.5kg）、9（20×20×15cm、12.5kg）。



第110図　間所庚申塔周辺地形測量図（1/200）

古老によると、力比べに使用したという。
この地蔵堂は上伊良原公民館敷地内に新築移転し、力石も同じ敷地内に置かれている。

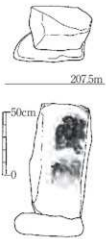
43　間所庚申塔（図版 34、第 110 ～ 111 図）

上伊良原高木神社のすぐ北側では、東から小河川が祓川に合流している。その小河川の直ぐ南には、国道 486 号線から小河川を跨いで北東方向に延びる道路が分岐するが、この間所庚申塔はその分岐する道路の東脇、小河川の直ぐ南に置かれていた。

置かれたところは道路より 1 mほど高い塚状の高まりの上で、彫面は道路に面していた。厚みのある方柱状の凝灰岩を用いていて、全体に整形加工を加えるようであるが特に彫面を丁寧に平滑化する。石塔に比して小振りな安山岩自然石の台石上に置かれ、石塔の高さは 0.92 m、幅は 0.51 mである。

彫面は中央上部に「庚申塔」と大書、右左に頭を下げて「宝暦十一年（1761）」、「〒巳三月廿一日」とやや小さく刻み、下位には三段に渡って 22 名の名前が書かれている。また、上段の人物のみ姓が刻まれている。

現在は上伊良原高木神社の移転地、参道入口脇に巨大な真新しい石灯籠、やはり巨大な「日露戦役記年學林碑」、そして「戦勝記念塔」などと並んで置かれている。



第 111 図　間所庚申塔実測図（1/30）

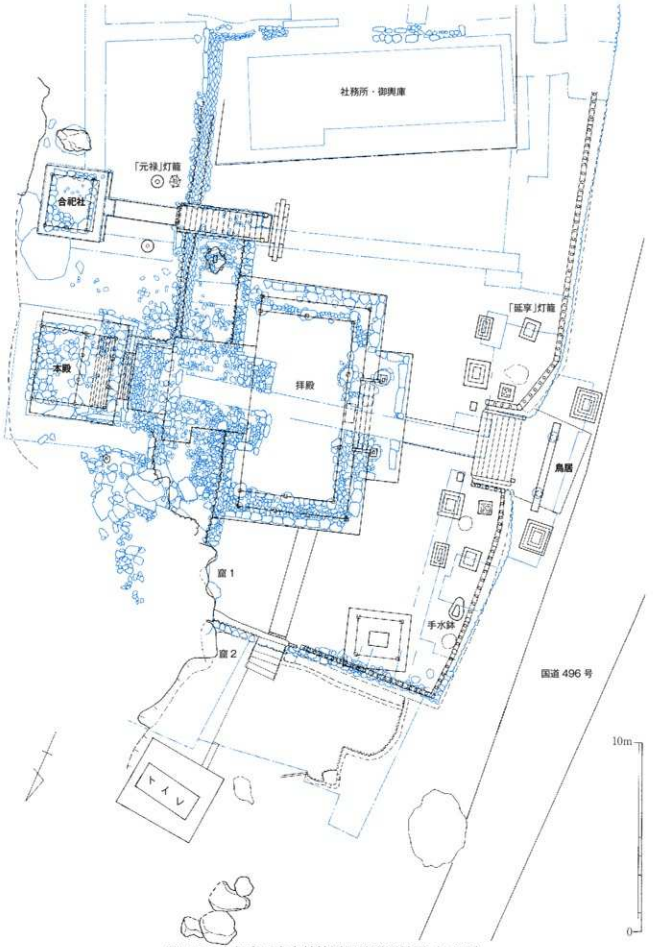
44　上伊良原高木神社（図版 34 ～ 36、第 112 ～ 114 図）

上伊良原高木神社も下伊良原高木神社と同様に彦山神領に置かれた 48 の大行事社の一つで、弘仁 10 年（819）に創建したと伝えられている。この神社には遷座の伝承が無く、発掘調査でも 9 世紀に相応しい須恵器壺が出土していて、伝承された創建時に近い時期にこの地で火を用いた祭祀行為がなされていたことが想定された。今一つ、この神社で特筆すべきはその立地である。北流する祓川に両岸から山塊が迫り出した位置にあり、かつ眼前の祓川には音無淵と呼ばれる深みが形成されている。現代風にいえばパワースポットに占地するのである。発掘調査の詳細は昨年度刊行した「伊良原Ⅴ」（『福岡県文化財調査報告書』第 256 集）に拠られたい。

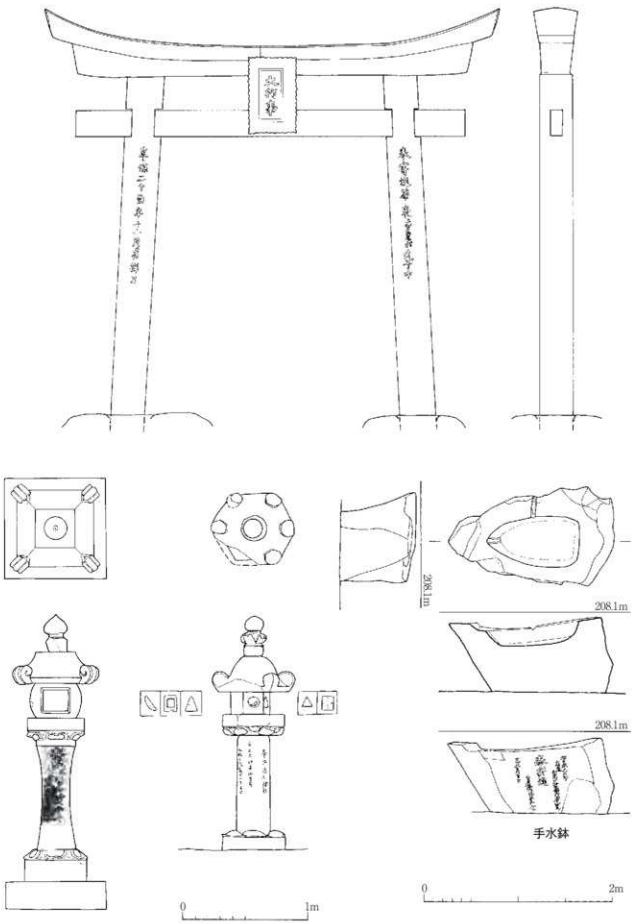
第 112 図に発掘調査時に作成した図面（原図 1/20）と石造物調査時に作成した図面（原図 1/100）を合成した。ここでも当然ながら、小範囲はともかく全体としては整合しないので、1/100 図面を分割して 1/20 図面に載せる改変を行っている。それでもなおずれのある部分は上記の理由で諒としていただきたい。

ここも下伊良原高木神社同様に多くの石造物が存在したが、石造物のうち江戸時代の紀年銘をもつもの、および祭祀の対象となっていた小規模な窟について報告する。

鳥居　拝殿の西側に境内へ登る、あるいは祓川へ下りる石段があり、鳥居はその石段の下、国道 496 号線の路肩に、道路と同じレベルで建てられていた。明治 31 年（1898）刊『大日本名所図録福岡県之部』（大阪大成館）に紹介されたこの神社の境内図では、鳥居からまっすぐに祓川に下りる階段が描かれている。鳥居と階段の間に道が描かれるが、これが現在の国道 496 号線の前身であり、道路が鳥居の直ぐ横に造られたという表現が正しいのであろう。鳥居の形式は所謂明神鳥居で、島木の上に反りの強い笠木を載せ、中央に「大行事」と浮き彫りにした額束を置いている。台



第112　上伊良原高木神社周辺地形測量図（1/200）



第113 上伊良原高木神社石造物実測図（鳥居・手水鉢 1/40、石灯籠 1/30）

石上から笠木頂部までの総高は4.3 m、同貫下部までの高さは2.95 m、笠木幅は4.8 m、柱基部の間隔は2.7 mである。向かって右の柱には手前（祓川側）に向かって「奉寄進華表」、文字を小さくして「上伊良原氏子中」と連続して直線的に刻んでいる。同左側では同じ向きに「享保二（1717）丁酉十一月吉祥月」とある。石材は花崗岩で、額束は凝灰岩である。なお、移転後には社殿に向かって右側かつ社殿側に向けて年号が刻まれた柱が立っている。

拝殿西側石灯籠　上記鳥居を潜って石段を登り、左右の一段高くなる境内には石製の灯籠・狛犬が各2対、石柱1対がそれぞれ対称的に配され、そして北側に手水鉢が置かれていた。このうち、玉垣に近く位置する石灯籠に「延享元年（1744）」の銘がある。平面は方形を基本とし、二重基壇、上下に反花を彫刻する竿、中台、平面円形に造り方形の窓を四方に開けた火袋、四隅を反転させる笠、そして宝珠を載せる定型的な形式で、総高2.34 mを測る。その竿部分に銘文が刻まれている。中央上位に大きく「奉建立」、その下は二行になり、右から「延享元甲子年　氏子中」、「八月吉祥日庄屋進久兵衛房行」とある。図は南側のものであるが、北側も同文である。凝灰岩製。現在は拝殿に一番近く置かれている。

手水鉢　上述の石灯籠などの一群とやや距離を置いて露天に置かれた石製手水鉢。全体に舟形を呈していて、水穴は整った舟形となっている。長さ1.3 m、幅0.8 m、現状で0.7 mの高さを測る。

側面に銘文が刻まれる。中央に大きく「奉寄進」、左右は頭を落とし、文字も小さくして右側には「安永二年(1773)　庄屋　白川又左衛門房寛」、左には「古屋河内貞七　己六月吉日」とある。「安永2年」の干支は「癸巳」、この年の六月の干支が「己未」となるという。「六月」に付された「己」はこの意味であろうか。なお、石材は安山岩。先述したように、下伊良原高木神社手水鉢にも同一人物によるものと思われる手水鉢が同年に奉納されていた。

本殿西側石灯籠　拝殿南の石段を登ると本殿が置かれた高台に通じるが、この石段は合祀社の正面に取り付いている。昨年度の報告では末社として記述したが、現在地では社殿前の「昭和三十五年」銘がある鳥居に「合祀社」の額束があり合祀社が正しいようである。この石段を登って直ぐの南（右側）、石垣の縁に「元禄十二年（1699）」銘の石灯籠が立っていた。対となる壊れた灯籠が本殿北に立っているが、左右一対の石造物であることを考えれば合祀社前の灯籠が本来的な在り方といえる。本殿北の灯籠は何らかの理由で移されたものであろう。

この灯籠は平面が六角形となる。構成は先の「延享元年」銘灯籠と同様に定型的な形式であるが、基壇は一段で反花や笠の反転部など単調で終わっている。ただ、火袋の透かしは6面全てで形状を変え、宝珠も3段としてやや複雑な文様を刻む。地表からの総高1.85 m、笠の直径は0.65 mを測る。

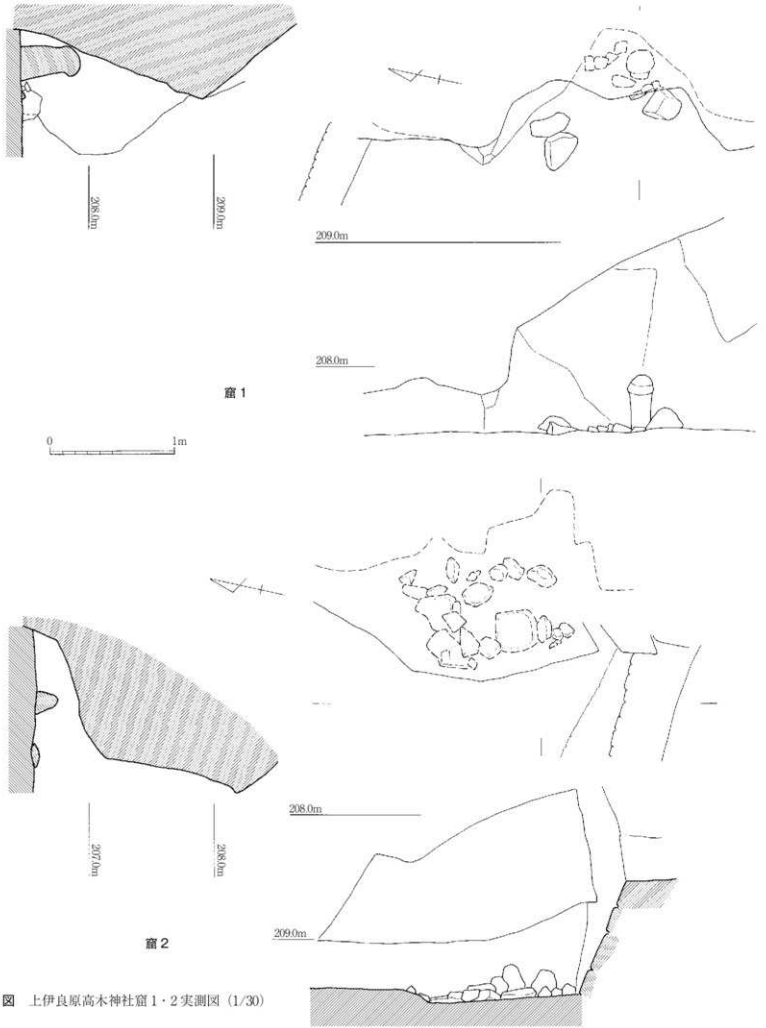
図は合祀社前の石灯籠であるが、竿に次のように刻まれている（□は1角下げを表す）。

「□奉寄進石灯籠　白山大行事御寶前　□元禄十二己卯祀十一月吉日　□□願主□上伊良原村住
□□□進久兵衛房□　□□□緒方太郎兵衛貞利」。

対になる石灯籠の銘文は「願主」の名前が「進五郎右衛門尉房光」となるほかは同文である。

なお、1基が大きく損壊していたためか、この石灯籠は現在地では立てられていない。

窟1　拝殿と本殿の間には現状で3 m近い比高差があり、大部分は間知石を積み上げているが、本殿北側では岩塊が露出していた。この窟1は、拝殿と報告書で石垣5とした現境内地を外周する石垣の間の、岩塊の小さな凹みを利用したものである。内部に凝灰岩を成形した陽石が建てられるが、その周囲の礫は意図的なものか判断できない。発掘時にこの状況を知らなかったことから特段の精査を行ったわけではないが、表土を除去して礫を露出させたものの石囲いなどといった下部構造はなかった。なお、陽石は地上から0.5 mほど露出、最大径は28㎝であった。

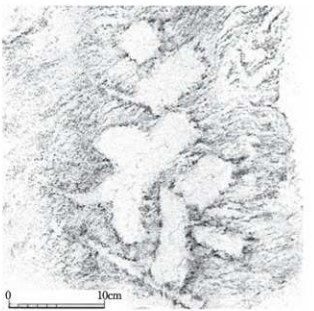


第114図　上伊良原高木神社窟1・2実測図（1/30）

窟２　同じ岩塊の北側、石垣５の直ぐ北にある小さな凹みを利用した窟である。加工したものではないが、川原石４点が陽石のように立てられていた。ここでは北側および西側に区画するように礫が置かれていた。立てられたと思われる川原石の最大のものは20㎝である。この窟はコンクリート基礎の東に位置していて、発掘調査時には何も置かれておらず、祭祀対象となっていたことを認識していなかったこともあって精査を行っていない。

45　音無淵磨崖種子（第115・116図）

上伊良原高木神社の眼前の祓川の水面から頂部が露出する自然石に、縦30㎝、横24㎝ほどの大きさで彫り込んだ種子𑖦（ボロン）で、一字金輪仏頂（大日如来）を表すという。彫面に特別な加工を施したようには見えないが、種子の中心から20㎝ほどの左側に弧状のごく弱い稜線が見える。昨年度の報告に際して、みやこ町歴史民俗博物館木村達美氏に寄稿いただいたが、スペースの関係で一部省略して報告したので、ここでは全文を改めて収録する。



第115図　音無淵磨崖種字拓影(1/4)

伊良原地区は霊峰・英彦山の麓にあって、平安末頃とみられる地方権門としての鎮西修験の道場・彦山の成立以後、天正15年の秀吉による神領召上までその膝下領荘園の一翼を担う存在として物心ともに濃厚な関わり合いを保ってきた。地内にはそのことに由来する有形・無形さまざまな文化遺産が見られるが、有形のもののうちの特徴的存在が以下に紹介する磨崖種子である。以下、その概要について簡単に紹介してみたい。

伊良原地区における磨崖種字造立地と現状の分析

原田昭一氏の調査・研究により、磨崖種子が北部九州域における修験文化の遺産として特異・象徴的な造形物であることが明らかにされたが、伊良原地区には４件の遺構が存在したことが伝承され、うち現物が確認できるものが２件、伝承物件が１件、想定される事案が１件ある。以下にその概要と所在環境等について記す。

（１）現存種字および伝承・想定地の紹介

①弘法堂下磨崖種子（現存／金剛界大日）

弘法堂所在の尾崎山麓の淵・祓川が造り出す中州先端部の位置にある岩に刻まれる。

②大井堰下（想定）

①の100mほど下流、①に記す中洲下端に位置し花崗岩塊が広がるエリアがある。①～③を除いた４件目の種子の存在は伝承も所在場所も不明だが、諸環境から見て有力な所在地と見込まれる。

③日焼井堰下磨崖種子（伝承地／主尊不詳）

①から300mほど下流に位置する日焼井堰下の花崗岩塊の多い場所。堰の改良工事が行われるまで所在したことが伝承される。主尊は不詳。

④音無淵磨崖種子（現存／一字金輪仏）

①の1.5kmほど下流の地区の産土神・高木神社社前に展開する淵に臨む岩に刻まれる。

以上は、川べりの淵や瀬を望む露岩に、薬研彫りで単独の種子が、最大で縦30cmほどの規模で刻まれるという共通した環境と傾向があり、同時あるいは短日時に同一の目的を以て造立されたことを窺わせている。

（2）造立時期等について

現地では、享保飢饉の餓死者供養に英彦山の山伏が刻んだとのとの伝承があるが、現存種子の所在地、弘法堂の伝統行事・弘法相撲の解釈に付会したもののようで、確たる根拠のある伝承ではなさそうである。技法や造形を基にした原田氏の考察では14世紀前半頃の造立と見られているが、現時点では最も妥当性の高い見解である。

磨崖種子造立の背景　ー歴史・文化的環境の検討ー

以上、伊良原地区に所在する磨崖種子について紹介したが、同系統とみられる種字が集中する背景が気になる。現時点で想定される有力な背景と思しき歴史的環境を紹介しておきたい。以下単純に「当地には○○の歴史的背景がある」といった標記で紹介する。

①当地は豊前地方の巨大建造物の材料供給地としての歴史を持つ（近世以降は行橋市浄喜寺・大分県宇佐市四日市別院・みやこ町豊津藩庁の造営材を供給した）。古くは豊前国府に関すること、中世においては宇佐宮一の御殿の柚山「神原柚」の構成地であった可能性が高い。

②当地は英彦山以外にも磨崖仏造立の願主・檀那たりうる地域権力や霊場が至近に在る。

城井（鎮西宇都宮氏／西大寺律宗末「常福寺」）、蔵持山（彦山末山）、国分寺など

上記の環境と想定されている造立時期を踏まえた時、これらの種子は、14世紀半ば前後における宇佐宮の式年造営に際し、用材の確保を請負った律宗教団が、堰流しや砕石等による河川改修によって用材を確保する際、搬出の安全祈願や産土神への寛恕を乞う等の理由での造立されたことを想定することができないだろうかという点である。これは原田氏の教示に基づいた推測にすぎないが、考えられる背景の一つとして紹介しておきたい。

註　原田昭一「九州・山口の磨崖梵字について」（『石造文化研究』第31・32巻、2015）

第116　音無淵磨崖種字

Ⅳ　おわりに

以上が、伊良原ダム建設に関わって調査を行った石造物・小堂である。調査対象地区は旧大字下伊良原では北からいずれも左岸の集落高座・広瀬地区、国道496号線が祓川を渡ってから南側では集落が川の両岸に展開し、右岸では東講・原・浦向、左岸では西の塚、そして西側の谷あいに釜の河内、岩屋河内の８集落（隣組）があり、旧大字上伊良原ではその北端の中村地区であった。表２にあるように、種々の理由から調査を行っていない、あるいは調査できなかった石造物もまだ存する。調査対象地が狭隘な谷地形に位置することから山・川が身近にあるという地形、農業・狩猟といった多用な生業を併行して営むといった様々な環境がもたらしたものであろうが、その信仰の豊かさに驚いている。若干のまとめを行って終わりとする。

１　現代の祭り

ここでは『県報』143で報告された、本書に関連する祭りの要旨を再録する（P○は掲載頁）。

庚申祭り（P9）

戦前まで各集落で講ごとに年６回または３回の庚申祭りが行われていた。現在（民俗文化財調査時）上伊良原区では四季それぞれを通して行われていた集落内の祭りをまとめて、年１回の総合祭りとして各集落で行っている。下伊良原区の集落では小祭のいくつかはまとめているが、年数回の祭りを行う。庚申祭りを講で行っている集落は岩屋河内・原・東講・釜の河内である。岩屋河内の

	遺跡名	調査期間	調査面積	内　容	報告書
	民俗文化財調査	95～98	(㎡)		「伊良原－民俗文化財の調査」
1	上高屋台ノ原遺跡（1～3次）	07.04～09.11	3,700	縄文包含層,古代･中世集落,近世石敷道路跡	『県報』229『伊良原Ⅱ』2011
2	下伊良原中ノ坪遺跡	06.07～06.10	3,300	縄文包含層,中世集落	『県報』222『伊良原Ⅰ』2009
3	下伊良原原田ノ谷遺跡	06.09～07.01	4,500	縄文包含層,中世集落	『県報』222『伊良原Ⅰ』2009
4	下伊良原寺ノ谷遺跡	07.01～07.02	1,500	中近世集落(塩忌寺跡)	『県報』222『伊良原Ⅰ』2009
5	下伊良原フラノ遺跡	11.10～11.12	2,100	縄文包含層,中世集落	『県報』255『伊良原Ⅳ』2017
6	下伊良原広瀬庚申稲荷遺跡	11.1	120	享保15年(1730)	本冊
7	下伊良原東向川原遺跡	11.12～12.05	3,900	縄文･弥生集落･包含層,中世集落,ドングリピット	『県報』255『伊良原Ⅳ』2017
8	下伊良原羽後屋敷遺跡	12.06～12.09	1,350	縄文包含層,中世墓地(？)	『県報』255『伊良原Ⅳ』2017
9	下伊良原中ノ切遺跡	12.09～13.03	4,500	縄文集落,中世集落	『県報』255『伊良原Ⅳ』2017
10	下伊良原竹ノ内遺跡Ⅰ区	13.01～13.09	5,000	縄文包含層,中世集落･墓地	
11	下伊良原竹ノ内遺跡Ⅱ区	12.09～12.12	1,800	縄文包含層,中世集落	
12	下伊良原竹ノ内遺跡Ⅲ区	16.05～17.03	3,000	伊良原小学校柱撤去後	
13	下伊良原竹ノ内遺跡Ⅳ区	12.10～12.11	1,500	縄文包含層,中世集落･墓地	
14	下伊良原西の塚遺跡Ⅰ区	13.01～13.03	800	中近世集落	『県報』257『伊良原Ⅵ』2017
15	下伊良原西の塚遺跡Ⅱ区	13.04～14.03	4,000	縄文集落･ドングリピット,中世集落･墓地	『県報』257『伊良原Ⅵ』2017
16	下伊良原西の塚遺跡Ⅲ区	13.07～13.09	1,700	縄文･中世集落	『県報』257『伊良原Ⅵ』2017
17	下伊良原西の塚遺跡Ⅳ区	13.09～13.11	60	散布地	『県報』257『伊良原Ⅵ』2017
18	下伊良原庄屋屋敷遺跡	13.05～13.08	3,000	江戸後期庄屋屋敷跡	『県報』256『伊良原Ⅴ』2017
19	下伊良原高木神社跡	13.07～14.03	3,000	1222年に遷座した英彦山末社跡。縄文･中世～	『県報』256『伊良原Ⅴ』2017
20	下伊良原平原遺跡	13.08～13.11	1,200	縄文集落とし穴,中世集落	『県報』257『伊良原Ⅵ』2017
21	下伊良原中ノ坪遺跡	06.07～06.10	3,300	縄文包含層,中世集落	『県報』222『伊良原Ⅰ』2009
22	下伊良原中ノ坪遺跡Ⅱ区	13.10～13.12	1,500	中近世集落	『県報』257『伊良原Ⅵ』2017
23	下伊良原下地ヶ原遺跡	14.02～15.2	3,300	中近世集落･墓地	『県報』257『伊良原Ⅵ』2017
24	下伊良原宮園遺跡	16.02～16.07	500	中近世集落(？)	『県報』256『伊良原Ⅴ』2017
25	上伊良原川上遺跡	06.11～06.12	1,100	縄文集落	『県報』222『伊良原Ⅰ』2009
26	上伊良原下ノ段遺跡	07.01～07.02	600	縄文･中世	『県報』222『伊良原Ⅰ』2009
27	上伊良原槻遺跡	07.04～07.10	14,000	縄文集落,中世集落･墓地	『県報』229『伊良原Ⅱ』2011
28	上伊良原塚本遺跡	08.06～08.11	500	縄文･中世	『県報』232『伊良原Ⅲ』2012
29	上伊良原マトコロ遺跡	11.06～11.10	450	縄文集落	『県報』255『伊良原Ⅳ』2017
30	上伊良原高木神社跡	14.04～14.11	3,000	819年創建の英彦山末社跡。	『県報』256『伊良原Ⅴ』2017
31	上伊良原善治遺跡	14.10～14.12	200	水田を覆う洪水跡(昭和50年代)	『県報』256『伊良原Ⅴ』2017
			78,480		

表1　伊良原ダム関係調査地点一覧

地区	組名	本書番号	みやこ町登録番号	対象の呼称(一般的名称)	尊像の造形	堂宇・祠等の造形	信仰内容	信仰集団	由来・伝承等	祭礼・信仰行事 祭名	祭日(過去)	前行事等	仏神事・道具	御供・神饌	直会献立・禁忌	後行事等	備考
下伊良原	高屋			水神様	—	蔵持川流域	利水感謝	組中		水神祭	6月上(土用)		水神様	貴船に白飯		実当にダイダイ(現重相)を渡す	幟は蔵持川に立てる。 4祭を総合
		1	910146	厄神様	自然石	石祠(岩・巨樹)	除災招福	組中	明治17(1884)記年	厄神祭	6月上(7/22)						
		2	910147	庚申様	自然石(刻銘)	斜面	供養・招福	組中	享保10(1725)記年	庚申祭	6月上(二庚申)						
				山の神様	自然石	祠	山業安全	組中	厄神祠に合祀	山の神祭	6月上(11月申)		赤飯・甘酒		赤飯・甘酒		
		3	910148	観音様	石像聖観音像	小堂	供養・招福	組中		観音堂	8/17		盆踊り奉納				
	広瀬	4	910144	(庚申塚)稲荷様	自然石(刻銘)	祠(塚が隣接)	豊穣祈願	組中	享保15(1730)記年	稲荷祭	(5月中)	座元代表					現在は2祭を総合し、「土用祭」と呼ぶ
				水神様	—	広瀬橋下	利水感謝	組中		水神祭	6月上(6~7月)	座元幟立	水神様	貴船にうどん			
				大神宮(お伊勢)様	—	祠	収穫感謝	組中		大神宮祭	11月末~12月初		伊勢遥拝		炊込飯	実当にダイダイ(現重相)を渡す	現在は2祭を総合し、「秋祭」と呼ぶ
		5	910145	山の神様	自然石	祠	山業安全	組中	集落西の山中に鎮座せるを高木神社に合祀	山の神祭	11月末~12月				赤飯		
	星の河内			庚申様			供養・招福	講中	作神として伝えられる	庚申祭	2月申(年6回)	〆縄・御供		おはぎ餅	品は3か5の奇数		座元順示す木札あり
		7		猿田彦大神	自然石(刻銘)	露座	豊穣祈願		大正9(1920)記年								
				水神様	—	釜の河内川流域	利水祈願	組中		水神祭	5/5(5/20)		水神様	貴船に白飯		水神様奉安	
		8	910141	観音様	木像聖観音像	小堂	供養・招福	講・組中	像に天保12(1841)記年あり	観音堂	8/17		盆踊奉納				
				小一郎様	—	—	除災招福	組中	伝承地のみ	女講	(毎月17日)		読経供養				組常会に変更
							収穫感謝			早稲祭	新米収穫後						現在廃絶
			910143	山の神様	—	—(旧社地)	山業守護	神職中	高木神社(鷹座神社)へ合祀、明治34記年祭幟あり	山の神祭	11月申	高木神社参 神職持参			1膳は精進(里芋煮物、とろろ)		残座、かつては3日にわたる祭、旧祭田有
			910142	猪の墓	板碑・宝珠	露座	供養・招福	組中	筑前嘉麻から猪を追い来た長野藤八郎が、これを仕留め、首を葬る(伝承)								
			910139	仏岩	磨像観音菩薩像	小堂(窟)	供養・招福	組中	本尊を盗んだ男が盲目になる話あり								
			910140	伝・瀧泉寺跡?	石塔群	小堂(窟)		個人	観音堂の旧所在地								仏岩の磨寺か
				地蔵様	石造地蔵菩薩像	石祠	家運繁盛	個人									
	東講			水神様	—	祓川流域	利水祈願	組中		水神祭	5/5		水神様	貴船に胡瓜等			
		11	910130	大日様	自然石	石殿	除災招福	講中	激しい神という、石殿は安永7(1778)記年	盆供養	(8/15)		(盆踊奉納)				現在廃絶、5軒が交替で祀る
		13	910128	厄神様	自然石	石祠(側に岩・巨木)	防疫・息災	組中		厄神祭	10月申						
			910123	山の神様	—	—	山業守護	組中		山の神祭	11月申						
		12		厄神様	恵比寿・大黒	石殿	防疫・息災	個人	激しい神という								
			910127	天神様?	自然石	石殿(側に巨岩群)	?	?	由緒不詳								
			910127	地蔵様	石造地蔵菩薩像	露座	?	明秀寺	旧寺地より遷座したと伝える								
	原			庚申様	庚申尊像(掛軸)	—	供養・招福	神職中		庚申祭	1月庚申(年6回)		庚申尊像掛軸		酒・牛肉不使用		11軒の神職(株)座
		17	910121	庚申様(庚申塔)	自然石(刻銘)	露座(溝路沿い)	供養・招福	講中	享保4(1719)、延享2(1745)記年				尊像礼拝				当祭の記念塔か
		18	910121	庚申様(庚申塔)	自然石(刻銘)	露座(溝路沿い)	供養・招福	講中	延享元(1744)記年								当祭の記念塔か
				水神様	—	原川流域	利水祈願	組中	他組に同じ、合祀五神の一とも	水神祭	5/5(4/20)		水神様	貴船に寿司飯	寿司(バラ)		昔は祭田(水神田)有
		15	910125	観音様	木像観音菩薩像	小堂	供養・招福	組中	焼尾峠(町内帆柱地区)より飛来という	盆観音	8/17		盆踊奉納				昔は祭田(観音田)有
		15	910125	地蔵様	木像地蔵菩薩像	小堂(観音と同居)	供養・招福	組中	宝暦年間より祀る、御幅地蔵とも		10月中		通夜				
			910123	山の神様	?	祠(周囲に巨木)	山業守護	組中		山の神祭	11月二申(旧10)						高木神社で神酒開
		19	910122	厄神様	自然石	露座	防疫・息災	神職中		厄神祭	12月(1~2月)				ぜんざい		別名「百合子祭」、緒方家4軒の株座
		19	910122	豊前坊様	自然石	露座	除災招福	組中									
		19	910122	大日様	自然石(刻銘)	露座	除災招福	組中	天明4(1784)記年								
		19	910122	小一郎様	自然石	露座	除災招福										
		19	910122	地神様	自然石	露座	除災招福	組中									
		16	910120	厄神様	—	石祠(小土盛、杉林)			非常に激しい神で枝一つ折っても祟るという。現在は遷座して祠は空								旧高木神社裏鎮所、大日との説も有
	西の塚	26		水神様	—	祓川流域	利水祈願	組中		水神祭	4月中		水神様	貴船に赤飯握飯		神酒開(神社)	
		30		観音様	石造聖観音	小堂	供養・招福	講中		観音堂	8/17		盆踊奉納				
				山の神様	—	—	山業守護	組中		山の神祭	11月申						
		33		庚申様(庚申塔)	自然石(刻銘)	露座	供養・招福	組中	元文4(1739)記年								
		27		猿田彦大神	自然石(刻銘)	露座	息災・招福	高木神社	激しい神という								
		29		猿田彦大神	自然石(刻銘)	露座	息災・招福	個人	由緒不詳								
		31		弓若八幡大菩薩	自然石(刻銘)	石祠	除災招福	個人	旧寺地より遷座したと伝える								
				地神様	自然石	露座	除災招福	個人									
				厄神様	自然石	祠	除災招福	個人									
				大蔵様	五輪塔(残欠)	露座	供養	個人	宇都宮家家臣・大蔵日向守墓所(伝承)								
	岩屋河内			庚申様	庚申尊画像	—	供養・招福	講中		庚申祭	1.5.9月庚申(年6回)		庚申尊像掛軸				10世帯参加・順座
		37	910109	庚申様(庚申塔)	自然石(刻銘)	露座	供養・招福	講中	享保7(1722)記年				尊像礼拝				享保7記年
		39	910112	猿田彦大神	自然石(刻銘)	露座	供養・招福	講中	明治42記年								
			910105	権現様	木像三所権現像	小社(堂・拝殿)	除災招福	組中	弘仁4年に彦山麗雲上人開創、宮柱・緒方家に寛文11記年の由来略記あり、彦山・蔵持山伏が司祭す。	権現祭	3/15(旧3/3→1/15~2/15の巳日)	焚物とり 神使派遣 ほかい座	百手神事(弓射)及びその道具(弓・的・矢)		年賀膳(黒豆7粒、目刺)と本膳・三献酒	わらじ酒と竹松明・板敷払い・的矢奉納	明治27年の祭帳あり。近年対座に変更、座元主人を太夫という
				水神様	—	岩屋河内川流域	利水祈願	組中	農作業前の水を浄める	水神祭	5/5	当屋が屋宮へ神酒上げ	水神様	貴船に塩・米・酒		相撲奉納(勧請会と呼ぶ)	下・上中組で交互実施
		40	910108	観音様	木像観音菩薩像	小堂(周囲に石造物)	供養・招福	上・中組中		観音堂	8/17	清掃等	盆踊奉納				
		39	910111	観音様	木像薬師如来像	小堂(周囲に石造物)	供養・招福	下組中									
				山の神様	—	—	山業守護	組中		山の神祭	10月中						近年祭を一般開放
		38	910114	厄神様	自然石	小社(巨樹の側)	防疫・息災	中組中									
				観音様(観音堂)	石像観音菩薩像	祠	家運繁盛	個人									
	満向	21	910117	水神様	自然石	露座	利水祈願	組中	農作業前の水のお浄め	水神祭	5/5		貴船(幟はない)	貴船に白飯			上・下組で交互に実施
		41	910116	お観音様	木像観音菩薩像	小堂(沢・滝の側)	供養・招福	組中	中島観音とも称す	観音堂	8/17		盆踊奉納				
				山の神様	—	—(山中)	山業守護	組中		山の神祭	11/3						
				庚申様	庚申尊図像	状箱	供養・招福	講中		庚申祭	(庚申年6回)		庚申尊像掛軸				現在中断
			910119	庚申様(庚申塔)	自然石(刻銘)	露座(村境)	供養・招福	講中					尊像礼拝				当祭に伴うかは不明
		20	910118	猿田彦大神	自然石(刻銘)	露座(村境)	供養・招福	講中	明治33記年								当祭に伴うかは不明
上伊良原	中村		910073	うば岩様	窟	洞石	除災招福		山伏の行場であったと伝える	うば岩様祭	4/17(3/17)				うど粉・三献酒	注連・御幣奉安	姥ヶ岩屋と表記す
				水神様	?	?	利水祈願			(水神祭)						川に水神幟立て	うば岩様祭と共催
				厄神様	?	?	攘厄祈願			(厄神祭)							うば岩様祭と共催
			910073	祇園様	窟		防疫・息災		祭疫流行時、うば岩へ祇園勧請(伝)	村祇園	7/10				梅、ラッキョ、真竹の紫蘇漬		高木神社で実施、昔は夜、集落でお通夜
				ヤトモテ様	?	?	防疫・息災		高木神社へ合祀								
		42	910074	地蔵様(地蔵堂)	木像地蔵菩薩像	小堂	供養・招福			盆供養	8/15		盆踊・盆綱				組守護仏、盆綱廃絶 力石が置かれる
				観音様	木像観音菩薩像												
				親鸞上人	—	—		講中		報講	11月中						
			910077	庚申様	自然石(刻銘)	露座	息災・招福	講中	宝暦年中(1751~64)記年								
		25	910087	猿田彦大神	自然石(刻銘)	露座	息災・招福	講中	明治29記年								
			910076	小一郎様	石造宝珠	祠(周囲に巨木)	家運繁盛	個人									
				稲荷様	?	?	家運繁盛	個人									
			910086	仏岩・千石岩	—	窟・巨岩群	行場	?	彦山山伏の行場と伝える								
			910085	鳴滝不動様	石造不動明王像	小堂(滝・岩場)	行場	個人	彦山山伏の修場								悲死山伏供養伝説有り
		45	910081	(蘭陵種字)	自然石(刻銘)	露座(流水面中)	息災	?	凱陣祝に彦山山伏が刻んだ(伝承)								社殿の鍵封じともいう

表2　上伊良原・下伊良原地区の信仰対象およびその行事（抜粋）

庚申講には3冊の祭帳があり、それによって平成10年1月25日の庚申祭りの様子を紹介する。

祭元順番　1～10番まで記録（当日出席者8名、昭和15年の祭帳には14番までである）。
庚申月　庚申月は年6回あるが、祭りを行う月は1・5・9月とする。
御神酒　一升。御神酒代は時価として祭日に徴収。
　改正　白米弐合持ち寄りは廃止する。
膳部　夕食は一種類。取（酒か？：筆者註）肴は三種類。
為念　御神酒代は当日参詣の有無に拘わらず祭元に対し持参すべきこと。
　以上、相定め確く守るものとする。
6：30　講員が参会、庚申の絵像に参拝して座に付く。
7：00　祭元の挨拶の後、直会が始まる。庚申は作神として祭っているという。
　膳部は御飯一種類、取肴三種類と定めているが、他は祭元の志である。献立は、刺身・煮付・和物・酢物・煮豆・煮込・赤飯。
8：30　当場渡し　当座より五月座へ。食事を戴きながら五月座の予定について話す。
9：00　庚申絵像に礼拝。一同祭元に挨拶の上辞去。

水神祭り（P16）

上伊良原区では水神祭りを総合祭りに合わせて行っているが、下伊良原区では集落ごとに行う。以前は旧正月の2月または3月に種池を浚えて水神祭りをし、田植の後、苗作・水神祭りをしていた。伊良原は谷川を水源とする田が多く、岩屋河内・原・釜の河内では棚田の水路ごとに寄り合って水神祭りをする。浦向・西の塚・東講・広瀬は蔵川で、高座は蔵持川でする。

浦向・原・西の塚・東講では今年の豊かな水の恵みを祈願して田植前に水神祭りを、岩屋河内・広瀬・高座では田植の終了を感謝し、さらに豊かな水の恵みを祈願して苗作・水神祭りを行う。

祭りに際しては、谷の水口または蔵川に御幣と台を立てる。台は篠竹三本を括って立て、ワラを舟形に編んだもの（船、スボという）、または竹のスノコを中に吊り下げたものをいう。台には水神への供物を入れる。別に供物を供え、祈願参拝の後供物を持ち帰って直会に供する集落もある。

岩屋河内では塩・白米・神酒を、浦向では舟に供物として白ご飯を入れ、塩・神酒を供える。西の塚では竹のスノコに赤飯のおにぎりを4個入れ、供物として塩・白米（7合五勺）・神酒・鯛・海草・野菜・菓子を供え、直会で御神酒下しをする。東講はスボに赤飯のおにぎり3個・塩・キュウリを入れ、祈願の後高木神社で御神酒下しをする。釜の河内ではスボに御供（白御飯）を入れ、塩と神酒を、広瀬では舟にゆでたウドンを一握り入れ、祭座に神酒・白米・魚・野菜を供える。高座では舟に御供飯を入れて塩と散米を供え、祈願の後にそれを谷川にまく。いずれの集落とも谷川や蔵川で祈願参拝の後祭座で直会の宴を開く。

観音盆・地蔵盆（P19）

伊良原ではどの集落でも観音堂・地蔵堂・薬師堂を祀り、大事に奉仕している。上伊良原の集落では8月15日の夜、観音盆・地蔵盆の盆踊りをする。

下伊良原の集落では8月17日の夜盆踊りをする。観音様の盆踊りを観音のお通夜ともいう。釜の河内では次のように運ぶ。

8：00　17日の夜夕食後、座元に集まる。
8：30　仏前で勤行集から正信偈を読誦して直会になる。

9：00　庭で盆踊り

9：40　納会

各集落に祀る小堂を浄め、観音・地蔵の前に供物を供えて参拝する。堂または座元で読経し、盆踊りをして供養する。その後、座元で直会の宴を開く。

伊良原では古くから「観音講または御講・お座敷」といって、毎月17日の夜女講を行っていた。今は上下伊良原区とも、24日の夜班会を兼ねて行っている。

山の神祭り（P23）

下伊良原区では各集落で11月に、上伊良原区では区の祭りとして行う。

祭日　　12月20日

献備品　白米1升・神酒・魚・昆布・塩・水・寒天赤2本白2本

山の神祭りの献供の品は別にない。戸主達は午前中に高木神社の正月迎えの準備をする。注連縄作り、門松の松・竹・梅の切り出し、竹材の用意などである。

台所では主婦が献立の料理を作る。昔通りの手作りである。料理作りは家庭の食文化の交流の場である。

献立　吸物・刺身・酢物・煮込・煮付・盛飯・味噌汁・香ツ・酒・定器三杯

祭儀　12：00　祭典　神官・神社総代・組代表12名

12：40　直会　区長挨拶

近年は山に結びついた仕事をする人は少なくなったが、古里の山と仲良く調和して生活することが大切である。この村の無事を祈り、神に感謝しよう。

14：30　御当場渡し・納会

参会者は祭事の最初から直会の最後まで中座は認められないことになっている。

2　小　堂

調査を行った9つの集落には次のような小堂があった。

高座　観音堂1×2軒切妻造妻入（昭和33年瓦葺替）　石造菩薩形坐像（近代）

広瀬　なし

釜の河内　観音堂1×2間入母屋造妻入（昭和35年改築）　木造観音菩薩坐像（天保12銘：1841）

東講　なし（但し、浄土真宗大谷派祥雲山明秀寺が所在）

原　地蔵堂1×2間入母屋造妻入（宝暦11発起銘：1761）　木造地蔵菩薩立像・観音菩薩立像（江戸）

西の塚　観音堂1×2間寄棟造妻入　石造聖観音坐像（近代）

岩屋河内　下組薬師堂1×2間切妻妻入　木造薬師如来坐像（室町）
上組観音堂1×2間入母屋造妻入（明治12改築：1879）　木造地蔵菩薩立像（江戸）
木像観音菩薩坐像（木製須弥壇に安政5銘：1858）　木製位牌（明和元銘：1764）　厨子（宝暦2？銘：1752）

浦向　中島観音堂1×2間入母屋造妻入（昭和30年年改築）　馬頭観音立像（近代）

中村　地蔵堂1×2間入母屋造妻入（明治42年改築）　木造地蔵菩薩半跏像（江戸）　木造如来形坐像（江戸）

小堂はいずれも１間堂に小規模な内陣を付す形態の簡素な作りである。いずれも明治・昭和の建築・改築と見られるが、祭る仏像は下組薬師堂のように室町期に遡る例があり、中島観音堂に置かれた木片が古仏であればより古いものである可能性を有する。

明秀寺は宗派に属する本格的な寺院であり、最小単位の集落（隣組）が管理する小堂と同一視できないのであろうが、広瀬集落を除けばいずれの集落も仏堂が存在する。ちなみに、『県報』143の「上伊良原地区の信仰対象（祠・堂・聖地・聖物等）およびその行事」によれば、ここでも柿尾（弘法堂）・藤神（地蔵堂）・鳥越（観音堂）・川久保（観音堂）・古屋河内（観音堂）・中村（地蔵堂）と全ての単位集落に小堂が祀られている。ちなみに、これも『犀川町誌』によれば「小堂と無住寺」という項目で多くの小堂などが列挙されるが、旧大字単位では１～３例が大部分である。両伊良原地区のようにそれぞれの大字の中の単位集落との対応を検討していないので直接の比較は困難であるが、伊良原両地区の仏堂の在り方は注目すべきであると思われる。

旧大字上伊良原・下伊良原は江戸初期から記録に残る村名であるという。「上・下」を冠することから、「伊良原村」が分村したと考えがちであるが、それぞれに古く彦山神領に置かれた大行事社（現高木神社）が存在することからも、早くから両地区は独立的であったことも考えられよう。神社は村をあげて、小堂は隣組で尊崇していたといえようか。

3　石造物

石造物には庚申塔・猿田彦大神・石製小祠・板碑・碑伝・各種の五輪塔その他特殊な造形のものがある。板碑や碑伝、五輪塔などは概ね戦国時代から江戸初期に属するものであろうとの教示を得ている。

年号が刻まれた石造物を以下に列挙する。

庚申塔　丸山庚申塔（享保４：1719、延享２：1745）　岩屋河内庚申塚（享保７：1722）　上組観音堂庚申塔（享保７：1722）　広瀬庚申塚稲荷社（享保15：1730）　城山庚申塔（元文４：1739）　越当庚申塔（延享元：1744）　間所庚申塔（宝暦11：1761）

猿（猿）田彦大神　鳴滝猿田彦大神（明治29：1896）　原猿田彦太神（明治33：1900）下組薬師堂猿田彦大神（明治42：1909）釜の河内猿田彦大神（大正９：1920）

石　祠　竹ノ畑大日堂・灯籠（安永７：1778）　榎谷厄神社（明治17：1884）

鳥　居　上伊良原高木神社（享保２：1717）下伊良原高木神社（宝暦10：1760）

手水鉢　下伊良原高木神社（安永２：1773）　上伊良原高木神社（安永２：1773）

その他　上伊良原高木神社石灯籠（元禄12：1699，延享元：1744）屋敷上大日堂（天明４：1784）奉安殿跡忠魂碑（昭和11：1936）

参考として、石塔と年代的に交わる時代の当地の主要な出来事を『犀川町誌』から引用する。

享保17（1732）	享保の大飢饉上伊良原（173人）・下伊良原（76人）の餓死者
天明３～８（1783～88）	天明の飢饉
天保４～７（1833～36）	天保の飢饉
文政11（1828）	７月２日大洪水、８月10日大風、８月24日大風
嘉永３（1850）	７月11日、８月７日の台風
安政５・６（1858・59）	コレラ流行

こうして両者を比較してみると、忠魂碑は別としてこれらの石造物の造立に天変地異や疾病の流行といった社会現象との因果関係は認められないといってよかろう。

『犀川町誌』に記載された紀年銘のある庚申塔を以下に掲げる。

崎山（享保11：1726） 上高屋（明和2：1765） 上伊良原（「幸神塔」天明3：1783、延享元：1774） 帆柱（「幸神塙」天明元：1781、元文5：1740）

旧町内全てを網羅した資料ではないにしても、記年のない例も含めて旧大字単位でも存在しない地区が多く、存在するとしても1～2基が通常であるが、上伊良原地区に4基、下伊良原地区には5基と特段に多いことがわかる。ちなみに最南部の帆柱地区には2基が知られている。したがって、庚申塔の造立は1700年代に旧犀川町域で盛行し、伊良原地区で特にその前半に盛んに行われたといえるが、その契機は今のところはわからない。

猿田彦についても同様に『犀川町誌』を引く。

崎山（明治4：1871、明治43：1910） 柳瀬（明和8：1771） 大村（文政2：1819 明治40：1907、昭和9：1934） 続命院（安政5：1858） 久富（大正2：1913） 上高屋（明治38：1905） 喜多良（文政5：1822） 犬丸（天保11：1840、大正13：1924、昭和60：1985） 上木井（享保15：1730） 横瀬（嘉永3：1850、「申田彦大神」大正4：1915） 帆柱（安永7：1778、文化元：1804）

下伊良原・上伊良原地区はいずれも明治以降の造塔であるが、旧町内で最古の例は享保15年銘の上木井の「謹上猿田彦大神」石塔で、江戸期9例、明治以降は7例であるが、伊良原地区を加えれば11例となって、猿田彦に対する信仰は明治以降盛んになったということもできる。明治以降、道路整備に伴って記念碑的に造塔されたものであろうか。『犀川町誌』には犬丸地区では「60年ごとに猿田彦を建立する習わしになっているとか」という記述があり、それが昭和60年の造塔に繋がっているようで、興味深いものがある。

岩屋河内下組薬師堂の「大乗妙典一石一字塔」に関連して、やはり『犀川町誌』には記年あるものとして「法華一字一石塔」（山鹿、昭和5：1930）、「法巻書写塔」（山鹿、天明8：1788）があり、記年のないものとして「三部妙典一字一石塔」（大村）、「大乗妙典日本廻国塔」（木井）、「大乗妙典一石一字塔」（帆柱）が紹介されている。

庚申塔や猿田彦石塔、一石一字塔などの造立時期やその契機については、広く旧仲津郡あるいは旧小倉藩領内での動向を探る必要があるのであろう。

末尾となったが、碑伝・五輪塔などについて大分県教育委員会原田昭一氏から現地でのご教示を得ることができたが、個別石塔について十分な咀嚼ができず、総じて戦国時代から江戸初期に属するものという程度の記述のみで終わった。氏に謝意を表するとともに、十分な記述ができなかったことについてはすべて編者の責であることを記して終わりとする。

註 犀川町誌編集委員会『犀川町誌』1994

図　　版

1　榎谷厄神社旧社地（南西から）

2　榎谷厄神社（現在）

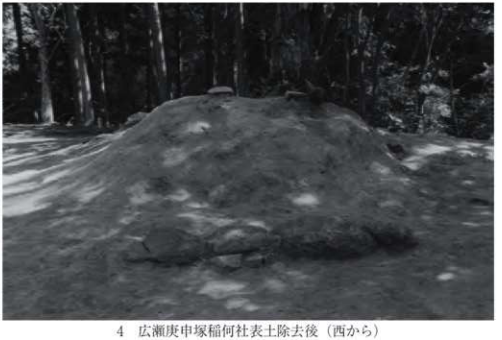
3　高座庚申塔（現在）

4　高座観音堂全景（北東から）

1　高座観音堂近景（北東から）

2　高座観音堂内陣（東から）

3　広瀬庚申塚稲荷社調査前（南西から）



4　広瀬庚申塚稲荷社表土除去後（西から）

1　広瀬庚申塚稲荷社礎石（南西から）

2　広瀬庚申塚稲荷社石塔（現在）

3　広瀬山の神神社（現在）

4　山の神石塔群A群全景（北東から）

1　山の神石塔群A群南半（南東から）

2　山の神石塔群A群北西部（東から）

3　山の神石塔群B群全景（南東から）

4　山の神石塔群一石五輪塔（西から）

1　釜の河内猿田彦大神（現在）

2　釜の河内観音堂遠景（南から）

3　釜の河内観音堂近景（北西から）

4　釜の河内観音堂（東から）

1　釜の河内観音堂内陣（東から）

2　釜の河内観音堂の木札

3　竹ノ畑石塔群A群（北西から）

4　竹ノ畑石塔群A群一部除去後（北東から）

1　竹ノ畑小市郎様（南西から）

2　竹ノ畑大日堂遠景（南東から）

3　竹ノ畑大日堂（東から）

4　竹ノ畑大日堂（現在）

1　東講の石祠（西から）

2　東講の石祠（現在）

3　赤岩山神社（南西から）

4　赤岩山神社石祠（現在）

1　上ノ谷石塔群全景（南東から）

2　上ノ谷石塔群全景（西から）

3　上ノ谷石塔群参道（南西から）

4　上ノ谷石塔群参道付近（北西から）

1　上ノ谷石塔群A群（南西から）

2　上ノ谷石塔群A群（南東から）

3　上ノ谷石塔群A群（南西から）

4　上ノ谷石塔群B群南西の基礎石（北西から）

1　上ノ谷石塔群C群（南東から）

2　上ノ谷石塔群C群（東から）

3　上ノ谷石塔群C群南端部（北西から）

4　原地蔵堂近景（西から）

1　原地蔵堂内部上半（北西から）

2　原地蔵堂内陣（北西から）

3　丸山厄神社遠景（北から）

4　丸山厄神社近景（南東から）

1 「丸山御旅所表道」石柱（現在）

2 丸山庚申塔遠景（南東から）

3 丸山庚申塔近景（南東から）

4 丸山庚申塔（現在）

1　越当庚申塔近景（南西から）

2　越当庚申塔（現在）

3　屋敷上大日堂検出状況（西から）

4　屋敷上大日堂復元状況（西から）

1　屋敷上大日堂（現在）

2　原猿田彦太神（北西から）

3　原猿田彦太神（現在）

4　原水神様

1　奉安殿跡忠魂碑（北西から）

2　奉安殿跡忠魂碑（現在）

3　長畑石塔群A群（西から）

4　長畑石塔群A群南西端付近（北東から）

1　長畑石塔群B群（南西から）

2　羽後屋敷石塔群A群現況（西から）

3　羽後屋敷石塔群A群（南西から）

4　羽後屋敷石塔群A群（北東から）

1　羽後屋敷石塔群A群下層（南西から）

2　羽後屋敷石塔群A－1トレンチ（南東から）

3　羽後屋敷石塔群B群現況（北から）

4　羽後屋敷石塔群B群（西から）

1　羽後屋敷石塔群B群（南東から）

2　羽後屋敷石塔群C－1群（南東から）

3　羽後屋敷石塔群C－1群（北東から）

4　羽後屋敷石塔群C－1群（北東から）

1　羽後屋敷石塔群C－2群（北東から）

2　羽後屋敷石塔群C－2群（東から）

3　羽後屋敷石塔群C－3群（南西から）

4　羽後屋敷石塔群C－4群（南から）

1　羽後屋敷石塔群C－4群（南西から）

2　羽後屋敷石塔群C－5群（北から）

3　鳴滝猿田彦大神遠景（北西から）

4　鳴滝猿田彦大神（南西から）

1　下伊良原高木神社遠景（東から）

2　下伊良原高木神社鳥居（現在）

3　下伊良原高木神社猿田彦大神（南西から）

4　下伊良原高木神社手水鉢（西から）

1　下地ヶ原石塔群南半（東から）

2　下地ヶ原石塔群北半（南東から）

3　下地ヶ原石塔群下層（北東から）

4　下地ヶ原石塔群下層（北東から）

1　西の塚猿田彦大神（南東から）

2　西の塚猿田彦大神（現在）

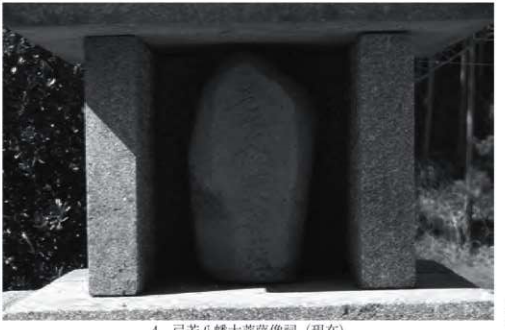
3　西の塚観音堂（南から）

4　西の塚観音堂内観（南東から）

1　西の塚観音堂内陣（南東から）

2　弓若八幡大菩薩像祠（西から）

3　弓若八幡大菩薩像祠（現在）



4　弓若八幡大菩薩像祠（現在）

1　城山庚申塔（現在）

2　地蔵堂石塔群 1 ～ 3（南東から）

3　地蔵堂石塔群 4（北東から）

4　地蔵堂石塔群 5（南西から）

1　瑞応寺石塔群（南西から）

2　瑞応寺石塔群（北東から）

3　瑞応寺石塔群碑文

4　瑞応寺石塔群碑文

1　岩屋河内庚申塔（現在）

2　下組薬師堂・石塔群全景（南東から）

3　下組薬師堂正面（東から）

4　下組薬師堂内陣（東から）

1　下組薬師堂東石塔群全景（西から）

2　下組薬師堂東石塔群全景（南西から）

3　下組薬師堂猿田彦大神（南西から）

4　下組薬師堂一石一字塔（南西から）

1　下組薬師堂一石一字塔（現在）

2　下組薬師堂西石塔群（東から）

3　上組観音堂全景（東から）

4　上組観音堂全景（北西から）

1　上組観音堂内観（東から）

2　上組観音堂内陣（東から）

3　上組観音堂庚申塔（北東から）

4　上組観音堂西側石塔群（北東から）

1　中島観音堂遠景（北東から）

2　中島観音堂近景（南東から）

3　中島観音堂近景（北西から）

4　中島観音堂内陣（東から）

1　中島観音堂手水鉢（北東から）

2　中島観音堂手水鉢（現在）

3　中村地蔵堂全景（北西から）

4　中村地蔵堂内部（南西から）

1　中村地蔵堂内陣（西から）

2　中村地蔵堂力石（南から）

3　間所庚申塔（北西から）・現在

4　上伊良原高木神社（西から）

1　上伊良原高木神社鳥居額束（西から）

2　同「享保」銘鳥居・「延享」銘石灯籠（西から）

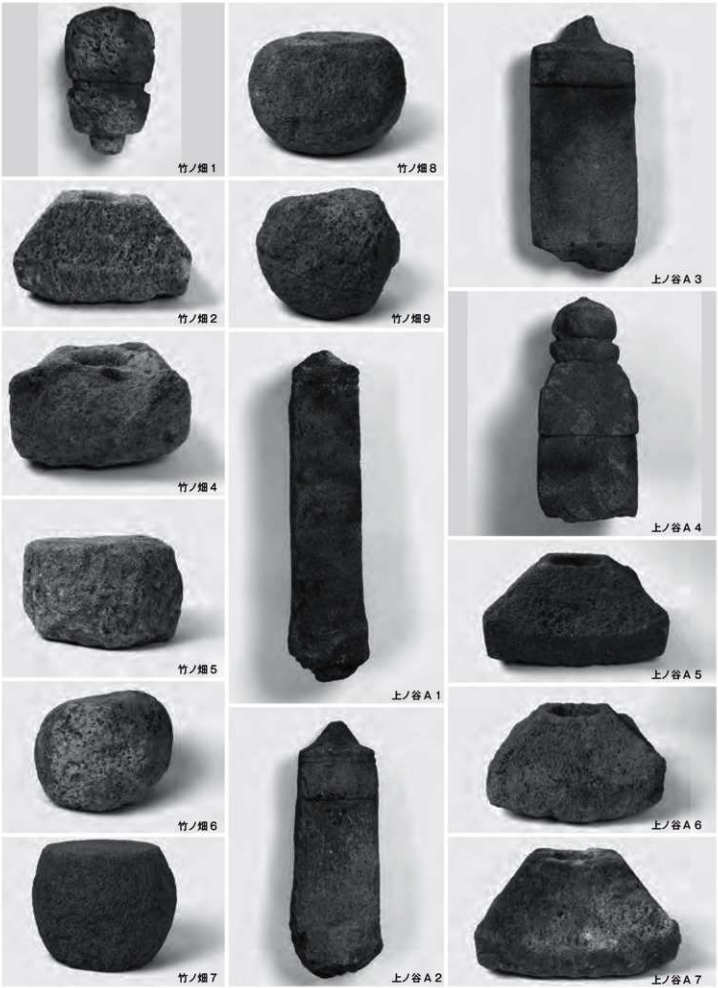
3　同合祀社石灯籠（左：元禄・右：昭和、南東から）

1 「延享」銘石灯籠（現在）

2 手水鉢（東から）

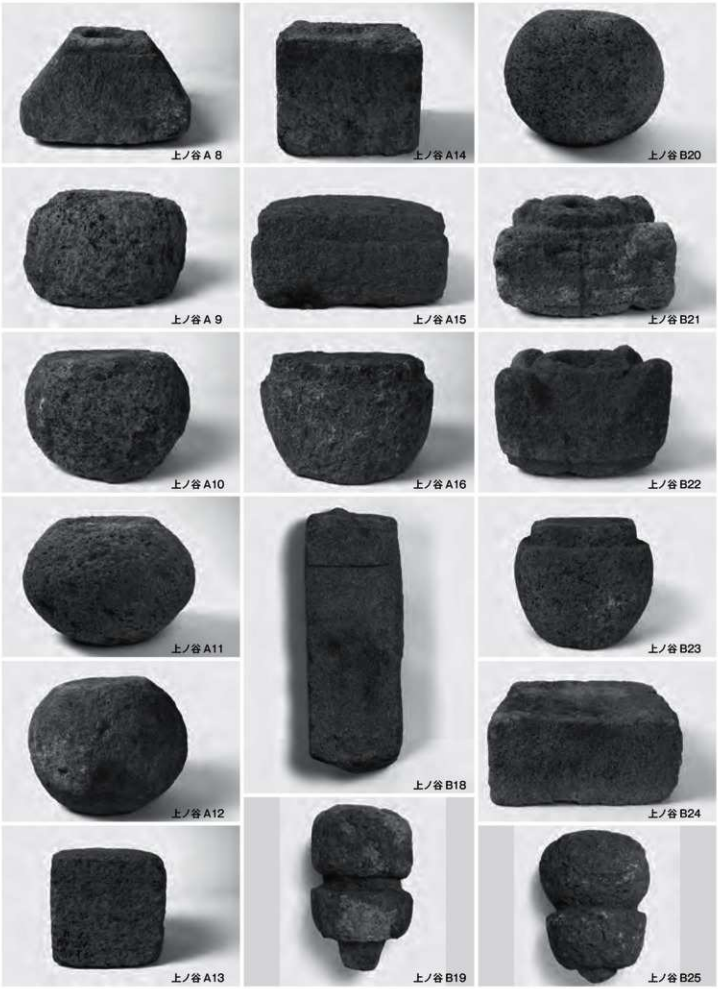
3 窟 1（西から）

4 窟 2（南西から）

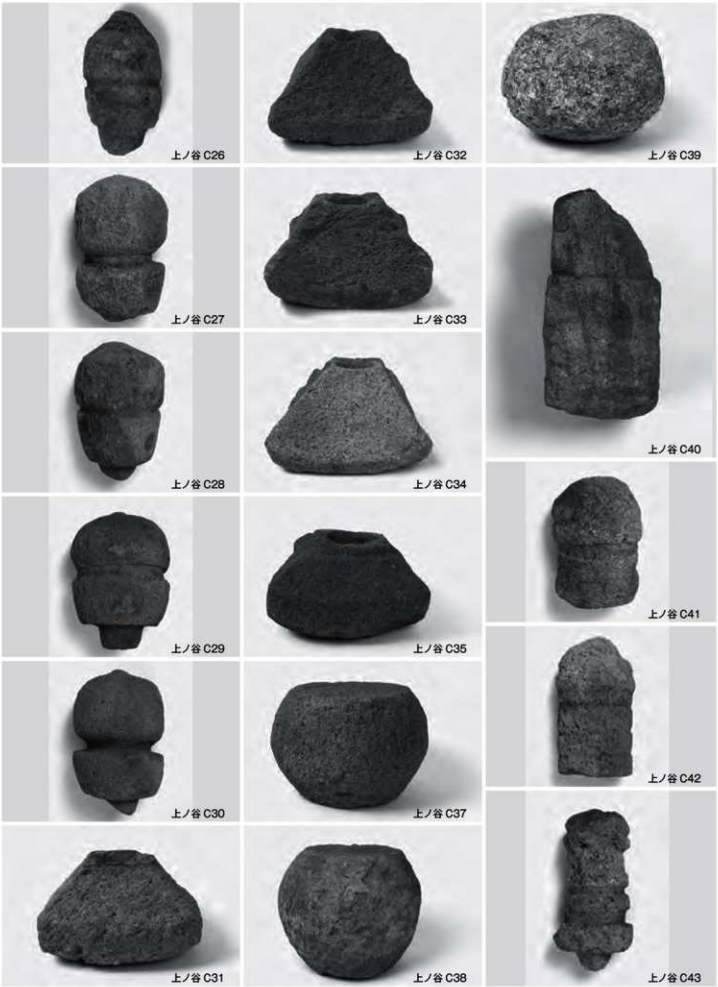


石塔個別写真 1（竹ノ畑・上ノ谷）

図版 38

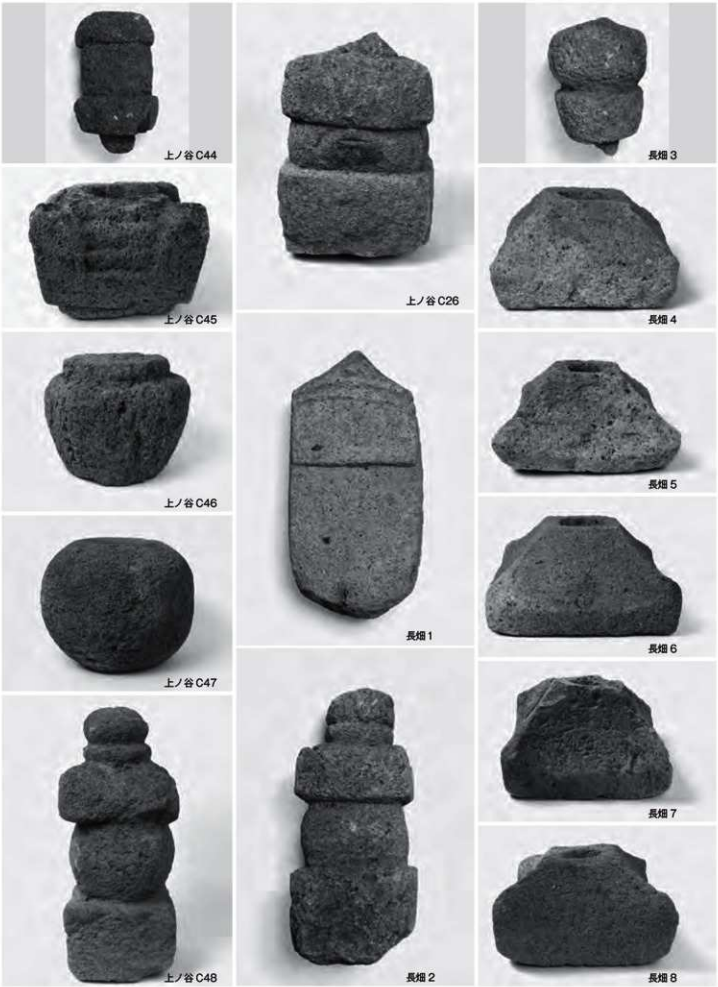


石塔個別写真 2（上ノ谷）

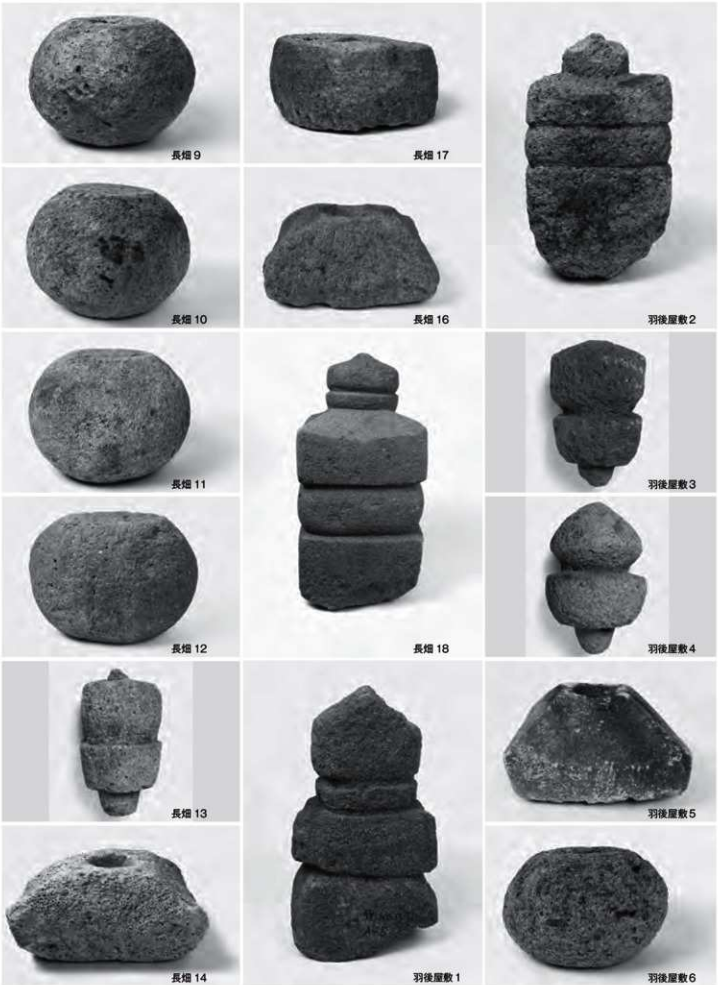

上ノ谷 C26
上ノ谷 C27
上ノ谷 C28
上ノ谷 C29
上ノ谷 C30
上ノ谷 C31
上ノ谷 C32
上ノ谷 C33
上ノ谷 C34
上ノ谷 C35
上ノ谷 C37
上ノ谷 C38
上ノ谷 C39
上ノ谷 C40
上ノ谷 C41
上ノ谷 C42
上ノ谷 C43

石塔個別写真 3（上ノ谷）

図版 40

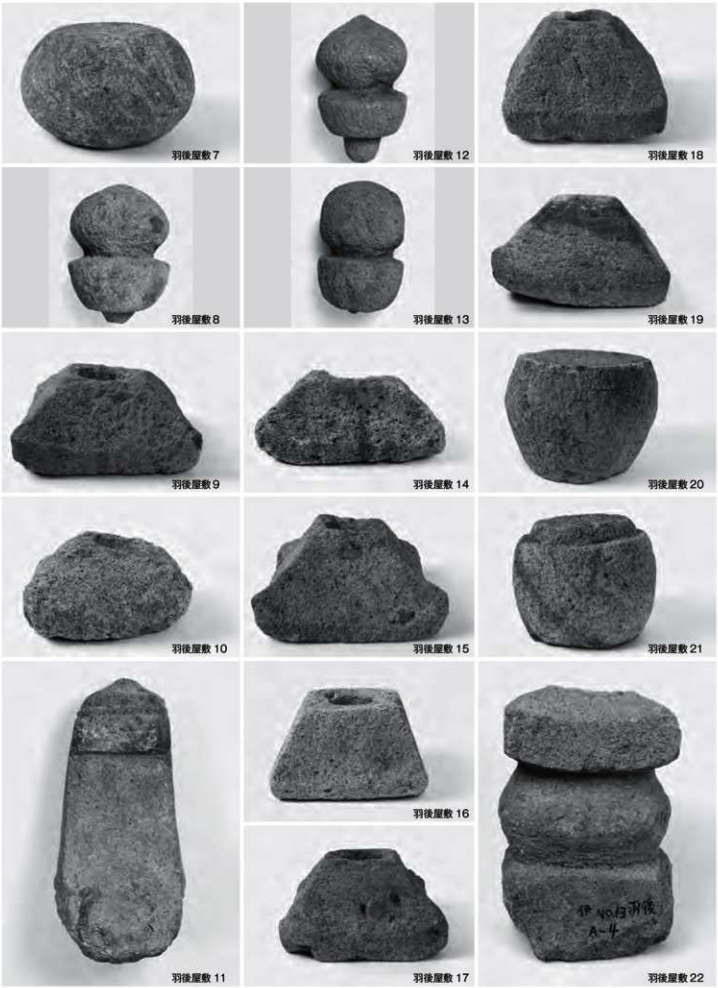


石塔個別写真 4（上ノ谷・長畑）

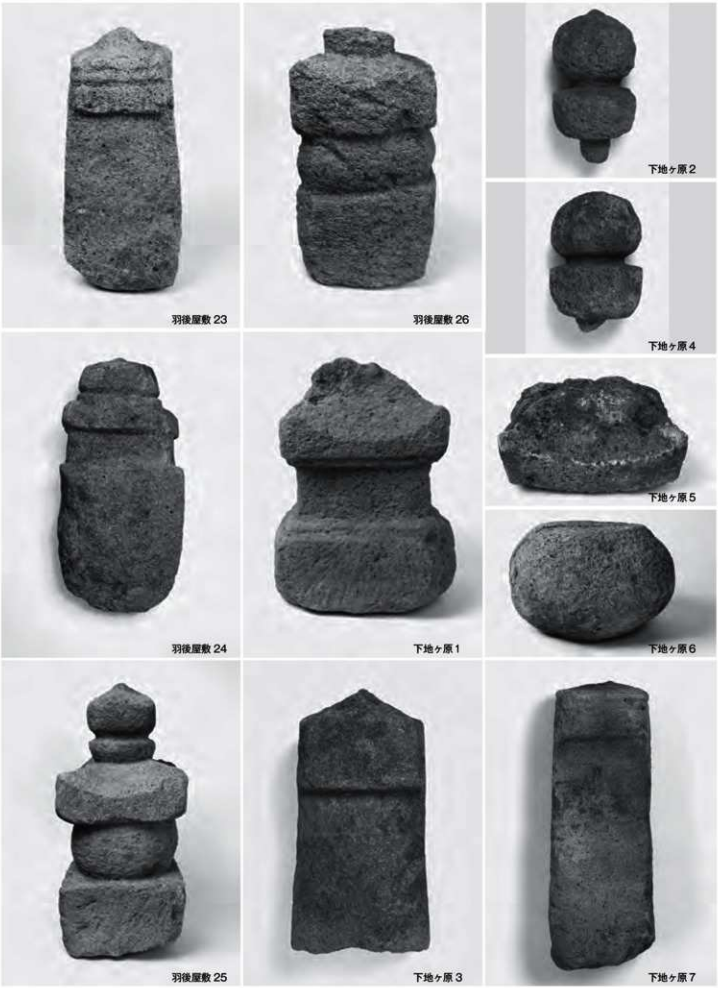


石塔個別写真 5（長畑・羽後屋敷）

図版 42

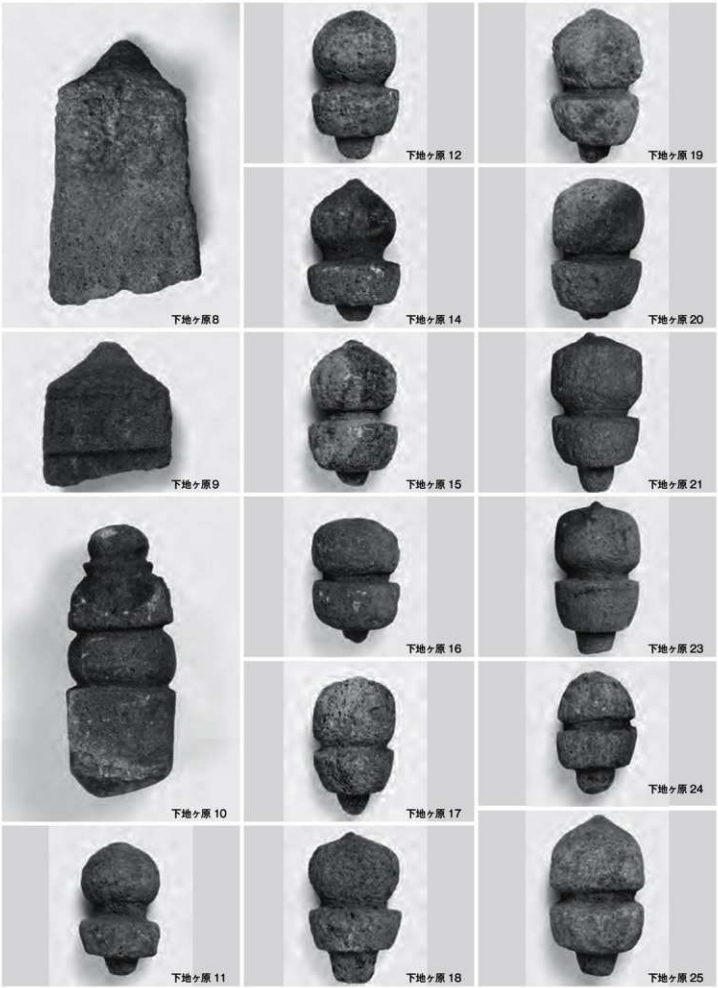


石塔個別写真 6（羽後屋敷）

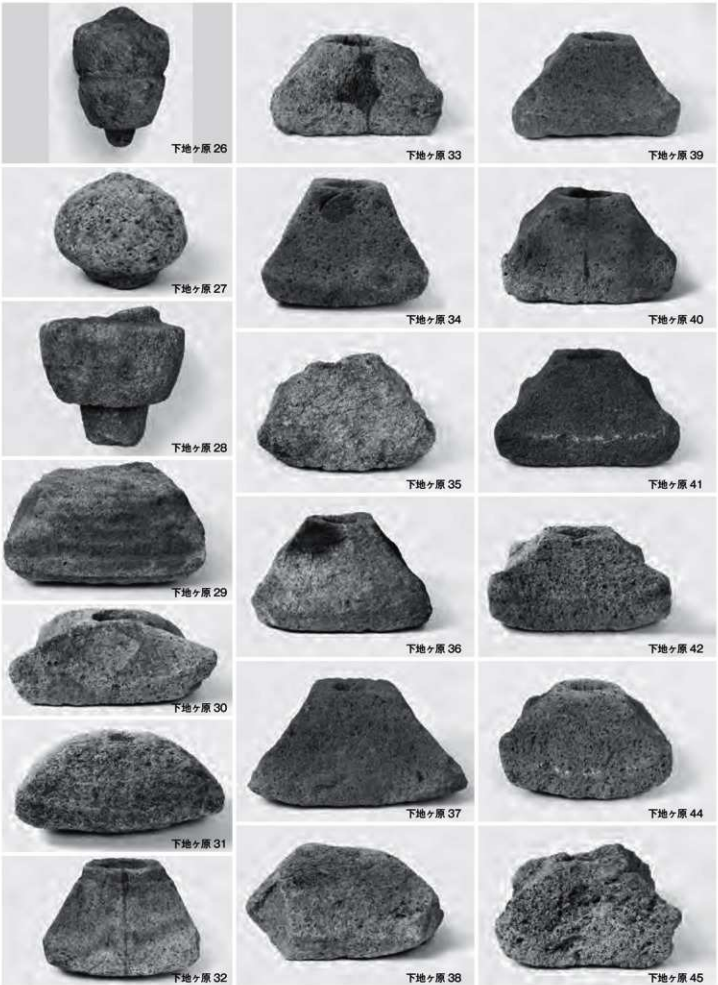


石塔個別写真 7（羽後屋敷・下地ヶ原）

図版 44

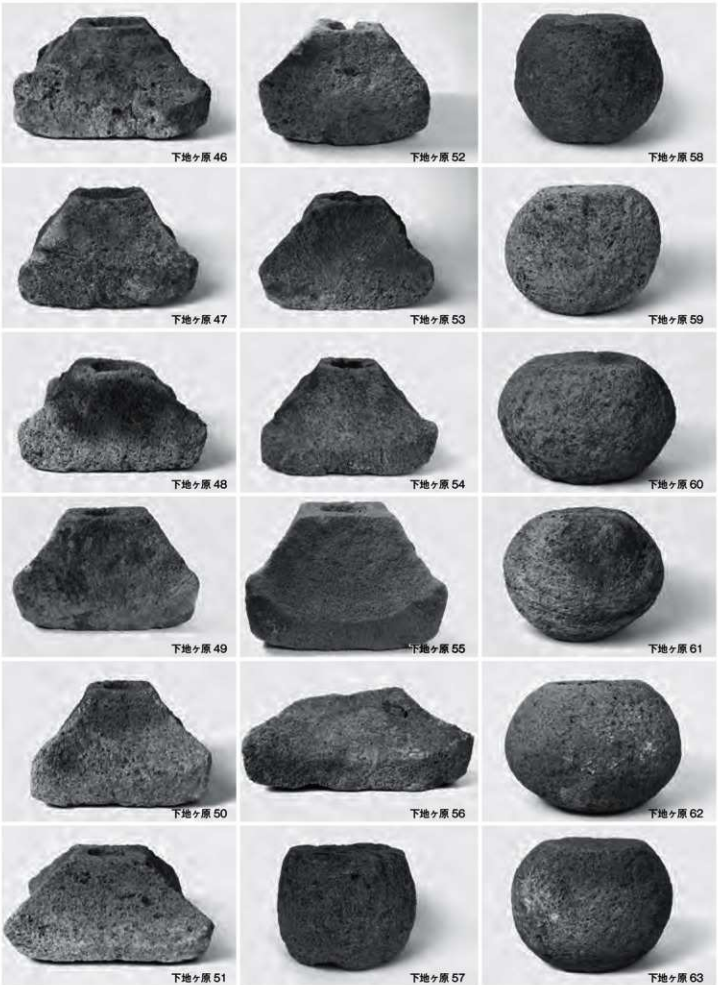


石塔個別写真 8（下地ヶ原）

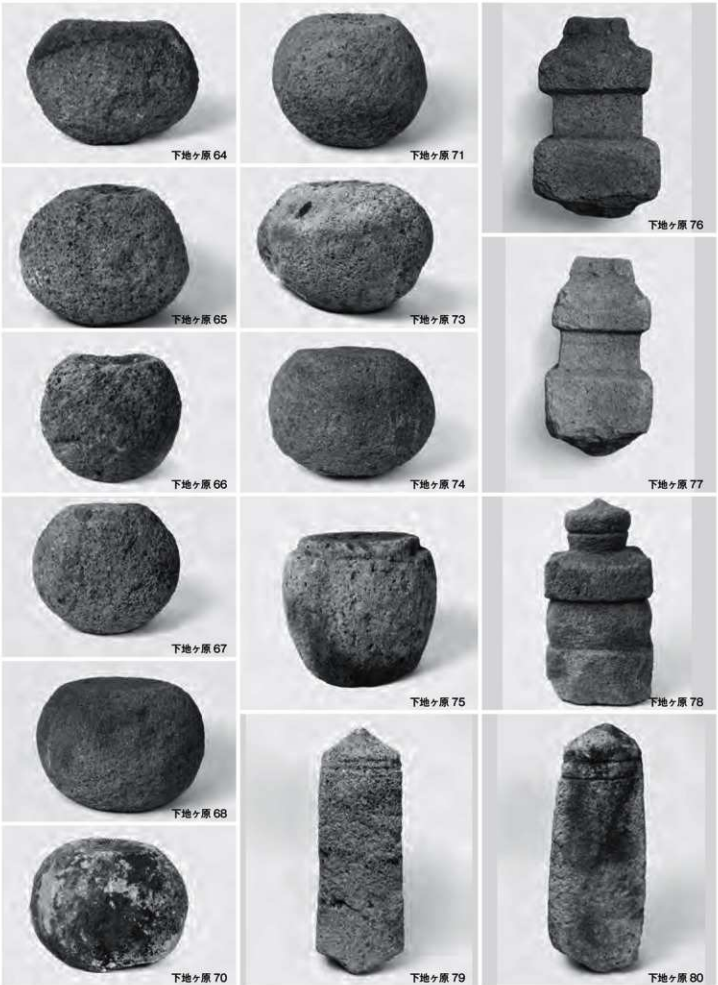


石塔個別写真 9（下地ヶ原）

図版 46



石塔個別写真 10（下地ヶ原）



石塔個別写真 11（下地ヶ原）

現在の石造物等

1　下伊良原観音堂

2　下伊良原観音堂内部

3　下伊良原高木神社境内

4　岩屋河内入口

報告書抄録

ふりがな	いらはらはち
書名	伊良原Ⅷ
副書名	伊良原ダム関係埋蔵文化財調査報告
巻次	8
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第２６２集
編著者名	飛野博文（編）　木下修　木村達美（みやこ町教育委員会）
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒838－0106　福岡県小郡市三沢 5208－3　☎0942－75－9575
発行年月日	西暦 2018 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
いらはらのせきぞうぶつ 伊良原の石造物	ふくおかけんみやこぐんみやこまち 福岡県京都郡みやこ町 さいがわしもいらはら・かみいらはら 犀川下伊良原・上伊良原	40214		33 度 34 分 41 秒	130 度 56 分 54 秒	2009.4～ 2010.3	－	県営伊良原ダム建設事業
いらはらのしょうどう 伊良原の小堂	ふくおかけんみやこぐんみやこまち 福岡県京都郡みやこ町 さいがわしもいらはら・かみいらはら 犀川下伊良原・上伊良原			33 度 34 分 41 秒	130 度 57 分 4 秒	2009.4～ 2010.3	－	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
116 頁表 2 参照					

遺跡の概要

県営伊良原ダム建設にかかり影響を受ける観音堂・地蔵堂と呼ばれる小堂 8 宇（高座・釜の河内・原・西の塚・下組・上組・中島：以上下伊良原、中村：上伊良原）、上伊良原・下伊良原両高木神社境内地をはじめ各所で造塔あるいは祀られた石祠・石塔、路傍に立てられた庚申塔・猿田彦石塔、そして板碑や五輪塔などの石造物を紹介した。小堂に祀られた仏像等については「伊良原－民俗文化財の調査－」（『福岡県文化財調査報告書』第 143 集、1999）によられたい。

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
JH	2117104
登録年度	登録番号
29	0003

伊良原Ⅷ

福岡県文化財調査報告書262集

平成30年３月31日

発行 九州歴史資料館
福岡県小郡市三沢5208-3

印刷 片山印刷有限会社
福岡県小郡市祇園１丁目8-15